334-67

川上和歌山縣知事閣下題字

和歌山縣師範學校長古市利三郎序

和歌山縣師範學校教諭春日賢一著

和歌山縣地誌

明治
44. 4. 20
内務

發行所　爲森商店

離地無人

辛亥

親晴題

序言

春日君其著和歌山縣地誌につきて、予に其序文を囑せらる。予は平素公務多端、加ふるに性來筆硯に熟せず。されば唯所感の一端を披瀝して、以て序文に換ゆる所あらんとす。

凡て學問は專ら智識智力の增進を目的とするものなれども、亦之れと同時に、大に感情の養成に資するものなり。而して地理學は能く、此兩方面を具備せり。即ち記憶力を養成し、多方面に對する歡察力を發達せしめ、又常に推理的考察力を練成すると同時に、地理學は日常吾人の生活上に密接の關係ある事項より成るものなれば、活社會の實相を知り、生活上必須なる、所謂常識を養成する上に、効果少からず。而して鄉里及自國の現狀を認識せしむるによりて、自己の屬する鄉土及び國土が、地文上人文上に

對する、正當の位置を自覺し、此に公平にして、着實なる、愛鄉心、愛國心を養成することを得るものなり。

地理學研究の順序は、其階段として、先づ鄉土の觀察、地方の研究を以て其出發点とせざるべからず。我國に於て、地方地誌の類、古來其數乏しからず。明治十七年舊內務省地理局に於て集蒐せる所のもの、既に二千數百部の多數に達したり。紀伊の地たるや、風光明媚、氣候溫和、地味肥へて、產業興り、加ふるに古來我國歷史上に、著しき關係を有する地方なれば、汎く天下に紹介すべき事項甚だ多し。而して、當國には、紀伊名勝圖繪の如き、紀伊續風土記の如き、名著ありと雖も、何れも極めて、浩瀚にして、容易に其要領を捕捉すべからず。又今日の科學的の見地に立ちて、編纂せられたるものにあらず。且つ遠き過去の記錄に係るものなれば、以て方今の事情を知るに足らず。近時に至りては、案內記に類するもの、又

は新聞雜誌等の斷片的のもの、存するありと雖も、直ちに全縣下の山河の形勢、氣候風土より、產業宗敎、敎育、交通等の各般の地理的事項につきて、適當に總覽すべき好著なきは、吾人の久しく遺憾とせし所なりき。春日君茲に見る所あり、公務の餘暇を以て、親しく縣下各地を跋涉して、實地に見聞し、具さに調査研究し、以て此著を大成せらる。蓋し方今社會の要求に應ぜるものと謂ふべし。此著固より完璧を以て稱すべからずと雖も刻下の時勢に應じて、社會を裨補する豈鮮少なりとせんや。

明治四十四年三月下浣

古市利三郎識

我國に於ける地理學の發達は、研鑽日猶淺ければ、是れを歐米各國の地理學の進程に比せば、僅かに其研究の端緒に達したりと謂ふべきのみ惟ふに日本地理の完成を期せんとせば、先づ各府縣の地理より研究を重ねざるべからず。然るに我國に於ける各府縣地理の充分に探究せられたるもの甚少し。是れ從つて我國に完全なる日本地理の編述せられざる所以なり。蓋從來と雖も、各地方地誌に關する書の上梓せられたるもの、所謂汗牛充棟も啻ならずと雖も、往々名所舊蹟の案内、旅行記體のものに止まり、予の寡聞なる未だ眞に地理學的に地方地理を研究したる恰好のものあるを見聞せず。是れ予の淺學菲才自ら惴らず、敢て本書を編述したる所以なり。此一小編著固より完璧なりと謂ふを得ざれども、地體の構造、地形の變遷、地質の大樣より氣象の概況に及び、更に戸口の狀態、交通の如何、産業の發達等最近地理學界の風潮に準據し、以て一面に於ては日本地理學編成の

一資料を提供し、一面に於ては世上此書に依りて本縣地理の概況を了得せられ、更に新研究の端緒たらしめんことを期せり。而して記述に際して從來地方地誌の一大缺陷たりし全國との關係全國に對する地位等に關しては勉めて是れを明かにせんことを試みたり。本書編纂に當りて、先輩諸賢の著書説明等に負ふ所大なりと雖も、然かも公務の餘暇を以て匆忙の間に成りたるものなれば、編者の意を滿たすに足るの探討と推敲とを爲すの遑なく、事實の細詳叙述の整齊等其他に於て、甚だ遺憾とする所多し。識者の一笑を博するに於て甘ぜん。されば本書の完璧に達するは前途猶遼遠たりと雖も、若し夫れ鞭韃自ら勵まし先輩知友の誘掖補導を得るあらば夫れ或は其目的を達するを得んか。

明治四十四年三月

著者識

和歌山縣地誌

目次

第一編　自然地理……五一〇頁

第一章　位置……一

第二章　疆域及面積……三

第三章　地形……四

第一節　山脈……四

一　和泉山脈……五

二　龍門山脈……六
三　梨子木山脈……七
四　生石峯山脈……七
五　高野山彙……八
六　鹿ヶ瀬山脈……八
七　果無山脈……九
八　大阪山脈……九
九　大塔山脈……一〇
十　那智山脈……一〇
十一　峯山脈……一一
十二　山勢括論……一二
第二節　河　川……一三
一　紀の川及其流域……一五
二　有田川及其流域……一九

三　日高川及其流域……二三
四　富田川日置川及其流域……二五
五　古座川太田川及其流域……二七
六　熊野川及其流域……二九
第三節　湖　沼……三四
第四節　海　岸……三六
一　紀伊水道沿岸……四〇
二　紀州灘沿岸……四四
三　熊野灘沿岸……四五
第四章　地　質……五一
第一節　太古大統……五四
第二節　古生大統……五五
第三節　中生大統……五六

第四節　新生大統……五九
第五節　噴出岩類……六四
第六節　鑛泉……六六
第五章　氣象……七七
第一節　氣溫……七九
第二節　雨量……八二
第三節　濕度……八六
第四節　氣流……八九
第五節　地震……九五
第二編　人文地理……一〇一（一〇一～一三四）
第一章　上世の住民……一〇一

第一節　石器時代……一〇一
第二節　佩玉時代……一〇四
第二章　疆域の沿革……一〇八
第三章　統治の沿革……一一四
第一節　大化以前……一一四
第二節　大化以後……一一八
第三節　明治時代……一二三
第四章　戸口……一二三
一　人口の密度……一二四
二　人口の增加……一二九
三　男女の割合……一三〇
四　人口の出入……一三一

第五章　政治區劃……一三三
第六章　宗　教……一三八
第一節　神　社……一四一
第二節　佛　寺……一四六
第三節　教會所及說教所……一五〇
第七章　教　育……一五一
第一節　初等教育……一五一
第二節　中等教育……一五六
第三節　實業教育……一五八
第四節　公學費其他……一五九
第八章　兵　事……一六一

第九章　交　通……一六五
第一節　道路及鐵道……一六五
第二節　水　路……一七一
第三節　郵便電信及電話……一七五
第十章　產　業……一七九
第一節　農業……一八一
第二節　養畜業……一九三
第三節　林業……一九七
第四節　水產業……二〇一
第五節　鑛業……二〇七
第六節　工業……二一三
第七節　商業……二三一

一　商業の中心……二四
二　商業機關……二六
三　金融機關……二八
四　會社事業……二一
第十一章　貯蓄……二四
第十二章　財政……二四
第十三章　衛生……二五
第十四章　人情風俗……二六
第十五章　處誌……二三
一　和歌山市……二三
二　海草郡……二七
三　那賀郡……二九
四　伊都郡……二九

五　有田郡……二一
六　日高郡……二五
七　西牟婁郡……二五
八　東牟婁郡……二九
和歌山縣地誌追加……二九
一　明治以前に於ける捕鯨業沿革……二九
二　明治時代捕鯨業の變遷……三〇
三　現今捕鯨の狀況……三〇
四　鯨の用途……三〇
熊野無煙炭……三〇
一　地質……三〇
二　炭坑……三一
三　炭坑の沿革……三四

四　稼業の狀況……三六
五　用途及販路……三八

熊野紀行

有名なる潮岬

一　紀伊の海岸……三一
二　本土の極南點たる潮岬……三三
三　潮岬の地質……三四
四　潮岬は昔は島……三六
五　潮岬の地形……三七
六　潮岬の海岸……三八
七　潮岬と港灣……三九
八　潮岬の氣候……四一
九　潮岬と黑潮……四四

十　潮岬と一等燈臺……四五
十一　潮岬と無線電信局及海軍望樓……四六
十二　潮岬と海外出稼人……四七
十三　潮岬とコモリン岬……四九
十四　名勝橋杭岩……五〇

和歌山縣地誌目次終

挿圖目錄

口絵（石版圖）

和歌山縣全地圖

別圖（全頁石版圖）

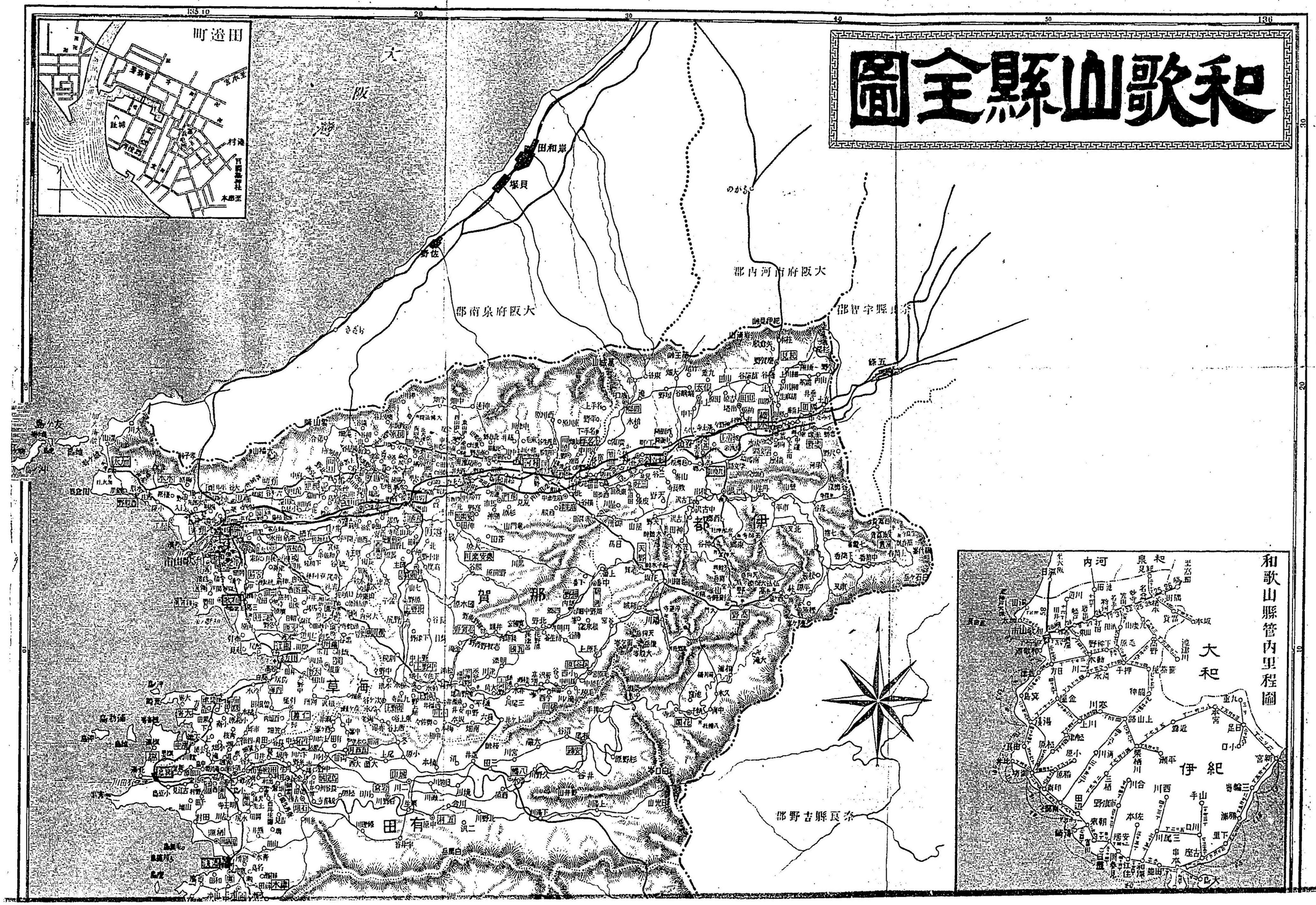
一 柑橘……一七
二 絹オル、漆器……二三
三 郵便貯金……二四
四 國税市町村税……二六
五 衛生……二五

水文挿入圖

一 日高川材木流し……二四
二 日高郡上山路高橋針金橋……二四
三 熊野川鎧岩……二三
四 上瀞峽入口……二三
五 下瀞峽……二三
六 潮岬燈臺……二四
七 橋坑岩……二四
八 熊野浦の光景……二四
九 龍神温泉……二五
十 湯の岸温泉……二六
十一 和歌山城……二六
十二 和歌浦妹背山多寶塔及觀海樓……二六
十三 高野山金堂……二七
十四 紀川寺本堂……二七
十五 有田川……二八
十六 湯浅町全景……二八
十七 有田郡に於ける密柑畑……二八
十八 箕島町密柑輸出場……二八
十九 湯浅海岸千疊敷……二五
二十 湯浅海岸四月島……二六
二十一 新宮町全景……二六
二十二 熊野速玉神社……二九
二十三 熊野坐神社……二九
二十四 夫須美神社……二九
二十五 那智瀑遠望……二九
二十六 勝浦港全景……二九

挿圖目錄終

和歌山縣全圖



大阪市附近

郡南泉府阪大

郡内河南府阪大

郡智宇縣良奈

郡野吉縣良奈

大海

大和

伊紀

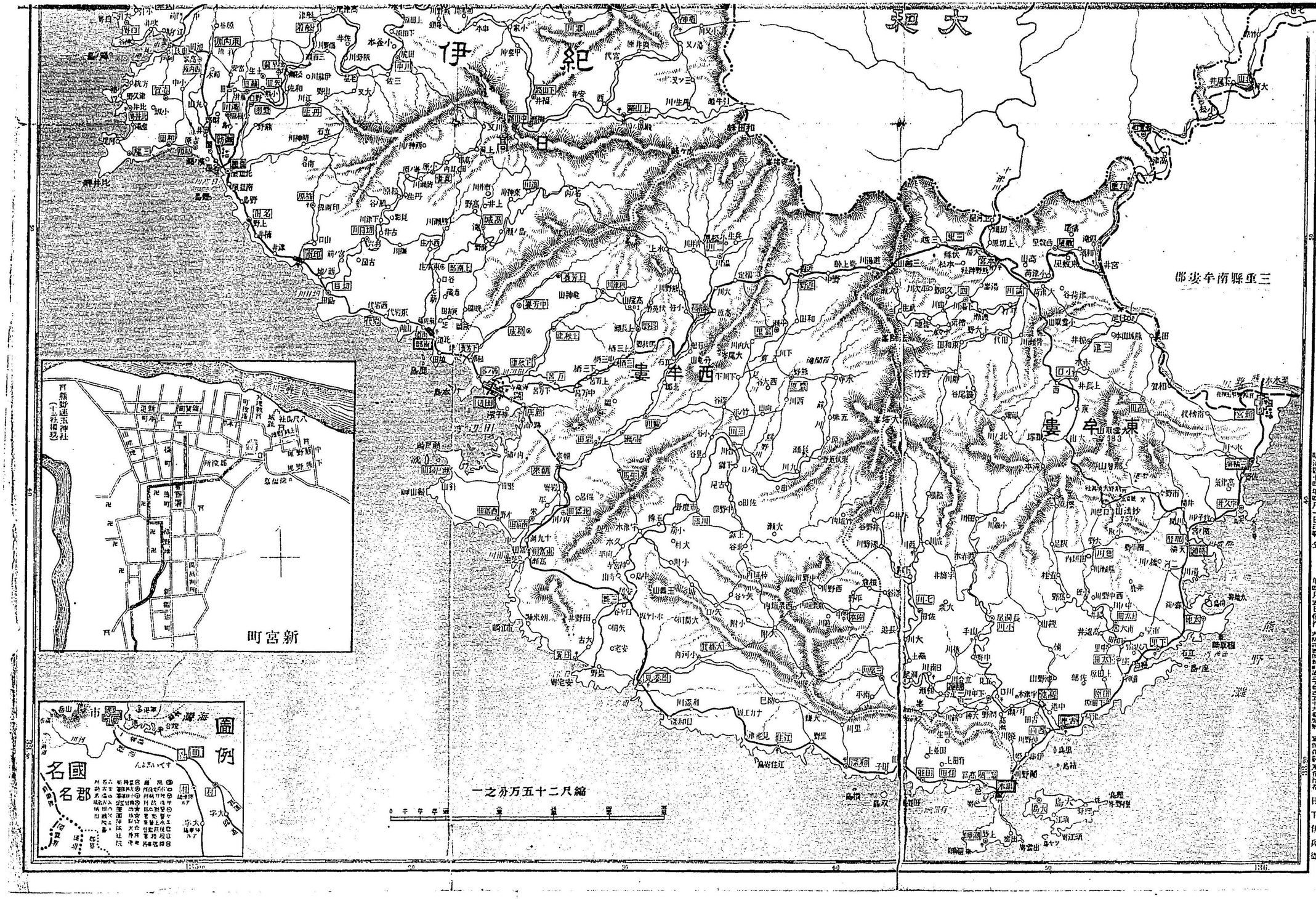
賀那

有田

和歌山縣管内里程圖

大和

伊紀



八 熊野浦の光景……兒玉
九 龍神温泉……佐藤
十 湯の岸温泉……佐藤

挿圖目錄終

明治四十四年四月一日印刷全
年四月五日發行 大阪市西成郡新淀村三百四十九番地 著作兼發行者 日下伊兵衛

和歌山縣地誌

春日賢一著

第一編　自然地理

第一章　位置

經緯度

和歌山縣は本州の中央より稍西部に偏して、紀伊半島の西南二面を領し本州島の最南端を占む。其四極は北緯三十三度二十五分（西牟婁郡湯崎村）より同三十四度二十二分（伊都郡紀見村）に至り、東經百三十五度（海草郡加太町）より同百三十五度五十九分（東牟婁郡三輪崎町）に至る。

位置

我國の中央緯度は、北緯三十五度にして中央經度は東經百三十五度なれ

他府縣に對する位置

海外各地に對する位置

ば、是れに比して僅に東南に偏するのみなり。されば本縣は我國に於ける自然の地理的中心に在ると謂ふも大差なしと謂ふべし。

今試みに他府縣の位置と比較するに、略同緯度にあるは三重縣及奈良縣の南半、德島縣香川縣、愛媛縣、高知縣の北半、山口縣の南半、大分縣福岡縣、佐賀縣等の諸縣にして、同經度に位するは大阪及京都の二府なりとす。本縣より南にあるは、臺灣及沖繩を除きて、鹿兒島縣宮崎縣、熊本縣、及長崎高知二縣の南部等僅かに五縣に過ぎず。

更に本縣の位置を海外各地に對照すれば緯度に於て略ば同緯度に位するは、アジア洲にありては清國中部、黃河楊子江の中間より、西藏の中部波斯の中央、アジアドルコのバグダード、ダマスク等の附近より、更にアフリカ洲に於ては、チユニス、アルゼリア、マロッコの各地より、マデイラ諸島を過ぎり、北アメリカ洲に於ては、合衆國の南部、氣候溫暖地味豐饒なる地方に當り、ミスシッピー河の下流、コロラド高原の南部、太平洋岸のローザンセルス市附近に當る、次に略同經度に位する地方は、北方に於てはウラジオストック

港の東方より、黑龍江と烏蘇利江との合流點なるハバロフスク市附近を過ぎ、ヤクーツク州の中部、世界最寒地ウエルホヤンスク附近なり。南方に於ては、太洋洲なるバブア島の西部より、南してオーストラリア大陸の殆んど中央部に當れり。

第二章　疆域及面積

境界

面積

和歌山縣は、北は和泉山脈を以て大阪府（和泉國泉南郡河內國南河內郡）に境し、東は紀伊山脈を以て奈良縣（吉野郡宇智郡）に連り、又新宮川を隔てゝ三重縣（南牟婁郡）に接し、西は友ヶ島水道を隔てゝ兵庫縣淡路國に向ひ、紀伊水道によりて德島縣に相對す。西南は紀州灘、南面は熊野灘にして、茫々たる太平洋に瀕す。廣袤大約東西十六里、南北二十八里ありて、面積約三百方里を有す。

今全國各府縣の面積の順位を見るに、本縣は我國府縣中の第三十位にあり、而して比較的相等しき面積の府縣を求むれば、京都福岡、福井石川等の府縣にして、前二者は稍大に、後二者は本縣より稍狹少なる面積を有す。又本

縣の面積を、我國最大の岩手縣の面積八百九十九方里一九に比するに約三分の一にして、我國最小の香川縣の面積百十三方里五〇に比するに、約二倍半の割合となる。

（三一〇方里六二あり今暫く縣統計書に依る）

第三章　地形

第一節　山脈

紀伊半島

紀伊半島は、本州中部に位し、遠く太平洋中に突出せる一大半島にして、其根部は北方紀ノ川及櫛田川の二大縱谷によりて界せられ、紀伊及志摩の全部、大和及伊勢の南部を含み、地形極めて複雜なる一大高原性の半島なり。

紀伊山系

而して此半島の全部を殆んど東西に並走せる紀伊山系は、本邦地體の南彎を形成せる一大山系にして、其先は四國島の中央を東走し來れるもの、一旦紀伊水道によりて陷沒し、再び紀伊半島の西岸に現はれ、東々北の方向に進みて、紀伊半島を横走し、志摩の小半島を形成せる後伊勢海によりて斷絶し、

遂に參河の渥美半島に連續し、遠く赤石山脈に到達する、南日本褶帶の骨格を構造するものなり。

山勢總說

本縣は紀伊半島の西南面を擁して、北より南に延長せる細長き國土にして、紀伊山系に屬する山脈の蜒蜿連亘する地方に當れるを以て、山嶽は國土の全面を蔽ふ。山脈の方向は、何れも大體に於て西々南より、東々北に連亘並走し、此間に幾多の同方向に通ぜる縱谷を形成し、こゝに人口稠密なる村落都邑を發達せり。然れども、水蝕作用によりて幾多の支脈及側脈を生成し、殆んど南北に走れる數多の谿谷ありて、山勢縱横に紛窮し、一見其系統を辨知し難きを見る。以下山脈の系統を十二項に分ちて細說する所あらんとす。

和泉山脈

一　和泉山脈、紀ノ川の北岸に於て、紀伊と和泉、河内二國との境界をなし、恰も屏風の如くに衝立せる一脈の連山にして、其西方は紀淡海峽によりて絶ゆると雖も、遙かに讃岐山脈と一列をなすものにして、淡路の南部山脈及友ヶ島は實に是れが連鎖をなし、加太の岬角に崛起して、東方大和、紀

伊河内の國境に至る迄、凡十四里の間に亘り、紀伊半島を構成せる一大要素たり。山勢一般に高峻ならずと雖も、大體に於て西方より東方に至るに從て其高度を加ふ。又南面は北面に比して稍急斜をなして紀の川谷に臨む。又此山脈中處々に、水蝕によりて横谷を形成せり。是れ此山脈の南北兩面の住民の重要なる交通路として利用する所なり。此山脈中主要點の高度を示せば次の如し。孝子越(一四米)井關峠(三〇米)根來山(一三三米)土佛峠(四六五米)葛城山(八五八米)七越山(九〇〇餘米)鍋谷峠(六六〇米)藏王峠(五四七米)紀伊見峠(三八一米)

龍門山脈

二　龍門山脈　紀伊川の南には略東西に並走せる四箇の山脈あり。龍門山脈は卽ち其一にして、蛇紋岩より成れる龍山門實に是れが盟主にして、他は主に剝性著しき結晶片岩の累層より成る。本山脈は西端は和歌山市東の矢田峠(八〇米)に起り、東に延びて那賀郡丸栖村に至り、野上川斷層によりて一旦中斷せらるゝと雖も、更に崛起して龍門山(七五六米)飯盛山(七四六米)となり、麻生津峠を成し、遂に伊都郡天野皮張地方の山嶺となる。和歌山市の南方名草山(二二三米)も亦此山脈に屬する一孤峯なり。

梨子木山脈

三　梨子木山脈　龍門山脈の南に於て、約二里の間隔を以て、全く是れと同一方向に走れる山脈にして、全部古生層の岩石より成る。西端は日方灣の北方に起り延びて雨山(四七九米)となり、高野山の西方梨子木峠(四八三米)に達す。此山脈は中間二個所に於て横斷せらる。卽ち一は那賀郡北野上村に於て、野上川斷層の横斷する所となり、一は同郡細野村に於て友淵川(藕淵川)の切斷する所となるを以て、全山脈は東部中部西部の三部に分たる。

生石峰山脈

四　生石峰山脈　梨子木山脈の南方に、是れと並走せる山脈にして、西端は有田川口に近く其北方に起り、東は遂に高野山に連る。延長十餘里に亘り、有田郡と海草那賀二郡との境界をなし、自ら有田川野上川の分水嶺をなす。山勢一般に東方に高くして、八百米乃至一千米の高度を有し、全部古生層より成る。主要なる峯は、天狗岳、後嶽、大股嶽、雨乞嶽等にして何れも千米内外なり。此他生石の峯(九九一米)黑澤山(五七〇米)等顯はる。此山脈の西部は分れて紀明神及藤白の二つの並行せる支脈となる。紀明神は南方にありて、紀明神山(三三九米)となり、箕島町の北に盡き、藤白支脈は其北方にありて、藤白峠

高野山彙

となり、更に海に入りて浦初島と名けらるゝ、地島沖島の二島に連る。

五　高野山彙　高野山は生石の峯山脈の東方一帶の諸山の總稱にして、海拔高距僅かに七百米餘に過ぎず。山中に廣袤東西十餘町南北數町の山中稀に見るの平野あり。東方の一部を除くの外、百乃至二百米の山嶺環行して、此中に所謂高野山の靈場あり。是れより四方に支脈を輻射狀に分岐す。大門（八三米）より南々西に走るものは、辻ノ茶屋より有田川の上流に至り、奥の院峠（八六米）より東南に向へるものは、紀伊大和の國境を南下して、陣ヶ峯（九〇七米）に達し、水ヶ峯（一一二四米）となる。又北方に分岐するものは天狗山となり東北方に巡りて伊都郡の東部に至りて終る。

鹿ヶ瀬山脈

六　鹿ヶ瀬山脈　生石の峯山脈の南に當り、有田川、日高川の分水嶺をなし、日高、有田二郡の境界線となれる山脈にして、概砂岩、泥板岩等より成る。西部は六百米以下の數多の小山脈に分れ、湯淺町の南方約二里なる鹿ヶ瀬峠（三三米）は其主要なる地點にして、是れより東北東に走りて大和國吉野諸山に連る。山姿概東部に至るに從つて高峻を加へ、直立千米以上に出づ

果無山脈

るもの少からず、白馬嶽（九四三米）城ヶ森（一三〇七米）笹の茶屋（一〇五八米）等は其著しきものなりとす。

七　果無山脈　西牟婁、日高兩郡の境上を、略東西に約九里の延長を以て走れる山脈にして、西方二郡の境上に聳立せる虎ヶ峯（七三八米）に起りて、笠塔峯（八六三米）安堵峯（七四四米）等の諸峯となり、紀伊、大和の境なる和田森（一一二二米）に至り、遂に本山脈の盟主たる果無山（一二八九米）の高峯となり、高峻愈加はり、東方十津川の横谷の爲めに斷絶せらる。本縣中無人の域と稱せらるゝ地方は、即ち本山脈の兩側に於て、幾多大小の支脈重疊せる深山大澤の境を謂ふものなり。本山脈は幾多の側脈を派出す。其主要なるものには虎ヶ峯より南方に分岐して槇山（八八六米）となり、汐見峠（五四七米）等となりて、遂に富田川口に至りて盡くるものあり。

大坂山脈

八　大坂山脈　紀伊、大和の境上に聳ゆる高峯、和田ノ森より分岐して、南々西に約十二里に亘りて相連れる山脈にして、富田川、日置川の分水界をなす。中邊地街道是れに當りて、最も難關とする所なり。其主要なる地

點を擧ぐれば、大坂峠（五五六米）十丈峠（六二六米）大尾峯、分龍山（七一七米）麥粉森（六〇二米）宇津木坂（四七二米）富田坂（三八八米）等是れなり。

大塔山脈

九　大搭山脈　果無山より南方に分出して、東西牟婁郡の境上を走り、熊野川、古座川の二川と、日置川との分水嶺となりて、延長約十四里に達する廣大なる山嶺にして、果無山脈と同じく無人の境少からず。大塔峯は實に其中心點なり。今本山脈中の主峯を北方より順次に擧列すれば、高尾峯（一二〇米）小廣峠（五五九米）笠塔森（九七五米）大塔峯（一二七米）大森山（八〇九米）の諸峯あり。

那智山脈

十　那智山脈　日置川の中流、廣見川の東方に起り、東方、法師ヶ森となり大塔峯に連り、更に東走して大河山（八六八米）となり、東牟婁郡の中央を東々南に走りて、那智の諸山に達し、尚東に延びて十津川の岸に盡くるものなり。此山脈の東半は、山勢甚しく錯雜紛亂して、其系統の一見明白を缺く處多し、此山脈の支脈としては、大河山より南方に一脈あり、古座川と、其支流なる小川との分水嶺をなすもの即ち是れなり。又那智山より北方に分出するものは、越前峠（八二七米）となり、小雲取山、女法森（六六三米）等となりて、遂に十津川岸に

到りて盡く。

那智山は東牟婁郡の中央より、稍東方に位して、幾多峻々たる山嶽の集せるものゝ總稱にして、帽子山（八六一米）大雲取山（八三八米）妙法山（七七八米）等の諸峯あり。東西牟婁郡の地質は多くは砂岩泥板岩等の第三紀層に屬するものなれども那智山以東は全く石英粗面岩にして噴出岩より成る。

峯山脈

十一　峯山脈　西牟婁郡周參見村附近より、海岸に並行して東方串本町附近に至る、約六七里に亘る一帶の山脈にして、山勢概して卑低にして、峯山を以て最高峯とすれども、尚五百七十一米に過ぎず。谿谷は海岸に向て開き互に相並行するを以て、海岸に面する部分は山側恰も鋸齒狀をなせり。

山勢括論

十二　山勢括論　今本縣に於ける山勢を通覽するに、略東西を指せる和泉山脈、龍門山脈、梨子木山脈、生石の峯山脈、鹿ヶ瀬山脈、果無山脈、那智山脈、峯山脈の八箇の横斷山脈と、略南北を指せる大坂山脈、大塔山脈の二箇の縱行山脈とは地體を構成する主要なる山脈にして、其高度は海岸に低くして、內地に至るに從つて高峻となる。

即ち海岸に近き處は概五六百米以下なれども漸く内地に入りて紀伊大和の境上に及んでは千有餘米に達するもの遠近相並ぶ。縣内にありては城ヶ森(七一三〇米)を以て最高峯とすべく、紀和の境上にありては果無山(九一二八米)最も高し。今試みに八百米以上の山嶺を數ふれば其數二十七個あり。又六百米以上を有する山峯は、以上の外尚約十個を數ふべし。之を要するに全土概五六百米より千米内外の山嶺を以て蔽はれ、千四百米以上に出づるもの一も是れ無し。されば本縣は地形上。垂直的肢節は比較的少くして、一帶に一大高原性を有する地體なりと謂ふことを得べし。

是等の山脈は、もと南北の方向に襲來せる造山力によりて形成せられたる山脈なりしが、地體構造の年代極めて古きを以て、爾來悠久の間絶ねず作用せる風水の侵蝕力は、此山體鉛削彫刻して、該山脈に或は直交し、或は斜交し、幾多側脈を左右に分岐し、側脈は又更に數多の小側脈を生じ、或は個々の孤立獨特の小山塊を現出せしめたり。されば熊山山脈は、畧東西に走り、侵蝕山脈は是れに交叉して、共に地盤の骨格を形成するに至れり。特に縣の

南半、東西牟婁郡の地方に於ては、侵蝕作用を蒙ること最も甚しく、且地層の方位混亂し、加ふるに種々の噴出岩は此間に進發し、河川は其水系を此間に散布して、一谷にして縱谷横谷を兼ぬるもの敢て珍らしからず。從て山勢に明確なる系統なく、僅に水蝕の作用を免れたるもの、或は小山脈をなし、或は點々獨立の山體をなすもの多し。田邊町の東北なる高尾山の如きは其獨立孤峯の一適例なり。

縣内に丘陵地、臺地、平地等の地形なきにしもあらざれども、縣内概山嶽起伏して海濱に及び、海岸は常に數十尺の絶崖をなして、太平洋の波濤と戰ふ、中部以南の海岸に於て殊に然りとす。

第二節　河　川

本縣は我國に於て、雨量多き地方に屬し、且國土は概ね森林に蔽はるゝが故に、水源の涵養に著しき好影響を與へ、到る處大小の河川、潺々として流るゝを見るべし。然れども國土の幅員甚狹く、又地形は海岸に向て急に傾斜

せるを以て水流は概ね急速にして、長大の流長を有するもの少し。河流には縦河と横河とありて、北部の河流は、概ね山脈の趨勢に從ふて、縦谷をなして流るゝ縦河なれども、南部にありては横谷をなして畧南方に向て流るゝ横河なり。是れを流向より見るときは、縣内の河川は紀伊大和二國の境上附近を、水源地として、副射狀に海に向て流下せり。

本流及支流の割合

河流の主なるもの、北に紀の川あり東に熊野川あり。其他有田川、日高川等の大流此間に流る、凡て主要なる本流十二流あり。此流長約壹百九十里に及び是等十二條の本流に屬する支流も亦少からず。其主要なる支流實に四十一流ありて、此流長約百十五里あり。されば主要なる河流の、本流支流の流程は、總計三百五里に達す。今此結果によりて、本流に對する支流の割合を見るに、本流一條に對して支流三・六條となり。其流程の延長を比較するに、本流二里に對して支流一里强の割合となる。是れ本縣の河流が如何に支流に乏しきかを察するに餘あるものにして、是れ全く河流が、狹長なる山間の溪流的性質たるものなることを、遺憾なく表示するものなり。今

主なる河流

十里以上の流長を有する河川を列擧すれば左の如し。

紀ノ川	一四・〇一
有田川	二七・一八
日高川	二八・〇〇
富田川	二五・〇〇
古座川	一六・〇〇
日置川	二〇・〇〇
太田川	二二・〇二
新宮川	一一・一五
北山川	一四・〇〇
野上川	一二・〇〇

紀の川

一　紀の川及其流域

紀の川は其上流を吉野川と謂ひ、水源は紀伊、大和、伊勢三國の境上に聳ゆる、大臺原山巴ヶ淵に發し、東々北より西々南に走り、吉野郡を貫流して紀伊に入る。此溪谷は東方伊勢の櫛田川の谷と相

紀の川流域

接して殆んど東西に紀伊半島を横斷する一大斷層線に沿ふて生じたる、地溝上の縱谷にして、川は本縣に入りては著しき曲折を見ずして、和泉・龍門の二山脈の間を西方に向て流る。此間左岸は常に山脈に接して、平地少けれども、右岸には和泉山脈との間に、第四紀層より成る臺地又は平地稍廣く發達し、又よく河成段丘(リバーテレース)の形成せられたるを見るべし。伊都郡高野口町以下に至りて、始めて其兩岸に幅狹き沖積地を形成し、粉河町附近に於ては、愈廣濶となり。岩出町に至りては、地形大に開け是より以下は河身數條に分岐して、盛に沖積的平地卽河成平原(リバーフレイン)を築成しつゝ、和歌山市附近に於ては、實に其廣袤約八方里を占むる肥沃なる平原となる。是れ本縣最大の平野なりとす。全流長約二十八里、其中縣內を流るゝこと約十四里にして、其支流には野上川(里十二)丹生川、名手川、靜川等あれども、野上川を除くの外は、何れも細流にして、謂ふに足らず。支流合せて十一流。此流程約二十七里あり。

紀ノ川の流域は平地の割合最も多く、土地肥沃にして、且耕耘及運搬に便利なれば、生產力甚大にして、人民の意氣大に振ふ。又交通上の要路に當り、

富士崎

北方京阪方面に通ずるもの、東方大和・伊勢等の方面に入るもの、皆此流域を通せざるなし。古來此地方には住民夙に繁殖して生活せることは、著しき事實にして、上古吾人の祖先の遺跡の極めて多く、畿內及關東地方と共に我國に於て有名なる處なるに徵して、如何に此地方が氣候地味地形等自然の地理的要素が、人間生活に好適せるかを示すものなり。今日此河流に添ふて、橋本、高野口、妙寺、粉河、岩出、和歌山市等の名邑都市相並びて榮へつゝあり、而して人口の稠密なること縣下第一にして、卽ち此河の流域面積凡七十六方里にして、全縣面積の約十分の二・五を占むるのみなるに、人口は是れに反して、約三十八萬人を抱容し、實に全縣人口の約十分の五・四を占有し、一方里に對して五千人の割合なり。

紀の川沿岸の勝地

富士崎　粉河町の東南約十五六町、紀の川の北岸にあり。奇石怪岩巉然として嶇起し、岩頭に松樹多く、枝を連ねて深潭に枕むの處、辨財天祠あり。河中に長百步許の島あり。是れが爲めに、風趣一段の光彩を添ふ。

其側に富士山に似たる岩石、水中に峙立す。よりて此處を富士崎と名くと謂ふ。紀の川の流れ淙々として、島を廻りて流るゝの處、輕風春帆を吹き送るの狀眞に一幅の活畫圖なり。

妹山脊山

妹山脊山　伊都郡名手村の東約二十町紀の川の兩岸丘陵相迫りて河水を壓し、所謂峽流をなす處、特に名けて妹脊川と呼ぶ。南岸にある丘を妹山と謂ひ、低平なる芝生の丘陵にして、一に長者屋敷とも謂ふ。古此附近に、雛子長者と謂へる富豪の者あり。此地の風趣を愛して、山を拓きて平地となし、居を構へ、絲竹管絃の遊びをなしければ、いつとなく長者屋敷と呼びなしたりと謂ふ。北岸にあるを兄山と謂ふ。今は脊山に作る、二山の中間の河中に、一つの小島あり。其形舟に似たるより、舟岡山と謂ふ松樹亭々として枝をさし交はして水に臨み、流水岩にせかれて水聲高く碧潭の色は藍よりも青く、春花秋月風情謂はん方なし。古孝德天皇の御代、詔して此地を以て畿內の南界とせらる。中古に至りて貴顯の此地に遨遊して、詩歌に詠吟せられてより、妹脊山の名普く天下に喧傳せられ、近

畿に於ける一名勝たるに至れり。

萬葉

麻衣(アサゴロモ)着者(キレバ)夏樫木(ナツカシキノ)國之(クニノ)妹脊之山(セヤマ)二麻蒔吾妹(ニアワキモ)。

藤原卿

むつまじきいもせのやまと知らねばや
初秋霧の立ち隔つらん。

讀人知らず

朝みとり霞渡れる絕間より
見れともあかぬ妹脊山かな。

中納言國信

行かへり心まとわす妹脊山
思ひはなるゝ道を知らはや。

有田川

二　有田川及其流域　有田川は古名を安諦川と謂ふ。阿瀨川とも謂ひしは、其訛りなるべし。源は高野山奥の院に發し、初め南流して、大瀧に

て一大瀑布をなし、後西流して有田郡に入り、生石の峯山脈と、鹿ヶ瀬山脈とのなせる縦谷を、西々南に奔流し、四大屈曲と幾多の小曲折をなして、郡の中央を貫流し、數多の支流を南北より加へ、恰も郡の大動脈の觀をなして、全く郡の死命を制するの趣あり。金屋以下地形稍開け、兩岸に冲積的平地を作り、遂に箕島町の河口港に至りて海に注ぐ。此流長二十七里餘、流域面積約二十五方里にして、全縣面積の十二分の一を占む。支流には修理川、湯川川等あり。修理川は白馬嶽に發して西流し、石垣村大字修理川に於て本流に入る。湯川川は大和の境上笹ノ茶屋の西方八幡谷に發源し、八幡村大字清水に至りて本流に合す。

有田川は古來香魚の鮮を以て名あり。紀伊名勝圖繪に、有田川鵜飼の圖あるを見れば、往時は今より一層の盛況なりしならん。有田川の谿谷は紀ノ川の谿谷につぎて、縣内に於ける重要なる地域にして、地味豊沃物産饒多なれば、人口の密度亦從つて大に、村落田園遠近相望むべし。特に紀州密柑の本場所として、其名海内に聲く。箕島河口港は實に是れが唯一の輸出港

として存在せり。

有田川沿岸の勝地

有田川　土城丈夫

黄柳渡頭雲影寒。　清流不速受舟寛。
香魚秋老肥如鐵。　木葉落時吹浪團。

小出元明

兩岸霜風一葉舟。　畫圖難寫滿川秋。
急湍飛沫夜來雨。　魚自黄柑影裏流。

鮎瀧

鮎瀧　石垣村大字松原に在り。松原の瀧又は大瀧とも謂ふ。有田川の急湍こゝに至つて兩岸相迫り、巨巖河中に兀立して流を遮ぎり、白浪雪を卷きて散沫霧を降らし、奔流の勢地軸震動するの趣あり。初夏の頃、香魚の上流に上らんとするもの、簇々此處に集まり、相競ひて激流を遡らんとす。其飛躍の狀甚奇なり。漁人其集まるを窺ふて、網を以て之れをす

次の瀧

くふ。古是れを鮎汲みと呼べり。

次の瀧　又は延坂の瀧とも謂ふ。五西月村大字延坂にあり。水源は生石が峯に發して、此處に至りて高さ二十七丈、幅四間の瀧となり、末は早月谷川に入りて、遂に有田川に合す。

白糸に散る紅葉ばをぬきとめて
秋の錦をつぎ〳〵の瀧

田中雪峯

有田川の流域には到る處に瀑布あり。純白の瀧　脇裏の瀧　姥が瀧　不動瀧　黒藏が瀧　銚子が瀧等枚擧に遑あらず。

日高川

三　日高川及其流域

日高川は其源を笹の茶屋の南谷、日高郡龍神村の山中に發して、果無山脈鹿が瀬山脈との縱谷を紆廻屈折して、亥子川　丹生野川　笹子川　小又川　古藪川　本谷川　鷲野川　三津の川等の支流を合して、西に流れ、遂に塩屋村大字北塩屋に至りて海に朝す。流域凡四十五方里　縣の面積の約七分の一を占む。流程の直徑は僅に十里に過ぎ

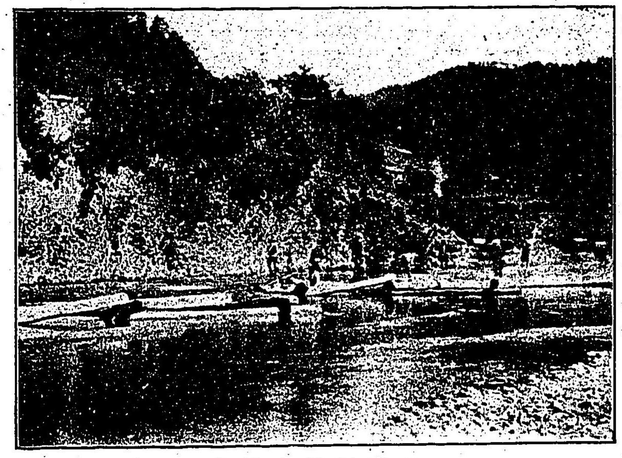
切目川
南部川

ざるも、延長實に二十八里の長きに及ぶ、管内に於ける流程の大なるものは、此川を以て第一とす。然れども舟運の便あるは、下流船津以下僅に五六里の間に過ぎず。此川の流域は、一般に高嶺峻嶽相連亘して、平地極めて少しと雖も、其下流矢田村字入野以下に於て、南岸に河成平原を築造して、其面積實に一・二方里を有し、紀の川平野に次ぎて、縣下に於ける著名なる平野なり。されば田園よく墾けて、其中心に遂に御坊町の如き、繁盛なる都會の發達を見るに至れり。

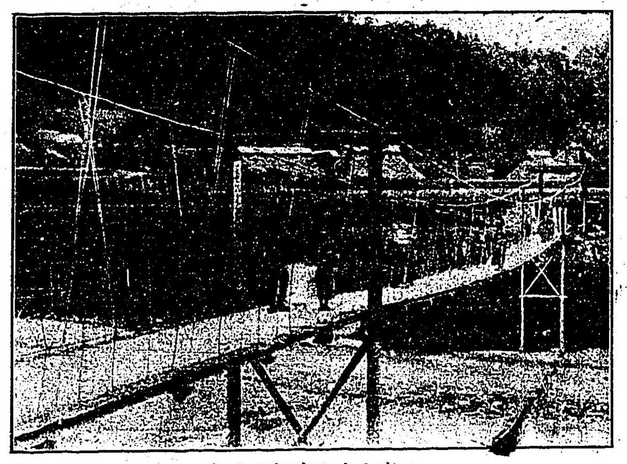
日高川の南に、切目川、南部川の二流あり。皆南々西に向て流れ、共に流長僅に七里に達するのみにて急流なり。河口に近く冲積地を形成すれども、何れも狹小にして謂ふに足らず。南部川口にあるものは面積稍廣し。

日高川沿岸の勝地

日高川



日高川材木流し



日高上山路高橋針金橋

日高川の五瀧

さしのぼる日高の川も解けやらで　　正徹
　こほりを砕く紀路の旅人。

あしたづも我が船よばふ聲添へよ　　瀬見善水
　しぐれふりきぬさもあらなくに。

渡し呼ぶ女すさまじ秋の暮　　風香

日高川の五瀧　日高川は急湍激流多くして、上流は殆んど瀑布の狀を呈し、水岩を搏ちて飛沫冲天の勢あり。古來黑嶋瀧　鳴瀧　大瀧　天婆伊の瀧　手早の瀧を、日高川の五瀧と呼稱し、光景頗る壯觀を極むと雖も、惜哉地僻遠にして、交通の便至りて乏しく、是れが爲めに天下の名勝も、其名を聞きて、來り探る者殆んど稀なり。

富田川

四　富田川日置川及其流域　富田川は源を紀和の境上、和田の森

日置川

に發して、トダ川となり、右岸より來れる支流中川鍛冶屋川を合し、左岸に石船川を受容し、遂に南富田村大字中に至りて海に注ぐ。流向は殆んど西牟婁郡の中央を、西南の方向を取りて、著しき紆曲屈折を見ずして、果無山脈の支脈汐見峠の山脈と、大坂山脈とのなせる谿谷を流通す。延長約十里あり。下流は市の瀬村以下兩岸に、帶狀の狹き沖積地を形成し、河口なる南富田村に至りては、約半方里に亘る極めて肥沃なる平野の發達を見る。凡て急流にして舟運の便少なし。

日置川は西牟婁郡の中央より、稍東部に偏して、大坂山脈と大塔山脈との間の谿谷を、概南々西に富田川に並行して流るゝ大河にして、上流二あり。一は大和の國境和田の森に發し、一は大和の果無山に發源し、近露村に至りて相合し、廣見川となり、富里村下川下に至りて、左岸に一支流を加へ、畧南流となり、三川村に至りて前野川、將軍川の二大支流を得て、流勢愈大となり、下流は多大の屈曲をなして、日置村大字日置に於て海に注ぐ。河口に近く左岸に當りて、猫額大の平野を建設せるの外些の築土作用あるを見す。流

秋津川

長約十三里あり。

秋津川は西牟婁郡の西北部を流るゝ小流にして、會津川又は田邊川とも謂ふ。此川は槇山の西方の谿谷を流るゝ三栖川と、日高・西牟婁二郡の境上虎ヶ峯越より發する秋津川と、南北より相合して、此處に田邊の沃野を形成し、遂に田邊町を貫きて田邊灣に入る。流長僅に五里に過ぎずと雖も、其平野は縣の南部第一の廣濶なる大平原にして、人烟最も稠密なる處なり。三栖川の谷は所謂中邊地の通路に當りて、古來重要なる地方なりき。

以上富田・日置・秋津三河の流域は、約五十七方里に跨りて、縣の全面積の約二割を占むれども、域内多くは山嶽を以て蔽はるゝを以て、人口從つて少く、全縣の人口の約一割を容るゝに過ぎず。

古座川

五　古座川・太田川及其流域　古座川は東牟婁郡の西南隅を廻流する長流にして、源を大塔峯及大河山に發し、南に向て横谷を流れ、七川村大字佐田に至りて、右岸に平井川を入れ、峯山脈の北麓に於て、佐本川を合せ、是より此山脈に添ふて、縱谷をなして、流向を東々南に變じ、小川村大字樫原に

於て小川を容る。小川は最大なる支流にして、那智山脈の中部に發源し横谷をなして南流し、此處に至りて本流に合す。長さ五里あり。古座川は河身是より廣濶となり、高池町を過ぎ、古座町に於て古座灣に注ぐ。全長凡十二里あり。急流にして、夥しき小曲折をなして流るゝと雖も、下流眞砂以下五里の間舟運の便あり。

今熟々本河道の通ずる地體を觀察するに、峯山脈北麓一帶の縱谷は、單に一の侵蝕作用にのみよりて成れるものにあらずして、此縱谷は東方太田川の河口、浦神灣に連絡せる、一の地溝帶にして、此間に亘りて一直線上に添ふて、周圍の第三紀層に屬する、頁岩、砂岩、蠻岩等を貫きて、石英粗面岩の噴出あり。

又處々に鑛泉の湧出を認め、且浦神灣が熊野浦リアス式海岸中にありて、獨りフイヨルド式峽灣を形成せる等の事實を綜合して考察すれば、彼紀の川の縱谷と同作用に因る所の、南北の方向に加へられたる造山力によりて、生ぜる一の地溝帶中の縱谷たるべしと謂ふ。

太田川

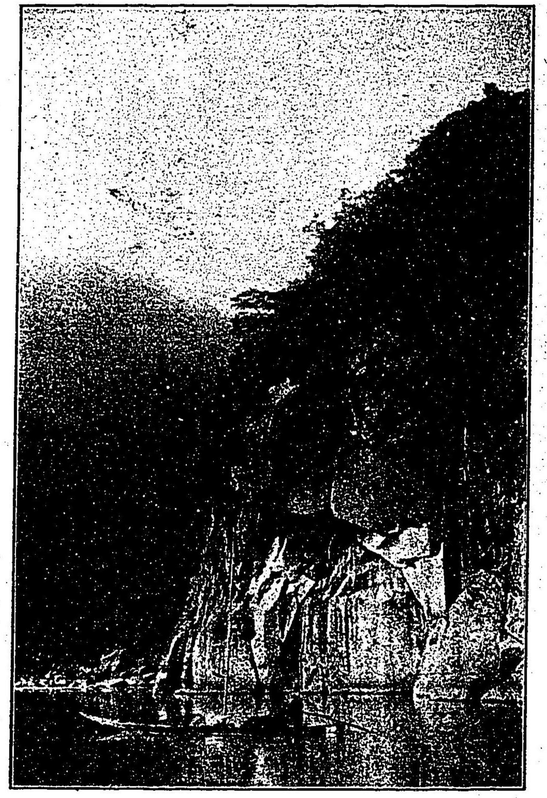
太田川は源を那智山西方の谿谷に發し、初めは南流して、色川村大字高野に於て、右岸に支流高野川を加へ、方向を東南に轉じ、下里村に至りて浦神灣に注ぐ。長さ僅に五里に過ぎず。

古座太田二川の流域は、東牟婁郡の南半一帶に亘りて、那智山脈以南大塔山脈以東の地にして、其面積約五十方里に跨り、縣下全面積の約十分の一・四を占め、同郡中人口最も密にして、熊野地方に於ける重要なる地域なりとす。

熊野川

六　熊野川及其流域

熊野川は其上流を天之川と謂ひ、源を大和國大峯山脈中の大峯山に發し、支流洞川を合せ、西南流し、坂本に至りて十津川となり、全く南に轉じて一大横谷をなし、山嶽重疊の間を縫ひ、著しく小曲折をなして流れ、左右に紫園川　旭川　寒之川　蔦の瀧川　出合川等、幾多の支流を收容して、遂に本縣に入り、三越川　請川　北山川　小口川等の長大なる支流を加へ、南東に轉流して、新宮町附近に至り海に注ぐ。一に新宮川とも謂ふ。全長約三十四里　此中奈良縣管内にあるもの二十三里、本縣管内にあるもの約十一里なり。此間兩岸毫も平地を見ず、全く一大峽谷をな



熊野川鐘岩

熊野川の奇勝

し我國に於ける著名なる横谷の一適例なりとす。

熊野川流域の勝地

熊野川　熊野川の峽谷は、古來九里八丁なりと謂へるより、世に九里峽とも謂ふ。若し夫れ本宮より、一葉の輕舟を泛べ、其近く所を撐にし、行々兩岸の風景を賞せんか、目のあたり彼齋藤拙堂の「下岐蘇川記」を讀むが如く、左右の巒巘崒然として嶄然し、高さ數百千仞蒼空を摩して直ちに我頭上に聳立し、又諸處に飛瀑ありて、蒼壁峭立の間に懸り、流水は蜿蜒として滙流し、碧潭をなし深さ測るべからず。就中其奇景を呈する個所を上游より記さんか、屏風島・網代が淵・佛巖・三重石・ハナシロ瀧・布引瀧・調子瀧・那智裏瀧・撞木岩・陰陽石・鐘岩・骨岩等は特に著名なるものなりとす。予嘗て、彼有名なる木曾川及球摩川の二名流を下りて、其兩岸の風光を玩びしことありと雖も、是れを九里峽の絶勝に比せば、其及ばざること甚遠しと思へり。

古、熊野川を下る船を杉舟と謂ひ、和歌に讀めるもの多し。

後嵯峨院

熊野川せきりに渡す杉舟の
へなみに袖の濡れにける哉。

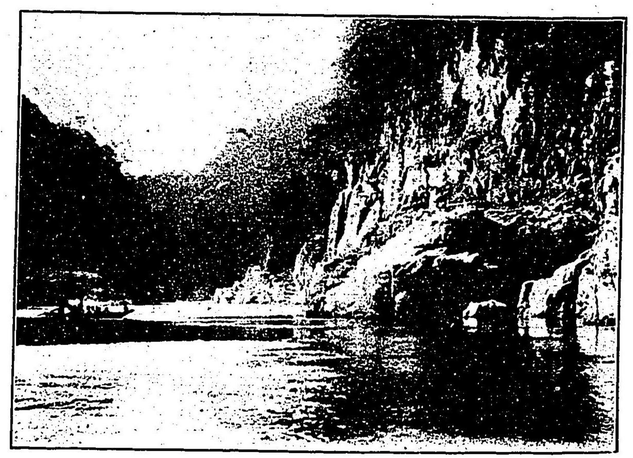
正徹

くまの川山の苦路は埋もれて
雪に棹さす瀬々の杉船。

瀞八丁の絶勝

瀞八丁　熊野川と北上川と相合する處より、北上川を遡ること約四里にして、東牟婁郡玉置口村大字玉置口に至れば、此處に所謂瀞八丁の勝あり。瀞八丁は、文人是れを瀞溪と呼ぶ。北上川兩岸の峯巒は、重嶂水を夾んで急に相窄まり、河水深く瀞みて深潭をなし、其色藍よりも青し。奇石怪岩は深淵に枕みて相峙ち、千態萬狀一々名狀すべくもあらず。鬱蒼たる老樹は、森々として兩岸を蔽ひ、深邃幽冽眞に宇内に於ける絶勝の別天地なり。其巖石の奇を以て鳴るものを擧ぐれば、或は穉石・或は二枚屏風・或は賽錢箱・或は佛島・其他トサカ岩・大黑岩・舟島・潜島・蛭石・烏帽子岩・天柱岩・部屋谷・獅子鼻・虎石・惠比須岩・六枚屏風等の岩石ありて殆んど枚擧に遑あ

上瀞峽入口



下瀞峽

らず。而して、春時には紅杜絹花、峭壁の間に咲きて、全山翠綠の間に點綴し、風趣一段の光彩を添ふると謂ふ。

瀞溪に遊ぶに二路あり。一は北上川と熊野川との合流點たる九重村大字宮井より、舟に乘りて遡るもの。一は宮井より北山川の右岸に添ふて四瀧・九重等の地を經て、奈良縣吉野郡武住を通り、武住峠を越へて、玉置口に達するものにして此間約二里半ふり。何れよりするも、玉置口にて小舟を雇ふて、瀞溪に入るべし。船賃約四五十錢を要す。されども大水の際、又は上瀞峽に遊ぶ者は、此二倍額の賃錢を要すべし。

瀞八丁の上流少し殆んど相似たれども、是に比べ奇勝なる瀞峽あり、之を上下瀞峽と呼ぶ

第三節　湖沼

本縣には湖沼の擧ぐるに足るもの至りて少し。今其湖沼分布の有樣を見るに、主として紀の川の兩岸に於ける丘陵地の間、及生石の峯山脈西部の山麓地方に散在せり管内に於ける湖沼の數、約三十二個あれども、何れも甚小なるものにして周圍一里に達するもの一も存在せず。周圍の最大なるは、海草郡巽村大字阪井の龜池及伊都郡應其村大字淨土寺なる、引ノ上池にして、何れも三十丁あり。面積の最大なるものは、那賀郡長田村大字北志野なる櫻池にして、十八町あり。是れに次ぐものは伊都郡隅田村大字山内なる岩倉池にして、十六町あり。他は殆んど謂ふに足らず。

本縣には何故湖沼少きか。其原因は如何。今一般に湖沼の形成せらるゝ、地文的成立原因を擧ぐれば、火口に貯水せられたる火口湖あり。火口原に成れる火口原湖あり。河道の變遷によりて成れる河跡湖あり。海底の隆起によりて生せる遺海湖あり。谿谷の一方閉塞して成れる潴留湖あり。盆地に淹滯して生せる盆地湖あり。海岸砂洲によりて抱かれて成れる潟湖あり。氷河の作用による氷河湖あり。而して本縣には火口を有する火山なし。故に火口湖及火口原湖の存在を見ず。河道の大なる變遷なし、故に河跡湖なし。

海岸は急峻にして、山脈直ちに海に迫り、海底亦甚深く、且波浪の高大にして、到底砂嘴の發達に適せず。故に比較的長き海岸線を有するに係らず、潟湖なく。又遺海湖なし。僅かに存するものは、山間の閉塞によりて成れる

潴留湖あるのみ。然かも山谷狹小にして亦大なるもの丶發達を見る能はず。是れ特記すべき湖沼少なき所以なり。

紀伊半島沿岸の光景

第四節　海岸

紀伊半島は我國に於ける最大なる半島にして、其海岸に夥しき出入あることも亦、地理學上既に人目を集注するに足るべし。而して其海岸の形式は、所謂リアス式に屬して、實に東北岩手縣の海岸と、其形態を等ふし、東西相對して、共に本邦太平洋沿岸に於ける、最も顯著なる光景を呈する海岸なり。

海岸線

凡そ海岸線の長きは、岬角半島港灣等の多きに因るものなり。從つて之丶は船舶出入の利便多く、彼此の往來交通を誘起し、其地方の發達進運を促すものなることは、先輩學者の夙に稱說する所なり。彼希臘は面積五方里につき、海岸線一里の割合にして、又彼世界第一の漁業國たる那諾も亦是れに相等し。現今世界第一の海運國貿易國たる英吉利は、面積七方里に對して海岸線一里の比例なり。我が國は面積三方里半に對して、海岸線一里の

紀伊國人と海岸

割合なれば、世界の萬邦中、海岸線が面積に對して割合の最も大なるは、實に我大日本帝國を以て第一とす。我が國沿岸中に於て、最も複雜なる出入を顯はせるは紀伊半島の東岸なり。即ち面積六十五方里に對して、海岸線約一百里あり。即ち面積零方里六五に對して、海岸線一里の割合なり。然らば紀伊半島の西岸なる、本縣の海岸線は如何。縣の面積約三百方里につき、約八十二里の海岸線を有すれば、其割合は面積約三方里半につき、海岸線一里の割合にして、即ち日本全面積に對する全海岸線の割合と、殆んど相等しと謂ふべし。

此海岸線の發達は、本縣住民に種々なる利便を提供せるものにして、各地方との往來を助け、移住を奬め物資の有無を融通し、思想智識を交換せしこと、そも幾何ぞや。遠く神代に於ける出雲地方との交通は更にも謂はず。降りて神武天皇の御東遷に際しては、亦此沿岸の廻航せさせ給ひ、或は雄水門に御艦を寄せられ、或は熊野浦に遠航せられ給ふ。其後遣唐使派遣に際しては、其出帆地となり。或は源平二氏の爭亂に當りては、源軍一部の艦隊

の編成出發となり。或は中世に於ては時勢に憤激せるの徒相率ゐて俠勇を海上に振ひて、熊野浦の海賊軍の發達となり。近時に於ては、萬頃の怒濤の間に出沒する、捕鯨業の發達となり。又雄心落々萬里の波濤を踏破して、或は北米に或は濠洲に、悠々出稼するもの少からず。今や紀伊國人士の勢力は大に海外に向つて張られんとなしつゝあり。而して沿岸一帶到る處の長汀曲浦には、海港漁村相並びて漁火帆影を見ざるなく。又東は名古屋港より西は大阪港に到る沿岸各地へは、定期の航海常に絶ゑず。是れを以て有田の蜜柑は東北人士の食卓に飾られ、熊野の物産は京阪地方に需要せらる。實に本縣の如き陸上交通の極めて至難なる地方に於ては、海路は恰かも鐵道の如く、唯一無二の交通路にして、文化の導入せらるゝ門戸なり。然りと雖も悲むべし、沿岸多くは山嶽急に海に迫りて、絶崖峻峭、港灣亦徒らに開濶して、船舶の碇泊風浪の避難に適せず。沿岸八十有餘里、空しく風濤の激するに委し、小港漁村の將來大なる發展を期待すること、夫れ或は難からんか。

海岸の出入著しき理由

紀伊半島の海岸の出入の多き理由を考ふるに、我國地體構造上の脊梁たる南彎山系が、地變の爲めに此半島東西兩面に於て截斷せられて、海中に沒入せるが爲めにして、一大山系の截斷面の地貌なりと謂ふべし。彼豐後水道、朝鮮西南沿岸、希臘の海岸の如き、皆斯る同一成因によりて、斯の如き甚しき海岸線の出入を見るに至りしなり。本縣の南部にありては、其地質第三紀層の岩石より成りて軟脆なると、處々に層位の混亂せるとに因りて、波浪の浸蝕を蒙ること夥しく、是れが爲めに海岸線の出入一層錯雜を極めたり。

海岸線出入の大様

本縣全海岸の狀況を通覽するに、出入甚しき個處凡三所あり。一は東部にありて、勝浦灣附近なり。其二は中部にありて田邊灣附近、其三は北部にありて、紀伊水道に面する部分是れなり。通じて稍大なる灣入廿一あり。此中最も大なるは湯淺灣にして、田邊灣勝浦灣由良灣等亦大なり。概して潮岬以西は出入割合に少く、其以東は多し。今海岸を說明するに當り便宜の爲め、潮岬及日の崎を以て海岸を三大分し、紀伊水道沿岸紀州灘沿岸熊野灘沿岸と爲し、以下順次に是れを概說せん。

紀伊水道沿岸

一　紀伊水道沿岸

四國島と紀伊半島との間に在る海峽を、紀伊水道と謂ひ、一に紀淡海峽とも謂ふ。南は紀伊日御崎と、阿波の蒲生田崎とを以て外口となし、是れより以北淡路島に至る迄、長さ約十里、幅八里乃至十二里あり。此海峽は四國山脈と紀伊山脈との間の一大陷落地帶なれば、從つて兩岸の地質は互に相應じ、海岸の曲折の狀態も亦頗る相似たり。淡路島との間に友ヶ島あり。是れ和泉山脈の餘波が海中に入りて、茲に殘存せるものにして、東にあるを地島と謂ひ、西にあるを沖島と謂ふ。此二大島の外に虎島、神島等の岩礁あり是等を總稱して友ヶ島と呼ぶ。何れも無人の島嶼なり。地島と加太町との間を地の瀬戸又は加太海峽と謂ひ、僅かに小舟を通ずべく、地島と沖島との間を中の瀬戸と謂ひ、沖島と淡路との間を由良海峽又は友が島海峽と謂ふ。幅約一里ありて大阪灣に出入する大船巨舶の航路に當る。沖の島の西端に燈臺の設けあり。

友ヶ島

加太海峽

友ヶ島海峽

此海峽につきて地文上看過すべからざる事柄あり。今紀伊水道の水深を見るに、一般に海底甚だ深からず。其最深部と雖も僅に四十尋に達する

海峽の海底

に過ぎず。概して海底の變化少く、傾斜極めて緩漫にして、平坦なる海底をなすものゝ如し。然るに漸く此友が島海峽に接近するに從つて、次第に其深さを增し、遂に沖島の西方に於ては、急に百十二尋の深海を造る。此海峽を通過して、其南北兩部の海面漸く開豁たる部分に到れば、再び急に深度を減じて、四十尋以下の淺海となる。凡そ海峽の地形たるや、兩岸より山脈相迫り、海底には猶其餘脈を存して隆起し、一帶の海底山脈をなして斷續以て相連るを見るべし。而して海峽の兩面より打寄する波浪と潮汐とが、古今將來に亘りて、永久に此隘路を去來するに際して、海水は常に水平的に海岸を浸蝕するに止まらず。又同時に垂直的に作用して、海底の地形を變化せしむるものなり。是れを以て何れの海峽に於ても、其狹隘部に於て急に水深を加へ、一の海盆を作ることあり。或は一條の深溝を作ることあり。鳴門海峽友が島海峽の如きは、海盆の好例にして伊良湖水道明石海峽の如きは深溝の適例なり。

友ヶ島海峽海底山の深き理由

友が島海峽に在りては、太平洋又は大阪灣より進行し來りたる潮流が、此

隆路に當りて、海底山脈の爲めに、多少の妨害を受くるを以て、進行し來れる海水は、其表面に近き部分の水のみ海峽を通過し去りて、下層は支へられて前進すること能はず。此處に回轉運動を起し、以て海底を削磨して、盆形をなせる深海を形成せるに至りしものなり。

加太港

友が島の對岸に加太の小港あり。水深干潮時に於て三十尺を有す。漁業の一中心地なり。是れを南に廻れば田倉崎ありて、和泉山脈の末端なり。是れより遙かに南方雜賀岬に至る一帶の海濱は往古一大海灣の深く內地に灣入せし處なりしが、紀の川の沖積作用によりて、廣大なる平野をなし、海岸は平滑なる砂濱となり、海岸に並行して幅十町以內高さ二十米以下の沙丘相連り松樹鬱蒼として是れが髮をなし、紀伊沿岸中稀に見るの光景たり。

松江の濱　荒濱

紀の川以北の松江の濱。河南の荒濱等は風光明媚にして、又海水浴場として、近來靜養の客の集まる處なり。

和歌山港

紀の川口を青岸と謂ひ、和歌山港の外港をなし、水深干潮時八尺、滿潮時十三尺、碇泊所廣さ東西十五丁、南北三丁あり。沿岸定期航海の航路に當る。海底砂洲多く風浪の難ありて、良泊ならず。

雜賀崎

雜賀崎は紀伊山系中の最下部をなせる、結晶片岩より成れる一小岬角にして、東方に聳てる名草山と相對して、龍門山脈の起點をなすものなり。名草山と並びて、往時は一の島嶼たりしもの、紀の川の築土作用に因りて、遂に連結して岬角となりしものなり。

和歌の浦

和歌の浦は紀の川の注流によりて、海岸に砂嘴（スピット）を作り、爲めに一の潟湖の狀をなしたるものにして、幾多の變化に富める沿岸の狀況と、附近の山丘岬洲等の恰好なる配合によりて、以て天下の名勝を形成せり。

日方灣

和歌の浦の南は日方灣にして、其南岸なる塩津港は、干潮時二十四尺、滿潮時三十六尺の水深を有す。其西なる荒崎の鼻を適れば大崎灣となる。

大崎灣　浦初島

大崎港こゝにありて、干潮時四十二尺、滿潮時五十尺の水深あり。港面東西二丁、南北五丁ありて、良好なる錨船地なり。此灣口の浦初島は、地島、沖島二島より成る。有田川の口は極めて淺き河口港をなし、水深九尺以下の箕島の港あり。其南なる宮崎は、白崎と南北相對して、湯淺大灣の門口をなす。湯

淺灣
山瓦灣
日の御崎
紀州灘沿岸
田邊湾

淺灣には小島多く、黑島・應島・苅藻島・毛無島等其重なるものなり。灣の南隣には大引浦・由良灣等あり。由良灣はフィヨルド式の峽灣にして、其灣入の方向は、恰も此地體を構成する地層の軸と相一致し、熊野浦に於ける浦神灣と同じく、一の地溝帶たるものゝ如し。由良灣を南に出づれば、比井の小灣ありて一の錨地なり。日の御崎は一に比井崎とも謂ひ、日高郡三尾村の西端に位す。紀伊水道と紀州灘との分界點をなすものにして、山脈急に峙立して、尖端に有名なる燈臺あり。又海軍望樓の設けあり。

二　紀州灘沿岸

紀州灘は一に紀伊洋又は紀州沖とも謂ひ、日の御崎より潮岬に至る、約三十里の沿岸にして、本縣の沿岸中比較的出入乏しき海岸なり。日高川河口附近の海岸は、縣下中部に於ける最大なる平野にして、是れ嘗て海水の一大灣入をなせし處なりき。此海岸一帶砂丘相連り、日高川は其南端を破りて海に注ぐ。是れより田邊灣に至る、約七里の間は、切目崎の小角あるの外、極めて單調なり。田邊灣は此沿岸中、最大なる灣入にして東西の幅員約一里半、南北亦是れに等し。灣口深さ二十尋、大部分は十尋以下にして、中に幾多の峽灣を有し、小なる島嶼亦多く、宛然彼松島の觀をなし、風光甚だ佳なり。灣の北岸に會津川の注ぐ處、田邊港ありて、繁盛なる都會なり。灣の南口船戸崎を廻れば、白良濱の小灣あり、鉛山岬其南に峙つ。

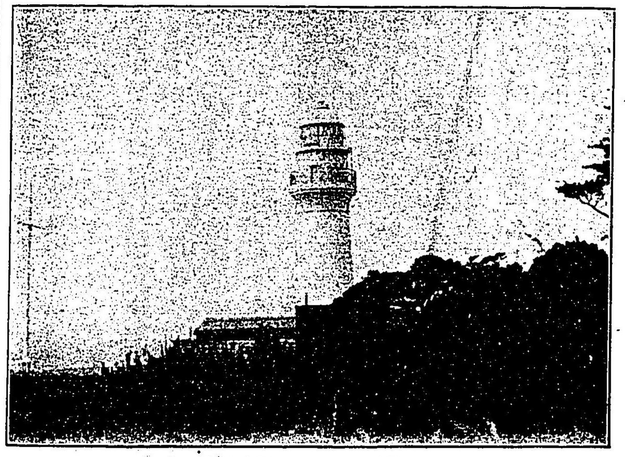
周參見港
熊野灘沿岸
潮岬

更に南すれば富田川流れ來りて、河口に拳大の平野を成す。是れより潮岬に至る約十五里の沿岸は、山脚直ちに海に迫り、岩岸遠く相連り、沿岸又暗礁多し。周參見港は、水深干潮時四十尺、滿潮時四十五尺ありて、八丁に五丁の碇泊地を有すれども、風難を避くるに足らず。潮岬に近く有田・二色の二灣あれども、狹小にして良からず。

三　熊野灘沿岸

潮岬より新宮川口に至る、直徑約九里、延長約廿五里の海岸は、縣内に於て最も變化に富める沿岸にして、八つの著しき灣入あり。島嶼には大島を初め、小なるもの其數少からず。潮岬は西牟婁郡潮岬村なる、潮岬半島一名上野半島の西南隅にありて、東經百三十五度四十六分、北緯三十三度二十六分に位し、縣の極南端にして、又本州の最南點たり。此半島は石英閃綠岩粉岩等の噴出岩より成れる、海拔約百二十尺の高臺にし

潮岬附近には別に巻末に附したれば就て參照すべし



潮岬燈臺

て、微傾斜を以南方に傾く。海岸は斷岸絶壁をなし殆んど直角に近き傾斜をなす。又附近に暗礁多く、風濤荒く、航海上最も危險とする處なり。彼英艦ルノマントン號、土耳古軍艦エルトグロール號の沈沒せるも此附近なり。平素天晴れ風死せるの日も、渺茫たる太平洋のスエルは、山脈の如くに打寄せ來る。若し夫れ一朝天暗く、雲湧り、暴風太洋を搏つに當りては、狂瀾怒濤は萬千の雷霆一時に轟くが如く飛沫天に冲して地軸震動し、眞に宇内の壯觀な

り。岬頭に白色不動一等燈臺、海軍望樓、無線電信局等あり。

大島

大島は潮岬の東隣、東牟婁郡大島村にして、周圍約四里、縣内第一の大島なり。潮岬と同形同性の地體にして、面積稍大なり。中に大森山（一六〇米）狼煙山（一四〇米）の二峯を有す。地形一般に高臺性をなし、周圍は多く岩崖にして、暗礁多し。されども海底は急に深くして、十尋の同深線は、殆んど海岸に接するの狀あり。島の東端を樫野崎と謂ひ、岬頭に白色圓柱形石造の燈臺あり。本島は潮岬半島とは、地形及地質上より推定して、嘗て合して一大島たりしものゝ如し。二者今は分離して、恰も姉妹島の觀をなして、其中間に妙賀島・津屋島の二小島と、幾多の暗礁岩角とを殘留せるは、其間の陷沒地たるの名殘とも謂ふべきものなり。

橋杭岩

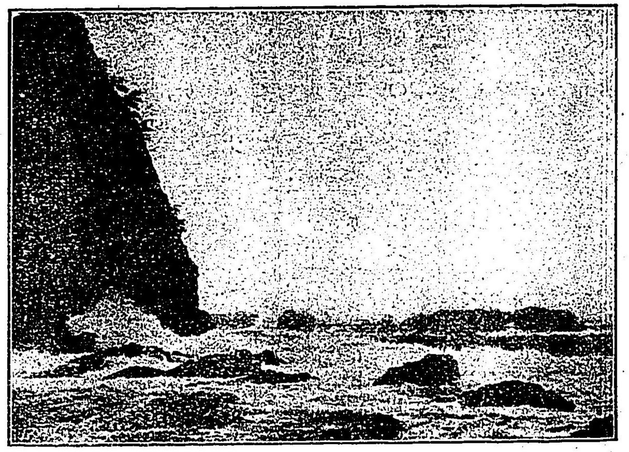
大島の北方海中に、奇勝橋杭岩あり。大小數十個の岩石、一直線に南北に相並びて、恰も橋杭狀をなし、頗る奇觀を呈せり。岩質は粗粒質石英粗面岩にして、此地方一帶の第三紀層を貫きて噴出せる、一大岩脈の海水の爲めに浸蝕せられて、個々分離殘存せしものなり。

串本灣

橋杭岩

大島と潮岬半島と、橋杭岩列岩とを以て圍める海面は、卽ち串本灣にして、最深部廿八尋灣の半は十尋以上の水深を有し、五尋の等深線は海岸より數丁の處に通じ、且風浪の難なく、碇舶面も亦頗る濶大にして、良好なる錨地なり。西岸に串本港あり。繁盛なること新宮町に次ぎて熊野灘沿岸第二の港市なり。又熊野浦捕鯨業の一中心地をなす。大島に大島港あり、五十尺以上七十五尺以下の水深を有し、灣を隔てゝ串本港と相對す。

古座灣　浦神灣　太地半島　海蝕臺地



熊野浦の光景

古座川の河口は古座灣にして、小島數多此中に横はる。河口の古座港は八尺より十二尺の水深を有し、熊野浦漁業の一中心地なり。浦神灣太田川是れに注ぎ、西々南に約一里十町の狹細なる灣入をなし、紀伊水道に臨める山良灣と同じく、一の地溝帶中の陷沙地域なり。灣頭に於て水深十三尋あり。大部分は四尋より五尋の間にあり。船舶多く此處に避難す。浦神灣の東に太地半島あり。地文學上一の海蝕臺地の好例なり。海蝕臺地の存在は、本縣

南海岸の一特徴にして、西は西牟婁郡日置川口附近より、東は東牟婁郡宇久井灣附近に至る迄、約二十里の海岸には、至る處大抵斯る地形を見るを得べし。是れ嘗て此沿岸一帶海中に在りし時代に於て、海水の運動に因れる浸蝕の作用によりて、形成せられたるものにして、此海底が其後土地の隆起作用に因りて、水面に顯はれて以て斯る一の段丘的地貌を形成するに至りしものなり。

勝浦灣　太地半島の南隅梶取崎には、木造四角形白色の燈臺あり。勝浦灣は太地灣、森浦灣、勝浦灣の三小灣に分る。此中北部の勝浦灣最も良港をなして、水深干潮時三十五尺、滿潮時三十九尺。東西七丁の碇泊面を有す。

那智灣　中に中島、鶴島等あり。那智灣は圓滑なる一灣入にして、岩岸懸絶して、太洋を望むの光景最も雄大なり。那智川の小流是れに入る。此東に宇久井半島を廻れば、宇久井灣あり。三輪崎港其北隅に在りて、廣濶なる碇泊面を有すれども、大洋に裸出するを以て風濤の難あり。新宮川口の新宮港は、河港と海港とを兼ね、大小の船舶常に輻輳すれども淺くして良港ならず。

第四章　地質

地質學に於ては、地層累積の狀態により、或は岩石中に含有する古生物に因りて、地殼成生の次第を考究し、是れを分ちて、太古大統、古生大統、中生大統、新生大統の四大期とし、更に是れを幾多の小時代に區分せり。而して此等の各時代には、種々の噴出岩の進發するあり。大略左表の如し。

地質時代の區別

		層岩積沈		噴出岩類
成水	新生大統	第四系	沖積統 洪積統	安山岩・玄武岩
		第三系		石英粗面岩 安山岩 玄武岩
	中生大統	白堊系		閃綠岩・輝綠岩 玢岩・斑岩 橄欖岩・斑粉岩 花崗岩
		珠羅系		玢岩
		三疊系		玢岩
	古生大統	秩父系		輝綠岩・玢岩 橄欖岩・斑粉岩
成大	太古大統	結晶片岩系 片麻岩系		榴閃岩・蛇紋岩 花崗岩

本縣の地體を構成する岩石を通覽するに、主に水成岩に屬するものにして、其占有する處の面積は、全面積の約百分の九十二を占め、變成岩及噴出岩は、極めて僅少なり。今是れが地質を類別すれば左の如し。

本縣地質の類別

(一)變成岩類

太古大統

結晶片岩

(二)水成岩類

古生大統

秩父古生層

中生大統

時代未詳の中生層

白堊紀層

和泉砂岩層

新生大統

第三紀層

古層

新層

第四紀層

洪積層

沖積層

(三)噴出岩類

石英閃綠岩

石英粗面岩

蛇紋岩

輝綠岩

玢岩

本縣地層排列の次第を見るに、北部に古くして南部に至るに從うて順次に新らしく、紀の川縱谷の南岸龍門山脈は、紀伊半島の最下部をなす結晶片

岩系に屬する山脈にして、是れより南方に赴くに從ふて、古生・中生・新生の地層整然として現はれ、此間に蛇紋岩・石英粗面岩等の火成岩は、各所に是れを貫きて露出せり。

第一節　太古大統

結晶片岩系

結晶片岩系　管内に露はれたる最古の變成岩にして、紀の川下流の南岸に沿ひて、西は雑賀崎・名草山等より、東は伊都郡高野口町に至る、龍門山脈一帶の地域を占め、其走向概東々北より、西々南に亘り、走向に從ふて延長し、長さ十里半、幅一里半、面積約七方里の地面を占む。此累層は其中央部に於では、龍門山を成せる蛇紋岩に因りて貫かれ、西部に於ては野上川斷層によりて切斷せらる。北面は紀の川縱谷の大斷層に因りて限られ、南面は秩父古生層に接續せり。本地層に屬する岩石は、石墨絹雲母片岩・綠簾綠泥角閃岩・絹雲母角閃片岩・藍閃片岩・紅簾片岩・綠泥片岩・石墨片岩・石英片岩等にして、一般に剝性著し。

秩父古生層

第二節　古生大統

秩父古生層　結晶片岩系に次で、古期の成生に係り、結晶片岩系の南側に、廣大なる地域を領し、一般に秀拔嶮峻なる山嶽地を構成す。即ち北は海草那賀・伊都三郡の南半を占め、南は有田川に達し、西は有田川口より、東は大和國に連り、此間生石の峯山脈・梨子木山脈及高野山等に連亘する、一帶の地方にして、略西々南より、東々北に、其幅は西部及中部に於て、約三里あり。漸く東するに從つて、廣大となり、其幅約四里に達す、面積約二十二方里を占む。其岩石の性質及層狀に因りて、此地層を上中下の三部に區分す。其下部層は、結晶片岩の南隣に是れと並行して走る。即ち西は浦初島に起り、藤白峠及紀明神山脈となり、東して生石の峯亦是れに屬す。野上川の上流より、梨子木山脈を經て、伊都郡丹生川流域に亘る。其幅西部に廣く、東部に至るに從つて狹く、西部にありては約二里半、東部に於ては約一里半なり。岩石は輝岩若しくは其變形物と、石墨千枚岩若しくは石英千枚岩との互層より

成る。藤白峠紀明神山脈及生石の峯の東方に當りて蛇紋岩及石灰岩層東西に細長く帶狀をなして貫入せり。中部層は雜色石英岩を最下層とし、是れに次ぎ粘板岩硬砂岩の互層あり。次はアヂノール板岩粘板岩殊に石灰岩を介在する輝綠凝灰岩層より成る。上部層は再び粘板岩砂岩の互層より成る。中上二部層は、下部層の南側に在りて、西は有田川口の南岸なる宮崎に起り、約半里の幅員を以て東走し、有田、那賀、伊都三郡の境上に至り、急に南北に擴大して、廣大なる面積を占め、其幅約二里半に及ぶ。南乞嶽、大股嶽、天狗岳、高野山等此中にあり。

時代未詳の中生層

第三節　中生大統

中生大統の發達は、頗る廣大なる地域に亘り、日高郡の全部を中央として、北は有田郡南は西牟婁郡に及び約一百餘方里の面積を占有す。此他紀の川の北岸和泉山脈一帶亦是れに屬す。

時代未詳の中生層

日高郡の全部、有田郡及東西牟婁郡の北部に亘りて、中生層の約十分の七を占む。是れに屬する岩石は頁岩、砂岩、變岩角岩及び石灰岩にして、往々鑛床及鑛泉を含有す。石灰岩は暗灰色緻密硅質にして、第二次白色石灰岩脈と共に、不規則に頁岩中に存在す。其所在は、日高郡南部町の北方、上南部村附近より東走して、西牟婁郡秋津川村に及ぶ。古谷石又は爪溪石と稱せらるゝものゝ原石なり。又東牟婁郡の北部に於て、北山川の流域に、頗る堅硬緻密黑色又は灰色の岩石あり。黑色なるは硅板岩にして、所謂那智黑の原石をなし、白色なるは碧玉質角岩なり。直立柱狀節理を有するを以て、是れを流通する北山川は、此岩石を浸蝕して、茲に一種の峽谷を形成し、幽邃清冽なる瀞八丁の奇勝を出現せしめたり。

白堊紀ネオコム期層

白堊紀ネオコム期層

本層は、北面は古生層と並行して、是れと斷層面によりて境せられ、南面は時代未詳の中生層と、整合的に排列せらる。地形は平滑なる丘陵又は、緩傾斜を有する小山脈をなす。走向は概東西に近し、本層は西は湯淺灣及由良灣の間に起り、有田郡の中央より、有田川の河道に沿ふて、帶狀に走り、紀和の國境に至りて盡く。西方に廣く、幅二里餘あれど

も東方に至るに從つて狹く、中部及東部にありては僅に約二十町にして、全面積約十一方里を占むるに過ぎず。是れに屬する岩石は、頁岩・角岩・砂岩等にして、礫岩及石灰岩を挿入す。此層に於て、最も肝要なるは石灰岩にして、緻密堅硬多くは淡灰色を呈し、時に濃灰色を有し、是れに第二次石灰岩脈を有するを常とす。石灰岩脈數條あり。多くは日高郡の西端、大引浦頭に露出し、東北方向に、殆んど何れも相並行して走れり。何れも採掘して使用せらる。就中大引浦附近のものは砂岩・頁岩と互層をなして、此中に海百合・有孔蟲其他多くの化石を含有す。是等石灰岩は、卽ち鳥の巢石灰岩と稱せらるゝものなり。此他湯淺町の北方、有田川の中流上流等に狹小なる石灰岩の露出あり。

化石

湯淺灣の北濱、ミヅタニ及其對岸テンノハマに露出せる砂岩は泥質暗黃色にして、中に數多の植物化石・貝化石を含有す。又湯淺町の西南廣村及東方字山田には、暗黃色の頁岩ありて、中に植物化石を產出す。是等湯淺灣附近の含化石層は、相合して一の化石帶を形成するものゝ如し。

和泉砂岩層　本層は和泉山脈を構成せる厚き累層にして、頁岩・砂岩及礫岩の互層より成り、砂岩其大部分を占む。故に和泉砂岩層の名あり。本層と同樣なる地層は、四國の北半部にも發見せられ、共に東西相連れる一帶をなし、紀伊山系の要素にして、日本外帶山脈を形成する重要なるものなり。砂岩は通稱和泉石と謂ひて、盛に建築材として需用せらるゝ、黝綠色の岩石なり。累層の最下部は礫岩にして、是れに次で頁岩層あり。是れを蔽ひては砂岩・頁岩あり。

第四節　新生大統

第三紀層　本層は東西牟婁郡の大部分に亘りて、面積約百方里を占むる、廣大なる地層にして、此中に石英粗面岩・石英閃綠岩・玢岩・輝綠岩等の大噴出あり。是れ本層地體の各所に、少からざる弱所あるを告ぐるものにして、從つて層位の混亂比較的多大なり。今化石岩質上、新古の二層に區分することを得べし。古層は富田川・日置川二川の中間以東の地域全部に亘り、第

三紀層の約八割を占め、新層は僅に田邊灣附近海岸狹小の部分なり。

古層

古層　古層を構成する岩石は、頁岩、砂岩、石灰岩及蠻岩にして、東牟婁郡に於ては、火成岩の大露出あり。頁岩中に在りて、東牟婁郡九重村字宮井附近に於ては、無煙炭層を夾有し、所謂熊野炭の名を以て盛に採掘せらる。此中にまゝ、双子葉其他の化石を含有す。又頁岩中浦神灣頭に露出するものには、俗に玉石と稱する燐礦と、其他化石とを含有す。蠻岩は往々厚大なる層をなして、砂岩、頁岩と互層をなす。石灰岩は串本町及其附近の海岸に小露出をなすを見るのみ。

新層

新層　北は南部町を限りとし、南は富田川口の南方市江崎を界とし、東は三栖村に至る間の地域を占め、田邊灣頭の鉛山岬を中心として、沿岸に約三里の半徑を以て描ける、弧線中に包含せらる。地形は低平なる丘陵地にして、岩石は軟柔なる砂岩、頁岩及蠻岩より成り、西牟婁郡瀬戸鉛山村には、炭酸泉の湧出あり。新庄村にては、灣き一の炭層あり　田邊灣沿岸の地形の複雜なるは、是等脆柔なる岩石の、海水の爲めに浸蝕せられたると、地層の

混亂著しきとによりて、陷沒せしが爲めなり。砂岩は一般に粗粒質、又は細粒質にして、世に富田石の名を以て、建築材又は砥石として使用せらる。又往々動植物の化石を包藏す。砂岩中白色粗粒質のものは、厚板狀節理を有し、以て西牟婁郡稻成村に於ては所謂蟾蜍巖と稱する怪岩を形成せり。又同處には、灣き褐鐵鑛の產あり。化石は田邊灣東の粒質灰色砂岩中より、多くの動物化石を產出す。植物化石は稻成村岩屋觀世音背後の山頂にある、變岩質砂岩中及瀬戸鉛山村字權現崎の砂岩中より發見す。田邊町の北西の谷村及東方新庄村等に於ては、頁岩中に不完全なる双子葉化石及灣き石炭層を夾有す。

第四紀層

洪積層　洪積層の發達は最も狹小にして、紀の川の北岸、日高川下流の北部、東牟婁郡太地村、新宮町附近の數個所に過ぎず。此中紀の川北岸のものは、其面積最も廣く、和泉山脈の麓に添ふて、是れと並行して、西は海草郡楠見村の東方に起り、東方岩出町、粉河町、橋本町等皆此中に在り。南岸に於

ては、野上川の横谷、九度山町附近の地等なり。岩石は砂粘土・礫・塵埃等より成り、上位に在るは塵埃層にして、砂質を帶びたり。本層は紀の川に向て傾斜し、漸く沖積平地に移化して、其境界一見明白ならざる處多し。

日高川下流の洪積層は、礫層を主とし、砂層是れに雜る。第三紀以前の岩石を原基として、發達せるものにして、三尾村・湯川村・矢田村・阜藤村等の地方に現はる。矢田村附近のものは、彼有名なる道成寺の立てる地盤をなすものにして、中生層の山嶽に連る小丘陵を形成し全く礫より成る。次に太地村・新宮町附近のものを見るに、是れ亦砂層にして、新宮町附近のものは、高さ四十米以下の獨立の丘陵をなして、沖積平地の上に峙立す。本層は此地方に大噴出せし、石英粗面岩を基底として、多くは同岩石の礫より成る。

沖積層

沖積層は現今河海等の水邊が、水の運搬及堆積の二作用に因りて、漸次に發達伸張し、時々刻々此作用を繼續しつゝある、地質時代最新期の成生に屬するものなり。岩石は砂礫・粘土等より成る。本地層は洪積期以後、殆んど地變を受けざるを以て、層位は水平をなすを定則とし、地形概低

卑平迫なりとす。是れを以て耕耘に便に、亦地味豊沃にして、人類の生活に最も恩惠多き處なりとす。

縣内は全土殆んど山嶽を以て蔽はれ、河流は小にして急流なれば、本地層の發達比較的狹小にして、唯紀の川沿岸、和歌山市附近、有田川・日高川・切目川・會津川・富田川等の下流の沿岸に、稍大なるものあるに過ぎず。されども、何れも岩泥土層に屬するを以て、耕作に適せざるなし。沖積地の中、海岸に添へる地は多くは砂丘となり、海岸線に並行して、大小幾多の砂丘脈あるを常とす。例へば和歌山附近にありては、紀の川口の荒濱の砂丘脈は、著名なるものにして、此海岸より二十餘町の内地に在る一脈は、和歌山城趾の南方、奥山の一大砂丘脈となりて、遂に和歌の浦に連る。此他紀の川北の松江の濱、箕島町・御坊町・新宮町附近の砂丘は、皆人の知る所なり。是等砂濱の海底は、一般に遠淺にして、河口に在りては砂洲遠く舌狀に海中に斗出し、增減伸縮變化の頻繁なる、轉た世人をして、飛鳥川の古歌を連想せしむ。

第五節　噴出岩類

蛇紋岩

蛇紋岩　蛇紋岩は、結晶片岩系古生層中生層等を貫さて噴出せる、斑蝟岩の變態物にして、縣内數個所に露はる。龍門山及び其附近を成せる蛇紋岩は、一大塊を成して、東西約二里に亘りて分布す。又海草郡の南部、藤白峠の西より、那賀郡黑澤山に跨る蛇紋岩帶は、幅五六丁長さ三里餘丁あり。其南に在りて、殆んど是れと並行して、海草郡沓掛より、有田郡六川に及べるものは、幅數丁にして長二里半あり。又生石の峯の東方に於て、有田郡八幡村遠井に稍大なる露出あり。其他猶一二個所の小露出あるのみ。

石英粗面岩

石英粗面岩　管内に於ける噴出岩中最大の面積を占むるものにして、熊野川下流の兩岸に亘りて、廣大なる噴出あり。是れ所謂那智の連山をなすものなり。其他東牟婁郡の北部に在りて、大和より香狀をなして、十津川の左岸に達するものあり。南方に於ては、浦神灣より西方に、古座川の下流に至る一線中に現はれ、又其南方大島の西端及橋杭岩等にも見るを得べし。

本岩を分ちて粗粒質及凝灰質の二種となすことを得べし。就中粗粒質に屬するものは、最廣く發達し、熊野川下流に於ける、石英粗面岩の殆んど全部は、此粗粒質石英粗面岩なり。其外觀は淡綠灰色のものと、白色のものとあり。一見して花崗岩と類似し、有色の鑛物割合に少ければ、能く久しきに耐へ、且又採掘も容易なれば、土稱オニミカケの名を以て、盛に建築石材として使用す。凝灰質石英粗岩は、綠色及白色の二種あり。專ら古座川流域の地溝帶中に現はる。此他東牟婁郡色川村附近にも、小露出あり。元來軟柔なれば、浸蝕瀑爆等の作用に因りて、甚しく變化して褐黃色となり、又崩壞して鈍圓錐形をなし、其表面に甚しき凹凸を生じ、土俗ムシクヒイワと稱する、一種の奇觀を呈するものあり。

石英粗面岩を圍繞する、第三紀層の狀態を察するに、多くは底部に向て傾斜するより考ふれば、恐らくは第三紀層が或時代に於て、陷沒せし部分にして、本岩は此際に乘じて、一大噴出をなせしものならんと謂ふ。本岩より成れる地域は、周圍の第三紀層に比して、浸蝕作用に抵抗すること強きが爲め

に、特に峻嶺高峯を成して峙立し、遠方より望見するに、一見して其地質を判知するを得べし。且本岩は屢柱狀或は板狀節理に富み、風水の作用を受けて、奇拔なる風光を現出す。熊野川の九里峽那智の名瀑、橋杭岩の奇觀の如き、皆其岩石の特質に基きて形成せられたるものなり。

石英閃綠岩　潮岬半島の南部、大部分を占む。

玢岩　暗綠灰色の岩石にして、潮岬半島の北部より、大島に連りて、大部分を占有するものにして、石英閃綠玢岩とも稱すべきものにして、石英閃綠岩の周邊相なるものゝ如し。

輝綠岩　潮岬半島に、一條の岩脈をなして現出す。暗綠色にして、緻密結晶質の岩石なり。

第六節　鑛泉

近畿地方は、一般に溫泉に乏しと雖も、本縣及兵庫縣の如きは、溫泉に富みて、著名なるもの、亦少からず。本縣に在りては、鉛山溫泉、龍神溫泉、湯の峯溫

泉の如きは、其主なるものにして、溫泉の數總て五十個所あり。溫泉の分布を見るに、最も多きは東牟婁郡にして二十個所あり。是れに次ぎて多きは、日高郡、西牟婁郡にして、最少きは海草、那賀の二郡なり。何れも一二個所の湧出を見るのみ。而して伊都郡には未だ溫泉を發見せず。溫泉は地體の構造に、密接なる關係を有するものにして、東牟婁郡に溫泉の最多きは、地體の構造の複雜にして、變化の著しきが爲めにして、海草、那賀、伊都の紀の川流域の、比較的地體構造の單純なる地方に溫泉の少きも、亦自然の理なり。要するに溫泉は、縣の南部に多くして、北部に少しと謂ふべし。而して溫泉の湧出する地層は、何れも古生層中生層又は第三紀層中に在り。其泉質は、炭酸泉、硫黃泉、單純泉、鹽類泉、亞兒加里泉等にして、唯酸性泉、鐵泉等を缺くのみにして、種類甚多し。此中最多きは炭酸泉にして、其數實に二十一個所あり。次に多きは單純泉にして、其數十二あり。硫黃泉是れに次ぎて十一個あり。鹽類泉は五個にして、亞兒加里泉は最も小く、僅に一個所あるのみ。更に是れを郡別に檢察すれば、西牟婁郡、日高郡、有田郡の三郡には、主として炭酸泉

温度

多く、東牟婁郡には殆んど各種類を湧出するを見るべし。

次に是等温泉の温度を概見するに、最も高温度を示すものは、東牟婁郡四村大字湯の峯なる畔地鑛泉にして、實に百九十七度に達す。此他同村内に噴出する鑛泉は、總て百六十度以上の高温を有し、最高温度の鑛泉地帶とす。是れに次で高温度を有するは、西牟婁郡の瀬戸鉛山村の鑛泉にして、何れも百度以上を有す。百度以上に達するもの總べて十二個あり。他は概ね四十度より八九十度の間にありて、龍神鑛泉を除くの外日高有田二郡のものは、一般に低温度のものを多しとなす。

鑛泉一覽表

鑛泉名	所在	温度	泉質
龍神鑛泉	日高郡龍神村大字龍神	一〇二	炭酸泉
三ッ川鑛泉	同　郡丹生村大字山野	四四	仝
佐井鑛泉	同　郡川中村大字佐井	五一	仝
高津尾川鑛泉	同　郡船着村大字高津尾川	五〇	仝
神場鑛泉	同　郡川上村大字沓瀬	五五	仝
熊瀬川鑛泉	同　郡高城村大字熊瀬川	四二	仝
瀧鑛泉	同　郡同　村大字瀧	四六	硫黄泉
清川鑛泉	同　郡　清川村	?	炭酸泉
新濱鑛泉	西牟婁郡　新庄村	六〇	仝
崎ノ鑛泉	同　郡　瀬戸鉛山村	一三六	仝
濱ノ鑛泉	同　郡同　村	一〇七	仝
元ノ鑛泉	同　郡同　村	?	仝
尾形鑛泉	同　郡同　村	一二二	仝
礦ノ鑛泉	同　郡同　村	一〇九	仝
沛氣鑛泉	同　郡同　村	一二二	仝
粟湯鑛泉	同　郡同　村	九三	仝
椿　鑛泉	同　郡東富田村朝來歸	七八	單純泉

湯ノ上鑛泉	同	郡三舞大字向平	九三	炭酸泉
中石鑛泉	同	郡二川村大字高原	四八	單純泉
川湯鑛泉	東牟婁郡請川村大字皆瀬川		一五八	硫黄泉
光明鑛泉	同	郡四村大字湯ノ峯	一六八	仝
玉ノ湯鑛泉	同	郡同村同字	一八六	炭酸泉
小栗湯鑛泉	同	郡同村同字	一八八	鹽類泉
畔地鑛泉	同	郡同村同字	一九七	硫黄泉
鷺ノ湯鑛泉	同	郡同村大字井關	五五	仝
磯ノ湯鑛泉	同	郡勝浦村	九五	硫黄泉
越瀬鑛泉	同	郡那智村大字湯川	七七	仝
畑下鑛泉	同	郡下里村大字浦神	六二	單純泉
赤島鑛泉	同	郡勝浦村	三六	硫黄泉
濱ノ湯鑛泉	同	郡那智村大字湯川	一〇二	單純泉
中湯鑛泉	同	郡同村	九八	鹽類泉

磯湯鑛泉	同	郡同村	八六	硫黄泉
藥師鑛泉	同	村田原村大字佐部	八〇	單純泉
犀ノ谷鑛泉	同	郡高池町大字月野瀬	九一	仝
五味ノ平鑛泉	同	郡七川村大字佐田	?	仝
平井鑛泉	同	郡同村大字添野川	九一	仝
原ノ谷鑛泉	同	郡三尾川村大字大川	四八	炭酸泉
湯ノ平鑛泉	同	郡同村大字長追	六九	單純泉
大師鑛泉	同	郡西向村大字姫	—	冷礦黄泉
雄ノ鑛泉	海草郡山口村大字瀧畑		六三	亞兒加里泉
薮田鑛泉	同	郡巽村大字重根	?	單純泉
不動鑛泉	那賀郡長谷毛原村大字毛原中		六五	硫黄泉
境谷鑛泉	同	郡山崎村大字境谷	?	鹽類泉
有原鑛泉	有田郡五西目村大字有原		六〇	單純泉
吉原鑛泉	同	郡石垣村大字吉原	六八	炭酸泉

發老鑛泉	同	郡田栖川村大字栖原	五七 仝
白上鑛泉	同	郡同 村同 字	五七 仝
岩尾鑛泉	同	郡田殿村大字大谷	六二 鹽類泉
西ノ谷鑛泉	同	郡御靈村大字吉見	五五 單純泉
矢田鑛泉	日高郡矢田村大字小熊		九〇 鹽類泉

（備考）溫度ハ第氏驗溫器ニヨル

湯崎溫泉

湯崎溫泉　或は鉛山溫泉とも謂ふ。田邊町の南方海灣を隔てゝ瀨戸鉛山村に在り。炭酸泉にして、崎の湯・濱の湯・元の湯・屋形の湯・礦の湯・疝氣の湯・粟の湯・自洗の湯の八湯に分れ、第三紀砂岩の間より湧出す。溫度は高低種々あれども、概して高溫なり。其効能は胃弱・僂麻質・白帶・下腰疝・鑛毒より來る痲痺・月經不調・貧血病・皮膚病・痲疹・疱瘡より發したる頑癖・神經病・子宮機能變常・懷血病・萎黃病・依卜毘珪兒及歇似私的里慢性氣支管加答兒腺病・慢性胃腸加答兒・肝臟病・血液不良・呑酸・下腹充血・便秘・子宮充血・慢性喉頭疝・脚氣等の諸症に効驗あり。田邊町より陸行四里、又常に灣內に便船あり。旅亭數

十戸海に臨み、風光甚だ美なり。特に冬季は氣候溫暖にして、避寒療養に適すれば、遠く京阪地方の人士の、來りて滯留入湯するもの、近年非常に多く、一個年の浴客凡て二萬人以上に達すと謂ふ。

古此附近に鉛鑛脈あり。德川時代に是れを採掘せしが、鑛脈遂に海に沒するによりて、是れを廢坑とす。鉛山の名稱是より起る。鑛泉の發見は何時の頃なるか詳ならざるも、夙に世に知られ、日本書紀に齊明天皇の條に、有馬皇子往牟婁溫湯とあり。齊明天皇四年冬十月帝幸紀溫湯と記され、其他天智持統天武諸帝の此地に行幸せられたることあり。中古の歌に所謂眞白良（シラヨ）の濱の走湯と謂ひしもの此溫泉なり。

白良濱　寂念法師

雪のいろに同じ志らゝの濱千鳥
聲さへさゆる明ぼのゝ空。

同　仲實朝臣

ましらゝの濱の走湯浦さびて

今はみゆきのかげもうつらす。

龍神温泉

日高川の上流、日高郡龍神村に在り。和歌山市の東南に當りて、龍神街道によるに約十七里あり。同郡御坊町より、東方約十二里にあり。傳に、往古役の小角始めて是れを開き、後僧空海、難陀龍王の夢告により、て、衆人に入浴を勸めたり。因りて龍神の溫泉と呼ぶと謂ふ。德川頼宣封を此國に受くるや、人を派して浴室を設け、殿垣内村の住民を、此處に移して居住せしめ、其が雜役を免除して、大に此地の開進を催す。是れより住民漸く集まり、遂に一部落をなして世に顯はる。地は極めて僻遠にして、然かも深山萬溪の中にあり。然かれども近年浴室益增加せり。泉源二個所に分れ、樋を以て六個の浴槽に通ず。泉質は炭酸泉にして、無色透明百〇二度の高溫を有す。効能は鉛山溫泉に等し。旅亭軒を並べて日高川の清流に枕み、幽邃謂はん方なく、眞に仙境の想あらしむ。

龍泉紀行

泉之土甚狹、居民十餘家高下其丘居焉。兩山爲峽隱蔽日月。非停午不見晷、山多丁香花。清香襲人。又多瓜蔞居人瓤根造粉以賣。溪中游魚數品。鱗魚最美。有紅鱗黑斑形如舫考俗名天魚。獸則羚羊麋鹿獺豺之類云云

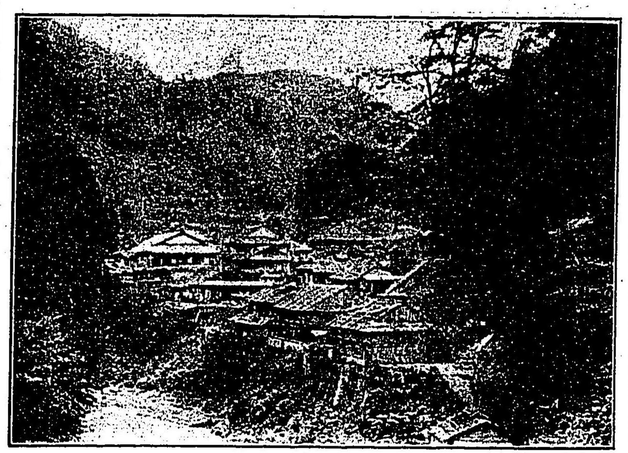
（南海文集）

湯に霞む谷の氣を蒸す

つゝじかな

橘仙

湯の峯溫泉



龍神溫泉

湯の峯溫泉　東牟婁郡四村大字湯の峯なる、湯の峯川の上流にありて、本宮を距ること西南二十五町なり。高熱を有もる硫黄泉にして、

湯の峯溫泉

米を甕に入れて投入しおけば、少時にして飯となすべし。光明湯　玉の湯　小栗の湯等に分る。湯屋十數戸ありて、一年の浴客一萬五千人に及ぶと謂ふ。此溫泉は、崇神天皇の御宇、熊野國造阿刀宿禰是れを發見し、浴場となせしに始まり、其名世に顯はれ、文武天皇を初め奉り、歷朝の天皇行幸し賜ふこと二十回に及ぶと謂ふ。

第五章　氣象

氣象とは、風土天氣等の狀

態を總稱するものにして、猶是れを細言すれば、風・雨・晴・陰・寒・暖・乾・濕等、大氣の物理的諸現象一切を謂ふものなり。各地氣象の相等しからざるは、其原因種々あり。或は緯度の高低、地質の如何、或は地形の狀態、海陸の關係。或は海流及氣候の如何等、其主なる原因なり。氣象は人生に直接重大なる關係を及ぼすものなるを以て、近時世界各國併ふて、是れが精細なる觀測を行ひつゝあり。我國に於ては明治八年始めて東京に測候所を設置せし以來、今日に至る迄、年々其數を增加して、南は臺灣より北は樺太に到る迄、其設置を見ざるなく、合計百十三個所の多きに達せり。此他朝鮮に九個所。清國に十個所を設く。而して東京測候所を初め、全國主要なる測候所十九個所に於ては、每時間に觀測をなし。其他の測候所に於ては、一日六回卽ち午前午後の二時六時十時に觀測を行ふ。稀に一日三回觀測をなす處あり。全國各地の是等測候所に於ては、其地氣象を觀測して、定期に是れを東京なる中央氣象臺に報告す。中央氣象臺は、是れが材料に基きて、天氣圖を調製し、又天氣豫報を發し、時に或は暴風などの襲來に對する警戒を加ふることあり。

測候所

中央氣象臺

氣象區

猶全國氣象の狀況を明細ならしめんが爲めに、全國を十個の氣象區に區分せり。

本縣測候所

本縣に初めて測候所を設置したるは、明治十二年七月にして、和歌山測候所を以て嚆矢とす。今日は此他猶二個の測候所あり。和歌山測候所は、和歌山市男の芝町にあり。東經百三十五度零九分、北緯三十四度十四分。海面上晴雨計の位置、十四米六の位置に在り。第二等測候所に屬し、每時觀測をなす。日の御崎測候所は、日高郡三尾村日の御崎の尖頭に在り、東經百三十五度四分、北緯三十三度五十三分に位す。潮の岬測候所は西牟婁郡潮岬村潮岬に在り、東經百三十五度四十六分、北緯三十三度二十六分に位す。二者共に明治三十三年一月の創設にして、一日六回觀測をなす。此他管內には伊都郡紀見、橋本、富貴、高野、那賀郡岩出、下神野、川原、有田郡八幡、廣、日高郡上山路、御坊、西牟婁郡田邊、東牟婁郡本宮、新宮の以上十四個所に觀測所を設け

第一節　氣溫

我國の氣候

我國は太平洋の北西隅に散列せる幾多の島嶼より成れるを以て、氣候は寒暖乾濕共に好適なりと謂ふべし。然れども特に近く亞細亞大陸に對するを以て、是れが影響を蒙ること少からず。されば純然たる島嶼的氣候を呈せずして稍大陸的たるを免れず。されば我國の氣候を概評すれば、大陸的海洋的氣候とも謂つ可きなり。

我國の氣溫

我國に於ては、年內を通じて、最高溫度なるは八月にして、最低溫度を示すは二月なり。八月の平均溫度は臺灣の二十七度より、北海道沙那の十五度四分の間にあり。又二月に於ける平均溫度に、臺灣の十九度九分より、大泊の零下十一度の間にあり。又我國の絕對溫度は、熊本の三十八度三分より、上川の零下四十一度の間にあり。其差實に七十九度三分なり。全年平均溫度は恒春の二十四度三分より、大泊の二度三分の間にありて、其中樞溫度は約十一度なりとす。

本縣の氣溫

本縣に於ける氣溫の狀況を見るに、其絕對溫度は、本宮の三十六度六分よ

和歌山と他府縣との比較

り、高野の零下十六度の間にありて、其差五十二度六分なり。而して八月の平均氣溫は廣に於ける二十八度三分より、富貴に於ける二十三度九分の間にあり。又二月平均氣溫は新宮の九度四分より高野の零度の間にあり。而して全年平均氣溫は約十五度なりとす。

今和歌山測候所の氣溫を以て、假りに本縣を代表するものとして、左に聊か他府縣の各地とを比較せんとす。和歌山市に於ける絕對氣溫は、三十六度六分より、零下五度四分の間にありて、其差四十二度あり。是れを他府縣の同一緯度に位する諸地方に比するに大差なし。又和歌山の八月の平均氣溫は二十六度八分にして、岡山・廣島・新居濱・德島・宮崎・鹿兒島等と殆んど同一溫度なり。又和歌山の二月の平均氣溫は四度八分にして、德島・多度津・吳・下關・横須賀等の各地と殆んど相等し。是れを同一緯度に位する各地と比較するに、大差なく、唯僅に廣島・岡山等より稍高溫にして、新居濱・四阪島等より稍低溫なり。又和歌山市に於ける全年平均氣溫は十五度二分にして、本邦中樞溫度よりも四度二分高しと謂ふべし。而して是れと殆んど同溫

縣下各地の氣溫

度を有する地方は神戸・吳・下關・大分・福岡・佐賀等の各地にして、和歌山は同一緯度の各地に比較して概して高溫度なりとす。

更に進んで、是れより管内各地の氣溫を觀察せざるべからず。蓋し本縣は、地形南北に延長し、且山脈縱横に起伏するあり。暖流の近く海中を駛るありて、各地亦特有の氣候を有し、大に其趣を異にするなり。全年平均氣溫は、概して南部に高く、北部に低し。則ち新宮の十八度二分を最高とし、潮岬の十七度七分、田邊の十七度六分等是れに次ぎ、最も低きは上山路の十度七分にして、是れに次ぎ高野の十一度六分、富貴の十二度七分、橋本の十四度九分等なり。又二月と八月との平均溫度の差を見るに、最も著大なるは橋本の二十三度二分にして、和歌山・岩出・紀見等の二十一度五分等是れに次ぐ。最小なるは潮岬の十八度、新宮の十八度五分、田邊の十八度九分等にして、概して南部海岸地方は、寒暑の差最少くして、北部紀の川流域地方は其差最も著し。

概況

一般に本縣の氣溫は南部に至るに從つて良好にして、北部に至るに從つ

て之れに反す。是れ北部は一般に內地寒冷の氣を受けて低溫にして亦寒暖の差大なれども、南部は海洋の影響を蒙りて、溫度の變化少く、高溫にして海洋的氣候を有すと知るべし。

第二節　雨量

雨量

雨量とは、雨・雪等空氣中の水分が、雨量計中に降下したる水の分量を示すものにして、一に降水量とも謂ふ、我國は四面環らすに、海洋を以てするの島國たるのみならず。暖流は殆んど其沿岸を洗ふて流れ、陸上には國土の延長に從ふて、大山脈の橫はるあり。特に季候風・貿易風等の氣流帶中に橫はるを以て、我國は概して雨量多き地なりとす。從つて灌漑の利便は勿論、生物の繁殖に最も適當せりと謂ふべし。

我國にて雨量多き時期

我國に於て雨量の最も多き月は、六・七・八月にして、最少きは十二・一・二月の交なれども、日本海方面の深雪地方は、却て冬季に於て雨量の大なるを見る。

雨量の測定

雨量を計るには雨量計を用ゐ、其分量を算するに粍なる單位を用ふ。即ち

一粍とは、面積一坪に對する降水量、一升八合三勺の割合を謂ふ。我國全年の雨量は、平均千五百七十三粍にして、我本土を一樣に五尺二寸の水層を以て、覆ふに足る量にして、一坪內の桝目約二十九石の割合なり。我國の雨量最も多き地方は、西南諸島にして、其總量實に三千粍に達せり。是れに次ぎて多きは、紀伊の南岸・臺灣島・九州島の東南面・四國島の南岸及北越地方等にして、二千粍以上に達す。最少きは瀨戸內沿岸地方・本州島の中央部・北海道の北岸等にして、其量一千粍以下にあり。

我國雨量分布

本縣の雨量は、全國中廣島・奥宮・古東・東京等と殆んど相等しく、約一千五百粍にして、全國平均雨量に比して、稍少き地方なりとす。管內に於て、雨量の最多の地方は、新宮・潮岬・上山路等にして、全年を通じて三千粍以上に達すること敢て珍らしからず。然るに北部にありては、大に減少して、千三百餘粍を示せり。即ち和歌山の千三百〇四粍・岩出の千二百六十粍・其他紀見・橋本・富貴等何れも千四百粍以下にして、本縣の平均雨量以下にあり。是れにより

縣下各地の雨量

て見るに、雨量は南部に多くして、北部に至るに從つて少し。是れ主として、

日本海流の影響を受くるものにして、日本海流は溫度に於ては、我國に大なる影響を與へざるものゝ如しと雖も、雨量に關しては著大なる影響を賦與するものにして、我國の日本海流に面する一帶の地方に、常に雨量の多きは、是れに基因するもの多しと謂ふべし。

降水日數

縣内に於ける降水日數は百數十日に亘り、最多きは高野の百七十一日にして、富貴の百六十八日、八幡の百六十九日、上山路の百五十六日等なり。最少なるは御坊の百二十九日、廣の百三十日、田邊の百三十三日等なりとす。

雨量の最大日量

概して此降水日數の北部山地に多くして、降水量多き南部に却て少きは、北部山地が冬季降雪あると、山中は常に寒冷にして、降水し易きとに因るものならん。又一日中の最大雨量は、廣の二百十粍より和歌山・岩出等の六十二粍の間にありて、一般に南部海岸地方を最大とす。本邦に於て觀測せし最強雨は、去る明治二十二年八月二十日、本縣田邊に於けるものを以て最大とす。即ち一日の量、實に九百粍の巨量に達したり。是れに次ぐを、同年同月同日の湯淺に於ける五百二十粍なりとす。此他明治廿九年九月七日、滋賀

縣彦根に於て五百九十七粍に達せしことあり。其他宮崎・德島等の各地に於て、四百七十粍以上を示せしことあり。又我國に於て觀測せし、一時間降水最大量は、明治二十九年十一月十六日、和歌山に於ける六十二粍八分を以て最大とす。是れによりて見るも、九州・四國・紀伊に亘る沿岸の多雨帶地方は、亦同時に我國第一の豪雨帶にして、特に本縣を以て最も然りとなす。

一時間最大雨量

降雪降霜

更に進んで、降雪及降霜の狀況を見るに、和歌山に於ては去る明治二十二年以來、今日に至る迄二十個年間を通じて、初雪は明治三十四年十二月八日を最早とし、最も遲きは三十三年にして、一月廿一日なりき。又終雪は明治三十五年四月十一日なりき。霜につきては、初霜は明治廿三年の十一月十三日を最早とし、終霜は三十五年の四月十二日を最遲しとす。要するに降雪霜は、東北部に最も多くして南方に至るに從つて少く南端に於ては降雪極めて稀なり。和歌山の降雪日數は十七日にして降霜日數は五十四日なり。何れも近畿地方中、最少の地なりとす。詮するに本縣にありては、霜雪共に、雨量に大なる關係殆んど是れなしと謂ふべし。

第三節　濕　度

濕度

濕氣は常に空氣中に包含せらるゝものにして、我國の如き島國にありては、特に多しとす。濕氣の量は一年内を通じて蒸發盛なる夏季に最多くして、冬季に少し。濕氣の多少は、氣象上に直接の影響を與へ、又生物に非常なる關係を有するものなり。濕氣が空氣中に包含せらるゝ、最大極量に達したる時の狀態を飽和と謂ふ。而して空氣中の濕氣の分量を濕度と謂ふ。

濕度は通常百分率%を以て表はす。海面にては九〇%にして夜に入りて一〇〇%に至ることあり。我國に於ては冬天乾燥したるときは、平均四〇%又は三〇%に降る事あり。此濕度は氣溫と密接の關係を有するものにして氣溫の增加と共に增加す。濕度を計る器械を乾濕計と謂ふ。

乾濕計

我國の濕度

我國の濕度は、表日本と裏日本とに於て著しき差あり。一般に表日本にありては、全年平均約七九%にして、裏日本にありては八一%なれば、表日本は裏日本よりも乾燥せりと謂ふべし。而して我國の濕度の變化を見るに、

時に甚しく乾燥して、三〇%以下に降る處あるは珍らしからず。明治初年以來の觀測の結果に因るに、其最小濕度は宇都宮に於て七%、東京及函館に於て八%に降下せしことあり。

本縣の濕度

本縣は國土狹少にして、海岸線甚長く、且常に海風を受くるを以て濕度從つて低からざるも、北部紀の川流域に至りては稍乾燥なり。今試みに和歌山に於ける濕度を掲ぐるに

春期	七〇·四
夏期	七七·四
秋期	七四·〇
冬期	六七·〇
平均	七二·二

是れに因りて見るに和歌山は表日本に於ける平均濕度よりも低くして又近畿地方各地に比較するに最も乾燥せる地なりとす。而して最低の濕度は明治廿四年五月一日の一七%に降下せしことあり。

雲量

快晴日數
曇天日數

次に雲量につきて陳べんに、雲量は氣象學上滿天雲なきを零とし、滿天雲に蔽はるゝを十として、其分量を計る。我國に於ける雲量は、表日本にては、夏季に多くして、冬季に少く、特に十二月は最小にして、五・〇を示せども、暑氣に向ふに從つて增大して、最大は六月の七・七に達す。表日本全年の平均六・一を示す。裏日本に於ては是れと全く相反し、冬季に最多くして夏季に少く、全年の平均七・二に達す。本縣は大體に於て、表日本の雲量の狀態に同樣なれども、今和歌山に就きて檢するに、最小は十二月の五・八より、最大六月の七・七に至り、全年平均六・六となりて、表日本の平均雲量よりも稍大なりとす。

次に快晴日數及曇天日數を研究すれば、全年を通じて表日本は、裏日本に比して快晴多く曇天少し。卽ち表日本に於ける快晴日數は、總日數の百分の十三に達するも、裏日本にありては、僅かに百分の六にして、其半數に達せず。又曇天を見るに表日本にありては、百分の三十六に過ぎざれども、裏日本に於ては、百分の五十六に達し、裏日本は表日本より遙かに大なり。而し

我國の風

て年內を通じて、天氣の變化を見るに、表裏日本に於て、是れ亦全く反對の現象あり。卽ち表日本の曇天少きは冬期にして快晴の多きも亦此期なり。曇天は一月に最小にして、百分の二十を出でざるに、夏期に於ては甚多く、六月を最大とし、百分の五十六に至る。快晴は十二月の百分の二十四を最多とし、六月の百分の五を最小とす。本縣の天氣の變化も亦全く是れと其軌を同ふし、而して快晴日數は、年平均百分の十二、曇天は百分の三十八にして、表日本の平均日數に甚近しと謂ふべし。

第四節　氣流

我國は一方に大陸を控へ、一面に大洋に接するを以て、此等海陸の關係によりて、氣流に大なる影響を與ふるのみならず。國土の地形上に種々なる特色ありて、我國に於ける風向風力には、一定の規律なく、常に變化して定まらず。されども大體に於て、風位は北西又は北風にして、西風是れに次ぎ、冬季にありては北又は西北の風多くして、夏季にありては南又は東南の風多

風向

きを見る。

和歌山にありては、東々北の風向最多く、東北及北々東の風是れに次ぐ。平均北十六度東となる。日の御崎にありては、北風最多く北西風是れに次ぎ、平均北十一度西の風となる。潮の岬にありては西風最多くして、北東風も亦多く平均北十九度西の風となる。次に四季に於ける此等各地の風向を見るに左の如し

	春	夏	秋	冬
和歌山	北々東	西南	北東	北西
日御埼	北西	北東々	北々東	北西
潮岬	北々西	北々西	北々西	北西

風力

次に風速力につきて述べんに、本邦にありては冬春の二期に於て最強く、就中十二月又は一月を以て其最とす。風速力の弱きは、八月より十月の間にあり。是れ本邦に於て常に暴風の襲來する期節なるに拘らず、此期節の平均風速力は全年中の最小なるを見れば、此期節の通常風は甚だ弱きを知

るべし。我國にありては、裏日本は表日本に比すれば、一般に風稍強く、而して本邦中風力の最大なるは、北海道なりとす。即ち次の如し。

	冬	春	夏	秋	全年
表日本	二・七	二・七	二・三	二・三	二・五
裏日本	三・四	三・三	二・五	二・七	三・〇
北海道	五・四	五・四	四・三	五・一	五・〇

備考（一秒時間ノ風速力ヲ米突ヲ以テ測リタルモノナリ）

本縣各地に於ける風速力を見るに、一般に冬春に強くして夏秋に弱く、全く本邦の風速力の傾向と同一なり。今左に詳細なる數字を以て明示せんとす。

	冬	春	夏	秋	全年
和歌山	三・四	三・一	二・九	二・八	三・一
日御埼	一〇・六	八・一	四・八	七・三	七・七
潮岬	四・二	四・八	四・四	三・八	四・三

是れに因りて見るに、日御埼は風力最も強大にして、和歌山最弱く、潮岬は其中間に在り。一般に風力は海岸と內地、又は平地と山地、外洋の突角と內海の沿岸とは、自ら強弱の差別あるべきは固より論を俟たず。而して前者は常に後者よりも強烈なるを普通とす。本縣は遠く外洋に突出せる一大半島にして、洋上を馳走する風を直接に受くる地方なれば、概して本縣に於ける風力は、我國中最も強烈なる地方の一にして、北海道の平均風力と、殆んど相等しく、縣本中風力最も小なる和歌山に於てすら、猶本邦中一般に風力強しとせる、裏日本の平均風力に勝れり。亦以て其一般を察知すべし。

最大風力

次に最大風速力につきて記さんに、本邦にありて最大風速力を有するは、多くは晩夏初秋の風にして、即ち一秒時間に三十米を超越する事、甚だ稀なりとせず。今全國各測候所の、創設以來の觀測の結果につきて見るに、明治廿八年五月十八日、北海道壽都に於ける五六・四米を最大とし、明治廿六年四月四日、同樣襄に於ける、五〇・二米是れに次ぐ。和歌山にありては、明治三十三年九月廿八日に於ける、二八・一米を最大とし。日御崎にありては、明治卅

三年十二月六日に於ける、四〇・六米を以て最大とし。潮岬にありては、卅五年十二月六日に於ける、三〇・八米卅九年二月一日の三〇・七米等を以て最大とす。而して主に何れも、南又は西の風にして、主として冬季に多しとす。

本縣に暴風多き理由

又毎年秋季に本邦に襲來する暴風あり。其初めはフィリッピン群島の附近に起りて、常に北又は東北に向て進行し來る。其進路は約十二條ありて、此中紀州沖附近を通過するもの頗る多し。其特に本縣に大なる影響を加ふるものゝ進路は、先づ大隅國佐多岬より、東北に一直線に進行し來りて、本縣田邊附近に出で、紀伊半島を斜に横ぎりて、志摩國大王崎を經過する、斜線に添ふて通ずるものにして、其平均速力は一時間に凡十七八浬なりとす。されば本縣は、常に大暴風帶の要衝に當り。和歌山測候所創立以來の記錄に徵するも、年々三回乃至五十回の暴風を蒙らざることなかりき。斯の如く本縣は、常に暴風通過の衝にあるを以て、海岸名地に、數多の暴風警報信號標を設置して、一般の警戒の便を圖れり。而して其數縣立十四個所、官立二個所あり。其數の多きこと、全國中稀に見るの處たり。今左に其所在地を

暴風警戒信號標

列記せん。

縣立

和歌山市男之芝町

海草郡塩津村字山下

同　大崎村大字大崎

有田郡湯淺町大字湯淺

日高郡由良大字里

同　御坊町大字御坊

同　印南町大字印南

西牟婁郡田邊町大字上屋敷

同　串本町字北地生

東牟婁郡大島村字大島

同　太地村大字太地

同　勝浦村字城山

同　三輪崎村大字三輪崎

同　新宮町字丹鶴

官立

日高郡三尾村日御埼海軍望樓內

西牟婁郡潮岬村潮岬海軍望樓內

海軍望樓は近時廢止さきたり

第五節　地震

我國には大小地震の多きことは、世界に於て最も有名なる國なり。明治十八年我國は世界各國に率先して、全國に地震報告の制を定めてより、明治三十八年迄、廿一箇年間に總計三萬六百八十回あり。毎年少きは四百七十餘回、多きは二千七百二十九回の多きに達し、平均千四百六十一回となる。

以上の地震回數は、大部分は全く機械に因らず。又は不完全なる機械等に因りて、調査したるものなれば、實際は此他猶計算に洩れたるものも隨分多かるべし。

我國の地震回數

大地震回數

地震の中、破壞的地震卽ち激震と名けて、家屋を破り、或は土地を陷落又は龜裂せしめ、又は人命などに損失を及ぼしたる大地震は、我國に於ては允恭天皇の卽位五年より、明治三十八年迄千四百八十九年間に、二百二十四回の記錄あり。此他上世の記錄及交通などの、不完全なる時代に於ては其記錄に洩れたるもの多々之れ有るべし。德川時代となりては、天變地異あるときは、其都度諸侯より屆出づべき規定なりしかば、此時代には殆んど洩れたるものなかるべし。平均德川時代には、二年九ヶ月間に一回の大地震の襲來せし割合なり。明治となりては、大地震と稱するものは、二十二年より四十三年迄に十四回ありき。

大地震と期節

我國に於ける大地震の一年中の分布は如何と謂ふに、八月に最多く一月に最少し。更に是れを季節に就きて覽るに、夏季に最多く冬季は概して少し。小地震は五月に最多くして、六月より九月迄の間に多し。是れを四季に分ちて見るに、概して春季に最多數にして、夏季に最小數を示す。斯の如く大地震と小地震とは、發生の季節を異にし、稍反對の觀あるは、注意すべき

現象なり。更に是れを概觀するに、四季の中、南日本は冬季に多き地方にして、北日本は夏季に多きが如し。本縣は南日本に位して、冬季地震を多く感ずる區域中に在りと謂ふべし。

大地震多き國

我國の中に於て、大地震多き地方と、稀なる地方とあり。大地震の一回も記錄なき國は、壹岐但馬隱岐の三國と、北海道の後志・北見・日高・十勝の七國にして、唯一回の記錄に止まるは、筑後・豐前・周防・伯耆・美作・天擇・石狩の七國なり。六回以上は伊豫・和泉・伊賀・近江・越前・美濃・尾張・中斐・伊豆・下總・常陸・越後・陸前の十三個國にして、十一回以上は山城・大和・河內・播磨・攝津・紀伊・伊勢・信濃・三河・遠江・駿河・相模・武藏・下野・岩代の十四個國にて我國最多の地方なり。此他は二回より五回の間なり。而して近畿地方は、我國大地震の最多き地方の一なることに注意すべし。德川時代のみに就きて見るに、大地震の最多かりしは、武藏の十四回、相模の十一回等にして、六回以上に及ぶは、近畿地方・東海道方面の國々にして、紀伊國も實に此中に在り。

局部大地震と非局部大地震

今地震の中に就きて、其震動區域が一國內に限られたるものを局部大地

震と謂ひ、二國以上に亘るものを、非局部大地震と名けて、區別するときは、從來兩者の我國に起りし度數を比較すれば、局部大地震は、非局部大地震の約二倍なり。九州北部、四國南部、近畿地方及東海道方面には、最も大なる非局部大地震の生起する地方にして、其原因は、海岸に遠からざる海底に、陸地と並行する長き震原の存するに因るならんと謂ふ。概して我國に於ては、太平洋に面する地方は、廣大なる地震の起ること度々にして、日本海に面する地方には、局部地震の發生すること多し。是れ我國の地體構造上、外帶たる表日本が、內帶たる裏日本より、大地震の多きことは勿論のことなり。而して表日本に於ては、通常海中に震原を有するを以て、往々非常なる大津浪を伴生して、地震よりも却つて大なる慘害を及ぼすこと、珍らしからず。大森博士によるに、激震の震原が太平洋にありし大地震四十七回あり。我國大地震總數の約十分の三を占む。此中津浪を伴ひし大地震は二十三回にして、實に其半數を占む。是れに反して、日本海に震原の發生せしもの十七回ありて、其中五回のみ津浪を伴ふを見る。

地震と津浪

大津浪多き地方

我國に於て大地震に伴ふ大津浪の最多きは、陸中、陸前、伊豆、駿河、遠江、攝津、紀伊の沿岸にして、六回乃至七回の大襲來に遭遇せり。本縣の沿岸は、實に我國津浪帶の主位にあるものと謂ふべし。今次に我國古來最大の地震たる、寶永四年及安政元年の地震につきて記さんに、何れも紀伊の沿岸に近く震原を有し、紀伊の如き最も著しき慘害を蒙りたり。

寶永の大震

寶永の大震　寶永四年十月四日の大地震は、大森博士によれば、震原は紀伊と阿波との中間より、約二十里の南方海中に起り、地震の發せしは、午後二時より二時半迄の間にして、其時の震域は實に廣大なるものにして、東は駿河より北は甲斐、信濃に及び、西は九州東部に亘り、直徑約二百里の間に及べり。此時紀伊にありては、地震後約一時間にして、大なる津浪襲來せり。此津浪は震域國々の沿岸には、悉く波及し、特に紀伊水道には非常なる勢を以て突進し來り、大阪灣を衝き、大阪の如き甚しき災害を蒙りたり。他の方面には、豐後水道に突入して、遂に長門の海岸に迄及びしと謂へば、其震原に最も近接せる紀伊沿岸の如きは、其津浪の如何に勢力の猛烈なりしかを想

像するに足らん。

安政の大震

安政の大震　安政元年十一月四日五日の兩大地震は世に所謂安政の大地震と稱ふるものにして、四日のものは東海道の海底に震原を有して、紀伊より上總に及べり。又五日のものは南海道の南方海底に發して、前日の繼續地震と見做すべきものなり。紀伊より以西畿內、中國、四國の全部、九州北半に迄及べり。是れ亦大津浪を伴生して、兩回共我國の沿岸のみならず、太平洋を橫斷して、遠く亞米利加大陸の沿岸に波及せりと謂ふ。如何に激甚にして、絕大なりしかを想見するを得べし。

概說

以上は我國に於て主として大地震につきて記載せしが、全國を通じて小地震は、我日本の中、關東以北の海岸地方に多くして、關西の海岸地方に最も少きが如し、然るに紀伊西海岸一帶は關西に於て小地震の度々發生する地帶にして、我國に於ける約十個所の小地震帶の一なり。蓋し紀伊水道の陷落せる、地體構造に基因する地震ならんか。

要するに本縣は、大小地震多き危險地帶中に在りて、年々二三十回、多きは

五十餘回の地震ありて、大小多くは海中に震原を有するものゝ如く、又從つて津浪の襲來することも、他地方に比較して其多きを覺悟せざるべからず。而して地震發生の時季は概して冬季に多き地方なりとす。

第二編　人文地理

第一章　上世の住民

第一節　石器時代

大古の住民

紀伊には何時の頃より、人類の生活する所となりしか、固より明かに知るに由なし。日本民族が、我國に繁榮せる以前に、最初の居住者として生活せる種族を、人類學者は石器時代住民と呼ぶ。日本全土に其遺跡を有し、特に

人種說一

人種說二

人種說三

關東地方に多しとす。次で是れに代はれる民族は、今日北海道以北に殘存せるアイヌ種族なり。アイヌ種族を逐ふて、是れに代はれる者は、吾人の祖先たる大和民族なり。然らば我國最初の居住者たる、石器時代の住民は、抑如何なる人類ぞや。坪井理學博士は、是等石器時代民族を以て、コロボックルなる一人種なりとし、今北海道に殘存せるアイヌ種族とは、全く別種のものにして、我大和民族が、西南より頻りに北上するに從て、先住せるアイヌ種族は、更に其先住者たるコロボックルを北方に逐ひて、其地を占め、遂に其跡を絶たしめたるものとなせり。石器時代の住民は、アイヌ種族にあらずとは、學者の贊成するもの少からず。三宅文學博士は、古事記・日本書紀等に見へたる土蜘蛛を以て、石器時代の住民とし、是れぞ我國先住の土著にして、坪井博士が所謂コロボックルなりと論定せり。小金井醫學博士は、種々なる方面より坪井博士に反對して、日本石器時代住民は、今日北海道に住するアイヌ種族の祖先なりと論斷せり。要するに、此民族は我國に於ては、今より約三千年以前に住せしものにして、未だ金屬の用法を知らず。石を以て諸

石器時代住民の遺跡

種の器具を製作して、日常是れを使用せしより起れる名にして、其遺跡は石鏃・石棒・雷斧・雷槌・石匙・石錐・石楔・石小刀・石庖刃・獸骨角・土器等の存在によりて、是れを知ることを得べし。此他多くの貝殼の地中より出づることあり。是れを貝塚又は介墟と呼ぶ。又土器を多く出すことあり。是れを土器塚と謂ふ。以上の貝殼及土器が、一所に混在して出づることあり。是等貝塚・土器塚及各種の石器の存在する地方には、常て石器時代民族の住居せしことを證明するものなり。我國に於て近年迄に調査したる全國石器時代の遺跡の總數は、實に三千五百個所に及ぶ。此中關東地方最多く、實に全國總數の三分の一强に當りて千二百餘個所あり。此中武藏最も多くして、六百八十餘個所を數ふべし。然るに近畿地方にありては、遺跡の發見全國中最も少く、僅に五十餘個所に過ぎずして、全國總數の六十三分の一に當るのみ。而して紀伊に在りては、僅々二個所に止まる。されば紀伊には石器時代民族の盛に居住するには至らざりしと雖も、然かも該民族が、此地に居住せしは疑なき事實なりとす。

第二節　佩玉時代

上古大和民族の遺跡

石器時代民族に次で、我國に住せしものはアイヌ種族なり。殆んど全國に亘りて居住せしものゝ如し。是れに次で渡來せしは、卽ち我大和民族にして、世界に於ける高等優秀なる種族なり。上世に於ける吾人の祖先たる大和民族は、金屬を使用し、土器を製作し、曲玉・管玉等を佩用せり。其居住せる遺跡として、全國に巨多の古墳各種の土器及曲玉・管玉等の遺物を、今日に殘存せり。其年代は太古より奈良朝時代の以前に及び、今を距ること大凡二千年前後のものなり。此時代を名けて、佩玉時代と呼ぶ。地方によりて古墳の所在地を呼ぶに、各特別の名を以てすることあり。二子塚・平塚・丸山・百塚・築山・千塚など謂ふは、大抵古墳の存在を表はしたる地名なり。而して此等遺跡の最も多きは、近畿地方にして、次で關東地方なり。近年迄に世に知られたる、全國の古墳・横穴等の總數は、二千七百個所に及ぶ。此中近畿地方には、總數七百九十餘個所ありて、全國總數の約三分の一を占む。關東地

大和民族は如何なる人種なるか

方は、全國總數の四分の一強に當る。本縣にありては二十餘個所ありて、特に紀の川沿岸に多く、海草郡岩橋の百塚の如き其著しきものなり。

日本民族が如何なる人種に屬するかは、學者間に諸說紛々として歸一する處あらず。或はウラルアルタイ派に屬すとなすあり。或は印度アリアン種族に屬すとなす人あり。或は南洋種族となすものあり。又は蒙古種族となすものあり。我日本人種に、アジア大陸種族の血液の大に混せるものあることは事實なるも、さりとて純然たる蒙古種にもあらず。漢族にもあらず。是れを要するに、日本人種は一の混合種族なり。一は北方亞細亞大陸より移轉し來れる蒙古種族あらん。一は南洋より黑潮に乘じて渡來せる南洋民族あり。其他漢人種・アイヌ族・印度支那族等各種の民族が混合融化して以て今日の日本人種を形成するに至りしすのなり。

大和民族の渡來

吾人の祖先が我國に渡來するや、前後二回の有力なる大移轉ありしが如し。其一は出雲地方に渡來したるものにして、是れを出雲派と名け、其中心は出雲にありて、彼天の安川の會議後、其統率者たりし素盞嗚尊は此地に退

きて、山陰・北陸地方を經營せられ、其子大國主尊に至りては、少彦名命の力を得て、益四方を經倫し、其勢力は中國・近畿・北陸・信濃等に迄及びたるものゝ如し。其二は高千穂峯に臨降せられたる一派にして、瓊々杵尊は實に其頭首として、初め九州の天地によりて經營せられ、遂に神武天皇の御東遷となり、大和に即位せられ、直に國土の統一を見るに至りしなり。

日本民族の近畿地方に入り道

日本民族は何れよりか紀伊の地に入りしか

日本民族が近畿地方に入りし經路を研究するに、一方は出雲方面より山陰道を經て東遷し來りしものと、一方は西南地方より海路を以て、瀬戸内海を東上せしものゝ如し。而して是等吾人の祖先は如何なる方面より、我紀伊の地に入來りしぞ。此問題に對しては、我大和民族の遺跡又は歴史上より檢索せんに、一は大和方面より紀の川の流れに添ふて下り來りしものと、一は海路によりて初め紀の川口より内地に入來りしものゝ如し。從て紀の川沿岸は最も早くより日本民族の繁榮せしことは、其遺跡及史實の歴々として徴證する所なり。されば紀の川流域は、實に木の國發展の搖籃たりしなり。又他方面には、熊野川を下りて大和より南下せるものもありしな

らん。又海路によりて、沿岸各地の河口に近き沖積的の平野に移轉し來り、漸次に其河道を辿りて内地に入りしものならん。特に紀の川熊野川の如きは夙に此等住民の重要なる交通路として利用せられし所なり。又西南地方より黒潮に乘じて、外洋を直接に此國の沿岸に渡來せしものも是れあるべし。要するに紀伊の開化は、紀の川流域と、熊野川に近き地方との、二個所に起りて後漸く全國に及びしものゝ如し。是れ此地方が遠く上世に關する傳説遺跡の多々存するによりても明かなり。

有史時代に入りては、他地方との交通は愈多くなれり。そは此國の氣候極めて温和にして地肥之著しき神社佛寺の數多く、沿岸の風光は甚だ明媚にして、四時の賞觀遊覽に適せり。加ふるに畿内に接近せるを以て、歴朝の天皇皇族及公卿百官を初め、各地の住民此國に往來するもの甚多く、其間には止まりて此地に永住せるものも多かりしならん。文化を輸入せることも繁からん。かくて紀伊の文化は愈開けて、特に畿内の感化影響を蒙りしことは決して鮮少にはあらざるべし。

第二章　疆域の沿革

國號の起原

紀伊國は往古木の國と呼べり。其樹木の好く生長繁茂するを以てなりと謂ふ。元明天皇和銅六年五月諸國に詔して國郡鄕名に好字を撰ばしむ。續日本紀卷六

和銅六年五月甲子　畿內七道諸國郡鄕名著好字。其郡內所生銀銅彩色草木禽獸魚蟲等物具錄色目及土地肥瘠山川原野名號所由。又古老相傳舊聞異事。載干史籍言上。

一異說

この時峽の國を甲斐と改め、火の國を肥前肥後と改めし類多かりしが、木の國も紀伊國と改めしなり。或は近時一說に、キイはアイヌ語の蘆の生へおる處なる意味の詞にして、往昔紀の川口の深く遠く灣入して、恰も今の和歌浦附近の如き淺き入江をなし、盛に蘆荻の繁茂せるより、此邊に住せしアイヌ人は、此地方にキイなる名稱を附せしものなるが、後世遂に此國一帶の名稱となりしものにして、最初よりキイと呼做せしものならんと。

熊野國

神武天皇大和に御位に卽かせられたる後、天道根命を以て木の國の國造となし給へり。されども此頃は何處の邊迄を木の國と呼びたるか、其疆域定かならず。日本書紀卷八成務天皇の五年秋九月の條に

令諸國以國郡立造長縣邑稻置。並賜楯矛以爲表。卽隔山河而分國縣隨阡陌以定邑里。

とあるを見れば、此御代に全國各地に幾多の國縣を增置せられて、其疆域も或は明確となり、或は改廢せられしなるべし。國造本紀に因るに、此朝に定められたる國凡六十三あり。此中に熊野國の名の見ゆれば、熊野地方は此時木の國より分れて、一國とせられしものにや。將た此時別に新らたに設けられしにや。其範圍も固より明ならず。孝德天皇の大化二年に、熊野國を廢して、今の南牟婁郡荒阪村大字二本島の溪流相川を以て、紀伊と志摩との境と定められ、其が以南を牟婁郡と稱し、本國に編入し、以北を志摩國英虞郡に入れ伊勢神領たり。文武天皇の律令を制定せられ給ふや、全國を大國上國中國下國の四等に分ち、田畝開け人口殖へたるものを大國とせられ

たるが如し。又畿内を中心として、其遠近の距離、交通の狀態によりて、遠國・中國・近國の三つに分てり。紀伊國は古來上國にして、亦近國の中にありて、南海道の首班に置かる。延喜式及倭名類聚抄に因りて見るに、國内凡て七郡あり。伊都・那賀・名草・海部・在田・日高・牟婁即ち是れなり。孝德天皇の大化の改新に因りて、國郡の境界を改め、新に國司・郡司を置かれし事なれば、是等七郡の疆域及名號は、大抵此朝に定め給ふ所なるべし。又倭名抄に因るに、以上七郡の管する所の鄕數、總て五十三あり。是等の地名は、其後今日に至る迄、或は併合し、或は分轄し、其名稱も度々改められし事なれば、今日の何れの地に當れるか明白ならざれども、今左に參考の爲めに是れを列記せん。

七郡

五十三鄕

倭名抄に記されたる鄕名

而して此鄕名は、大化以後仁明天皇の御代頃迄に備はれしものならんと謂ふ。

倭名類聚抄卷之五

紀伊國 國府在名草郡行程上四日下二日 七千百九十八町五段百歩 正公各十七万五千束 本稻四十六万八千八百十八束 雜稻十一万八千十八束

伊都 那賀 賀音如鵝 名草 奈久佐國府 海部 阿末 在田 阿里太 日高 比太加 牟婁 牟呂

卷之九

同

紀伊國第百十九

伊都郡 神戸 天野村見好村ふり 賀美 隅田村橋本町總野村等ふらん

村主 山田村邊ふらん 指理 妙寺町邊ふらん大字飯降あり

桑原 笠田村大谷村帶ふらんか

那賀郡 神戸 中貴志村ふり大字神戸あり 右手 名手の訛ふり名手村玉手村狩宿村川原村上名手村等ふらん

福門 フケトふり長田村ふらん大字深田あり 那賀 池田村田中村若出町等ふらん

荒川 安樂川村龍門村麻生津村等ふり 山埼 山崎村根來村等ふり

埴崎 小倉村ふり大字吐前あり

名草郡 大屋 川永村ふらん大屋都比賣神社あり 直川 直川村ふり

苑部 有功村楠見村ふらん 太田 宮村ふらん大字大田あり

大宅 宮前村ふらん 忌部 岡崎村ふり

誰戸 斷屋

驛家 山口村からん
津麻 西山東村からんか
國懸
有眞 アリマかり鳴神村かり
大野 大野村かり
日前神戸 上の國懸と同所からん 宮村大字秋月かり
杵曾
須佐神戸 西山東村に大字須佐あり
海部郡 賀太 加太村かり
全戸 餘戸の誤かり貴志村木本村等かり
在田郡 吉備 藤並村かり
英多 宮原村田殿村邊か
須佐 保田村系我村等か
日高郡 財部 湯川村かり
野應 山口村の中からん
神戸 津麻神戸と云ひしな二つに誤り分ちしからん
島神戸 中之島村四箇郷村邊か
八荒賀 アラカかり荒鹿とも書く岡崎村かり
且來 魚川村に大字且來あり
伊太
神戸 伊太杵曾神戸は同一の地なるを誤りて三分せしからん
濱中 濱中村 加茂村 仁義村 大崎村 濱津村 淑村等かり
蜂家 ミヤケかり雑賀村和歌浦邊か
溫笠 ユカサかり湯浅町廣村邊かり
奈郷 奈賀郷かり者を脱せしからんと云ふ 宮崎村田殿川村邊からん
清水

紀伊の一部畿内に入る
志摩の一部も紀伊に入る
徳川時代

內原 東內原村西內原村 志賀村邊かり
南部 南部町上南部村若代村邊か
牟婁郡 岡田 太田村下里村邊か
栗栖 近露村栗栖川村三栖村邊かり
神戸 本宮村かり
石淵 イヤブチかり野口村提原村邊かり 野口村に若內あり
全戸 餘戸かり白崎日御崎間の海村かり
牟婁 田邊町附近かり
三前 ミクマかり新宮町三輪崎町邊からん

以上七郡の四至は、今日と大差なしと雖も、此間多少の變化あり。孝德天皇の大化改新の際、諸國の境界を改定せらるゝに當りて、畿內の境域を分ちて紀伊國伊都郡兄山を以て南界とせられたり。日本書紀に「南自紀伊兄山以來爲畿內」とあり、兄山は今の伊都郡笠田村の中なり。當時伊都郡は、大和國に屬せしめられたるが如し。降りて戰國時代となり、天正二年熊野新宮に割據せし堀內氏善志摩國の地を侵略したるより、後世志摩國荷坂峠以西を牟婁郡に屬せしめ、紀伊國に入るゝに至れり。今の北牟婁郡の地卽ち是れなり。徳川頼宣の當國の主となるに及び、今の東西牟婁郡の地を口熊野と呼べり。明治十二年に至つて、郡區の

明治時代

改正行はれてより、始めて熊野の地を東西南北牟婁郡に分ち、東西牟婁二郡は和歌山縣に編入し。南北牟婁郡二郡は三重縣に編入せらる。明治廿九年四月一日、名草海部二郡を合して海草郡となせしより、管内凡て一市七郡となれり。是れ本縣疆域沿革の大樣なり。

紀伊は初め何人により治められしか

第三章　統治の沿革

第一節　大化以前

紀伊は早くより、大和民族の居住繁榮せし地にして、其統治は出雲派の諸神によりて經營せられたるものゝ如し。そは近畿地方は悉く出雲派の勢力圏内に屬せる地方にして、試みに是等地方の、一の宮に就きて見るも、其祭神は主として出雲系統の諸神なり。今紀伊國に奉祀せる神社を見るに、古きは多く出雲派にする神々にして、海草郡にある國幣中社として尊崇する、伊太祁曾神社は、實に素盞嗚尊の御子、五十猛命を祀れるものなり。五十猛

命は紀伊と如何なる關係ありや。是れにつき日本書紀は明記して曰く

素盞嗚尊之子　號曰五十猛命　妹大屋津姫命次抓津姫命　凡三神亦能分布木種卽奉渡於紀伊也。

此三神は、共に此國に奉祀して、延喜式に載れる大社たるを見る。其他各地に、此三神及出雲派諸神を祀れるもの少からず。又日本書紀神代卷に、伊弉冊尊崩御の事を書して「葬於紀伊國熊野有馬村焉」とあり。卽ち今の南牟婁郡有井村大字有馬にして、住民は此神を祭るに、花時は花を以てし、又鼓笛旗等を用ひて、歌ひ舞ひ祭ること、今も猶渝らずと謂ふ。今此村の海岸に、花の窟と稱する處あり。此神の陵なりと謂傳ふ。其傍の王子の窟には、其御子たる火神を祀り。又其北數町に產田神社ありて、親子三神を奉祀せり

又大國主神、出雲にて八十神に苦めらるゝや、逃れて此國に避け給ひしことあり。其他出雲派諸神に關する傳說遺跡少からず。されば夙に是等諸神は、出雲地方と相往來して、紀雲二地方は既に神代の時に於て、密接の交渉ありしを知るべし。されば是等神々によりて、統治經營せられしこと實に疑

を容れざるなり。

神武天皇御東遷

神代にありては紀の川流域は、神魂命の子御氣持命、代々其地を統治し、熊野の地は二部に分れて、西方は饒速日命の子高倉下命是れを領し。東部は丹數戸畔是れを經略せしものゝ如し。神武天皇の御東遷に際しては、此國の沿岸を廻航せさせ給ひ、御船を紀の川口男之水門に着けさせ給ふ。古事記に

與登美毘古戰之時五瀬命於御手負登美毘古之痛矢串　故爾詔吾者爲日神之御子　向日而戰不良、故負奴之痛手　自今者行廻而背負日以擊期而自南方廻幸之時　到血沼海洗其御手之血、故謂血沼海也。從其地廻幸到紀國男之水門。而詔負賤奴之痛手乎死爲男建而崩　故號其水門謂男水門也。陵卽在紀國竈山也。

紀伊國造

かくて天皇は名草の地に於て、御氣持命の後名草戸畔を誅し。熊野に於ては丹敷戸畔を誅し高倉下をも歸服せしめ給ひしかば、茲に紀伊國内悉く平げり。天皇大和に卽位せられし後、高倉下を侍臣となし、御氣持命の後天

道根命を、新に紀伊國造に任せらる。其子孫は代々此國の國造として、綿々として今に絶ねず。成務天皇の朝に、熊野の地を熊野國となし、始めて高倉下の弟、可美眞手命の後裔、大阿斗足尼を國造に任じ給ひしこと史に見ゆ。

熊野國

上世は國造の外に、國を治むるに、別と稱する官職あり。又此國造及別の外に、此國には海部・熊野部・大伴部・齋部・伊勢部・酒部等の諸職に從事する諸部ありて、國造及別の統治以外に立てり。上世國造の此國を統治せる狀況を

別部

察するに、大抵今の海草郡の地方にして其他の部分には、別を置きて治めしものゝ如し。諸國の國造の中にて、紀伊・出雲の二國造は他に異りて、其國内に鎮座まします神々の祭ければ、二國造を任命するには、特に朝廷も意を用ゐられ、其儀式など別に定めありしと謂ふ。木の國造の譜第を見るに、神武天皇の御代、天道根命の始めて國造に任せられてより、このかた大化改新の際に於ける國造、紀直忍穗に至る迄、凡十八人あり。熊野國造につきては、大阿斗足の外詳ならず。此國に於ける別の名は、古事記應神天皇の段に見へたる、木之莵野郎女・木之荒田郎女あるのみにて、其餘は詳ならず。諸部は各

其職の氏の族なり。其部長を伴造と謂ひ其尊きは臣連と謂ひ皆京畿に居り、其部民は諸國に住して、各其部長の命を受けて、各職とする所に勉む。

熊野には、熊野社に屬する神戸多く。又名草地方は、大抵此地方の諸神の神領にして、神戸の名あり。諸部及神戸は國内に亘りて甚多かりしが如し。

されば此國國造の治めし範圍は、他の國に比して餘り廣からざりしものゝ如し。以上は上世に於ける國内統治の大樣なり。

第二節　大化以後

國府

孝德天皇の大化の改新に至りて、神事と國事とを分離して、神事を以て國造の職とし、國縣を改め諸部を廢し、新たに地方を國郡里保に分ち、夫々國司・郡司・里長・保長を置き、國事を司らしむ。此時熊野國を廢して紀伊國に併せ、國府を名草に置かる、卽ち今の海草郡紀伊村大字府中是れなり。又此時伊都郡を割きて、畿内に入れ給ふ。此國の國司は大化改新を過ぐる約百年の後、天平十七年、外從五位下井上忌寸麻呂爲紀伊守と見へたるを以て、國司の

平安朝時代

始とす。斯くて延喜式に、紀伊國上國とあり。又當國を以て禁國と稱し、封戸位田をも置かれず。國中に十神戸ありしのみなりしに、中世以後國司の權力日に衰へて、此制漸く頹れ、國内大抵諸家の莊園となり、熊野三山は大に神地を擴大し。高野の山徒亦寺領を廣め、公田變じて私田となり。海岸の浦々と雖も、勢家權門の領有する所となり、莊民・寄人と號して、當時定例たりし神祇官の龜甲・齋院祓祭の堅魚、大膳修理木工の海藻雜魚等をも、其奉進を懈るに至れり。此頃國中には、强族割據し、熊野には熊野別當あり。在田郡には湯淺權守あり。名草郡には日前宮國造あり。伊都・那賀二郡には高野の僧徒あり。粉河・根來の門徒亦此間に雜はり、各其領有を爭ひて、國司あれども、なきが如し。文治年中源頼朝總追捕使となり、諸國に守護・地頭を置かるゝに當り、佐原十郎左衛門尉義連、始めて紀伊和泉兩國の守護職に補せらる。

鎌倉時代

義連の後凡百二十餘年間は守護なくして、時に守護代を補任し、或は湯淺氏代々國事を掌りしものゝ如し。建武の際に、足利氏は畠山左近將監國清

室町時代

を以て、當國の守護職となす。降りて明德三年には、大内義弘守護となる。應永六年義弘反して、足利義滿に滅さるゝや、畠山基國是れに代る。是れより代々畠山氏其職を嗣ぎて、此國に守たり。初め南北朝の時國中の諸豪、多くは南朝に屬せしかば、建武の頃畠山國清守護職に補せられたりと雖も、政令全く國中に行はれず。恰かも土崩瓦壞の狀態に陷り。伊都・那賀の間には、高野・粉河・根來・紀國造等の威を逞ふするあり。又生地・牲川・隅田・鈴木・土橋等の强族あり。在田・日高の方面には、湯淺・湯川・白樫・寒川・玉置・宮崎・貴志の黨あり。熊野には愛洲・山本・小山・堀内・安宅等の豪族あり。大なるものは數萬石を領有し小なるものも猶數千石を所領して、四時紛爭已む時なかりき。

織豐時代

織田信長近畿を平定するに當りて、兵を發して高野を攻め、又雜賀の門徒と戰ひしが勝たず。天正十三年秀吉大兵を率ゐて侵入し、根來寺を灰燼にし、太田城を水責にして是を陷る。かくて高野・熊野を初めとし、國中の諸豪風を望んで相降り、紛爭茲に至つて始めて平定す。天平年間井上忌寸麻呂始めて國司に任せられしより、此時に至る迄、眞任・權官・兼官を併せて、國司の

事を掌れるもの、總て百六十九人あり。

秀吉北國を平定せるの時、羽柴美濃守秀長此國に封ぜられ、大和の郡山に在りて、大和・和泉・紀伊を併領せり。此時始めて若山城を築く。明年秀長其臣桑山修理太夫重晴に三萬石を與へ、本國の城代として若山城に屯せしむ。

是に於て封建の形勢漸く成りて、諸般の秩序茲に就けり。同十九年秀長薨じて、其子秀俊封を襲ぐ。慶長五年淺野幸長本國に封ぜられ、若山城に居り、大に城郭を修增し、面目大に改まる。元和五年淺野長晟安藝に移封せられ、同年德川頼宣是れに代はり、勢州十八萬石を併領し、幕府三家の一に居りて、京畿を監視し、勢望關西に振へり。頼宣入國以來、鋭意國政の改革を圖り、村に長を置き莊屋と謂ひ、高野領を除きて國内を六十七組に區分し、組毎に長を置き大莊屋と謂ひ、莊屋を統べしめ。每郡に代官を置き、牟婁郡を分ちて口熊野・奥熊野とし、奥熊野の郡衙を木の本に、口熊野の郡衙を周參見に置き、代官交代して此處に治せり。國中代官總て八人あり。又國老安藤直次を田邊に封じ、水野重仲を新宮に封し、以て南海の鎮とせり。又古座

德川時代

浦に監察府を置けり。紀伊藩の政治は斯の如き狀況を以て、遂に明治維新に及びたり。

第三節　明治時代

三藩

明治元年に至りて、田邊新宮を藩列に加へて、當國を總て三藩となしたり。此時紀伊藩は德川茂承にして、石高五十五萬五千石。田邊藩は安藤直裕にして三萬八千石。新宮藩は水野忠幹にして三萬五千石なりき。此他那賀、伊都二郡の一部を高野領とし、南北牟婁郡を伊勢の所管となしたりしが、明治二年六月に至り、紀伊藩を和歌山藩と改め、同年八月高野領を堺縣の管轄に移す。同三年四月高野領を更に大和五條縣の所管となせり。明治四年七月勅して全國の諸藩を廢して縣となすに當りて、和歌山藩を和歌山縣となし、田邊藩を田邊縣となし、新宮藩を新宮縣と改稱せり。同四年十一月、日本全國大に府縣の廢置分合の行はるゝや、田邊、新宮の二縣は廢せられて、和歌山縣に合せられ、又大和五條縣の中、紀伊國内にありし部分を割きて、本縣

三縣

に併合せり。茲に於てか、和歌山縣は紀伊國中、南北牟婁郡を除くの外、一市七郡の全部を管轄する事となれり。此當時に於ける住民の數は、明治五年正月現在、人口五十五萬六千九百十九人ありき。同廿九年四月、日本全國郡村の廢合行はるゝに當りて、名草海部二郡を合して、今の海草郡となせり。是れ明治時代に於ける統治沿革の大要なり

和歌山縣

第四章　戸口

住民

山高きが故に貴からず。樹あるを以て貴しとなす。國大なるが爲めに貴からず。民あるを以て貴しとなす。國土の疆域廣大なるは固より希望する所なりと雖も、是れに住居する人民の戸口寥々たるに於ては、如何に國内に於ける各種天産の饒多なるも、自然の富源の無盡藏なるも、是れを開拓利用するもの少くば、所謂天物を累殄すと謂つべきものにして、邦家の强盛人類の福祉に、何等の貢献する所あらず。實に物は人によりて其貴きを致すものなり。

人の集合地

人類は凡て生活に一層多くの餘裕ある地を求めて、甲地より乙地に流轉するものなり。されば生活に餘裕あるべき要件を具へたる地は自ら人口稠密となり、こゝに人文の發達を催し、人事社會の中基となる。人類の生活上に、最も適當なる住居としての要件を具ふる處は多しと雖も、河流の沿岸、海濱、肥沃なる平原、特殊生産物ある地等は、其主なるものなり。

人口の密度

一　人口の密度

縣下の戸口につきて見るに、本籍人口男三十八萬二千八百十五人、女三十七萬一千四百七人、計七十五萬四千二百二十二人にして、現住人口男三十五萬八千八百八十二人、女三十六萬三千九百三十七人、計七十二萬二千八百十九人、現住戸數十三萬二千三百あり。其一方里に對する人口の割合を見るに、二千四百十人となる。今是れを本邦内地の、一方里に對し一千九百六十人なるに比して、其密度遙かに大なり。

近畿地方各地に對する密度

更に近畿地方各府縣の、一方里平均人口密度を見るに、本縣は最低位を示す、次の如し。

大阪	一八五二八人
京都	三八九七
兵庫	三五六五
三重	二九二三
奈良	二八二八
滋賀	二六八七
和歌山	二四一〇

全國各地に對する密度

全國各府縣に就きて、其密度を研究するに、一方里平均東京の二萬九千六百九十一人を最大とし、北海道の二百八十四人、岩手の八百六十四人、宮崎の千百十二人等を最少とす。本縣は二千四百十人なれば、福井、栃木、群馬、新潟、鹿兒島等の諸縣と、略相等しき密度を有し、全國中第二十九位にあり。

縣下各郡市の密度

更に進んで、縣下各郡市の密度を檢するに左の如し。

郡市	人口	密度
和歌山市	七六八五二人	二一九五四九人
海草郡	一三二七〇六	七一二三

那賀郡	九六一六五	三三一二	
伊都郡	七〇七七四	二〇二八	
有田郡	七四四五二	三九一九	
日高郡	九一四三八	一七八五	
西牟婁郡	九四七二三	一五二八	
東牟婁郡	八五七〇九	一〇五五	

以上に就きて見るに、市街地たる和歌山市の密度の大なるは勿論なるが、是れを他の都會に比するに、東京市の密度の約二分の一、大阪市に比して約其十分の六に當れり。郡部につきて見るに、概して紀の川流域及有田川の流域は、最も稠密にして、東西牟婁郡の山地は人煙頗る稀薄なり。即ち東牟婁郡の如きは、實に海草郡の密度の約七分の一、有田郡の密度の約四分の一に當るのみ。斯の如く地方によりて、人口配布の相違あるは、主として地文的要素の如何によるもの多し。されば是れに因りても、地文と人文との關係の、如何に密接なるかを了解するに足らん。

村落都會の分布

次に村落都會の狀況につきて見るに、是れ亦大なる人口を有する町村は、北部に多くして南部に少し。

郡	村數	町數	三千人以上の町村數	五千人以上の町村數	一萬人以上の町村數
海草郡	三八	四	一一	六	〇
那賀郡	三四	二	三	三	〇
伊都郡	一八	四	二	四	〇
有田郡	一九	二	七	一	二
日高郡	三四	三	四	二	〇
西牟婁郡	四〇	二	三	一	〇
東牟婁郡	二六	五	四	〇	一

都會發達の原因

凡て都會は、人間が原始的集合團體たる村落より別れて、更に大にして且密なる結合體となりしものにして、其發達の原因を觀察するに、殆んど人的原因多くして、地的原因少きが如しと雖も、遡つて考索すれば、亦地的原因に因るもの多し。都會の發達地は、特殊生產物の利に因りて起るものあり。

貨物の集散の便利に因りて自然に發達するものあり。其他宗教上學術上・軍事上等種々の原因ありと雖も、本縣の都會は主に、河水路・河口・道路の結節點・海港等にありて、經濟的原因に因るもの最多し。一般に本縣は畿內・東海・山陽地方の各府縣に比して、都會の發達少きが如し。

次に縣下各郡市、每戶平均現住人口を見るに次の如し。

和歌山市	四・六	有田郡	五・六
海草郡	五・八	日高郡	五・六
那賀郡	五・五	西牟婁郡	五・四
伊都郡	六・〇	東牟婁郡	五・二

每戶平均人口

是れによりて見るに、和歌山市最も小にして、東牟婁郡是れに次ぐ。最大なるは伊都郡にして、有田・日高是れに次ぐ。縣下通じて平均五・五となる。是れを各府縣の每戶平均人口につきて見るに、全國中最大なるは栃木の七・三、福島・山形の七・一等にして、東京の四・三、大阪・山口の四・九等最少し。日本全國平均五・六となり、本縣は五・五なれば、此點に於て、殆んど全國平均數に最も近似

全國各地に對する每戶平均人口

せりと謂ふべし。

二　人口の增加

人口の增加

本縣の人口年々の增加の有樣を見るに、去る明治二十一年に在りては、六十二萬八千八百餘人なりしもの、二十年後の四十一年に於ては、十二萬六千四百二十餘人を增加せり。是れを平均して、一個年に六千三百二十人宛を增加せる割合なり。されば是れを本縣面積と人口增加の割合より謂へば、年々二方里餘の土地を、新に增加するにあらずんば、現今の密度を保つこと能はずして、年々土地の狹隘を訴ふるに至り、人口に對しては、年々二方里の土地を失ふに等し。此割合を以てすれば、今後百十餘年にして今日の二倍の面積を要すべし。然るに人口增殖は遞增するものなれば、今後百年を出でずして、人口は正に今日の二倍に達すべし。是れを我國の人口增加の割合に比するに、我國の人口は年々約六十萬の增加なれば、今後六十餘年にして今日の二倍となるべし。是れに因れば、本縣人口增殖率は我國平均增殖率よりも、少なりと謂ふべし。

出產につきて述べんに、年々凡そ二萬六千餘人の出產ありて、死產は二千

出産及死亡

三百餘人なり。出産の割合は、人口百につき三・四にして、我國出産平均數に比して大差なし。其産兒につきて見るに、男兒は常に女兒より多し。是れを各郡市に就きて見るに、唯和歌山市のみ女兒の出産男兒より多し、通じて女百につき、男百・四七の割合となり、是れを全國平均數に比して大差なし。次に本籍人口中死亡者數を見るに年々約一萬四千餘人なり。

男女の割合

三　男女の割合

男女兩性の配布につきて觀察するに、現住人口に於て、女子は男子より一萬餘人の多數にして、卽ち女百につき男九九・三强の割合となる。是れを各郡市によりて見るに、女子の男子より多き地方は、海草・那賀・西牟婁・東牟婁の四郡にして、特に東牟婁郡にありては、女百につき男九十六人六分を示し最大なり。此等地方は、何れも男子の他府縣又は、海外に出稼するもの多く、特に東牟婁郡の如きは縣下第一の海外出稼人多き等の事情によりて、女性は遙かに男性より多きを致したるも、其一因ならんか。此他の郡にありては、皆男子は女子より多しと雖も、獨り和歌山市のみは、男女の數相平均せり。

歐羅巴に於ける男女の割合

我國に於ける男女の割合

凡て男女數の不平均は、社會上不幸の基にして、其差少き程幸福圓滿なる社會を形成すべし。歐羅巴諸國にては、女子の數常に男子の數に超過し、英吉利の如きは、女子の男子より多きこと、約一百萬人にして、獨逸の如きは、百三十萬に達す。男女の數最も能く平均せるを以て誇れる、彼佛蘭西の如きも、尙女子の多きこと六十萬人なり。我國は是れに反して、男性の女性に超過すること約五十萬人にして、卽ち女百につき男百〇三强の割合なり。是れを彼歐羅巴諸强國の甚しき差あるに比せば、尙小なりと謂ふべし。男女兩性配布の比例は、同じく一國內にありても、地方に因りて大に異なり。されども此間、自ら一の系統を存するもの〻如し。例へば男性の女性に超過せる地方を示さんに、東京の女百につき、男百二十一强を最大とし、大阪・神奈川・京都等は之に次ぎて大なる地方にして、百二十一乃至百〇七の間にあり。此他奥羽地方、特に仙臺以北に於て多しとす。次に近畿地方・中國地方も亦、概して男性の女性より多き處にて、特に岡山・廣島の如きは、著しく男性を多しとす。女性の男性に超過する地方は、埼玉・群馬・長野・山梨等、木州中央部地

方と、滋賀より北陸一帶を貫聯して、山形に至る日本海沿岸地方及、九州南部の鹿兒島、熊本、大分等の各地方なり。就中富山の女百につき、男九十四人七分を最とす。本縣も亦此等男少國の一にして、近畿地方及中國地方の、女少地域の間に在りて、其趣を異にせるは人口配布上の一異彩たり。

人口の出入

四　人口の出入

管内に於ける入寄留者は、總て五萬七百餘人ありて、此中、男子は女子より約五千人の多數なり。寄留人の最多きは和歌山市にして、一萬八千餘人あり。是に次ぎては東牟婁郡にして八千餘人あり。最少きは有田郡にして約二千五百人なり。他郡は皆此間にあり。次に出住者に就きて見るに、總て八萬二千餘人ありて、其數入寄留者より遙に多しとす。

此中在外國者約一萬二千人、他府縣出寄留者約三萬二千人あり。出住人の最多き地方は海草郡にして、一萬五千餘人。日高郡一萬三千人。那賀及西牟婁郡は同じく一萬人以上の地方なりとす。最少きは和歌山市の七千二百餘人あり。住民の移動する原因には種々ありて、自然と人爲相錯綜し、

又縣の内外の關係にも因るを以て、遽かに正確の決定を與ふること難しと雖も、和歌山市の入寄留者最多くして、出住人の最少なるは、是れ明かに此地の發展を意味するものにして、人口の都會に向て日々に集中する、現代社會一般の趨勢を表示せるものなり。是れに次で、東牟婁郡に於ける入寄留者の多くして、出住人の少きは、地方人口の密度最も少きが上に、水産林産等有望の地なるが故なるべし。されば今後斯業の漸次發達すると同時に、益々人口の招致を見るに至るや明かなり。又海草郡の出住人多きは、其地人口稠密なるが上に、和歌山市に接せるを以て、市中に移行く者從つて多かるべく、又交通の便も最も宜しければ、京阪地方の大商工業地を始め、各地に吸收せられて、其事業を助くるもの多きが爲ならん。

第五章　政治區劃

凡そ行政上、百般の政勢をして遲滯なく且圓滿に近捗せしめんには、邦土を幾多の區分に分ちて、統治するを最も良法となす。されば行政に關して

は、幾多特殊の區劃の制定せらるゝを見るなり。行政區劃には府縣の如き地方區劃を始めとし、此他司法區・陸軍區・海軍區・山林區・稅務區・遞信管理區等種々あり。

國道別

道國區劃　我國廢藩置縣以前に於て行はれたる、一畿八道八十五國の區劃は、主として古來の歷史風習に因りて、呼來れるものにして、時勢一變せる今日にありては、別に大なる其必要を見ず。當國を南海道紀伊國など謂ふが如きは唯一の歷史的名詞として呼稱するに過ぎざるなり。

地方區劃

地方區劃　當國は和歌山・三重の二縣に分轄せられ國の區劃と、府縣區劃と相一致せず。本縣を地方行政上、一市・七郡・二十二町・百九十九個村に分つ。今是れを表示すれば左の如し。

郡市	郡市役所所在地	警察署所在地	町名	村數	面積	人口
和歌山市	七番町	十番町			○	方里 三五	七九八五二
海草郡	宮前村	黑江(分) 加太(分)	和歌浦 日方 黑江 加太		三八	一八・六三	一三二七〇六
那賀郡	岩出町	岩出(分) 粉河(分)	岩出 粉河		三四	二九・〇四	九六一六五
伊都郡	橋本町	橋本(分) 妙寺(分) 高野(分)	高野口 九度山 妙寺 橋本		一八	三四・五四	七〇七七四
有田郡	湯淺町	湯淺(分) 鳥屋城(分)	湯淺 御坊 印南 南部		一九	一九・〇〇	七四四五二
日高郡	御坊町	御坊(分) 南部(分)			三四	五一・三四	九一四三八
西牟婁郡	田邊町	田邊(分) 串本(分)	田邊 串本		四〇	六五・九二	九四七二三
東牟婁郡	新宮町	新宮(分) 本宮(分)	新宮 古座 勝浦 三輪崎		二六	八一・二一	八五七〇九

備考（上表（分）は警察分署を示す）

司法區劃

司法區劃　我國內地裁判所は、東京に大審院ありて、全國を總轄し、其下に七箇の控訴院ありて、全國を分管す。此下に更に四十九の地方裁判所あり。更に是れを三百有餘の區裁判所に區劃して管轄す。和歌山地方裁判所は、大阪控訴院の管轄する所にして、田邊に和歌山地方裁判所支

部を置く。區裁判所は和歌山・妙寺・田邊・御坊・新宮の五區に分ち、各に區裁判所を置き、此下に二十九の區裁判所出張所ありて、司法の事務を掌る。

稅務區劃

稅務區劃　內國稅徵收の爲めに、全國に四百九十餘の稅務署を置きて分轄せり。是れを監督せんが爲めに、十八個の稅務監督局あり。本縣稅務に關しては、大阪稅務監督局の管轄する所にして、和歌山・粉河・湯淺・御坊・田邊・新宮の六個所に稅務所ありて、是れが事務を分管せり。

陸軍區劃

陸軍區劃　我國陸軍の國防上の便宜、又は兵員の徵募上の都合に因りて、帝國を十八師管・三十六旅管・七十二聯隊區に細分し、他に警備隊區を設く。本縣は第四師管・第三十二旅管に屬し、和歌山聯隊區を置きて兵務を統ぶ。

海軍區劃

海軍區劃　我國內地の海岸及領海を防備するが爲めに沿岸を五つの海軍區に分ち、各區に軍港を置き鎭守府を設く。本縣は第二海軍區に屬し、吳鎭守府の管轄たり。

林務區劃

林務區劃　國有林野及部分林に關する事務を掌るが爲めに、

遞信管理區劃

明治四十年一月一日より朝鮮及對馬の海岸及沿海を第五海軍區とせり

全國を十大林區、二百六十九小林區に分てり。大林區には大林區署を置き、小林區には小林區署あり。本縣は大阪大林區に屬し、高野・田邊・新宮の三小林區に分れ、各に小林區署あり。

遞信管理區劃　郵便・電信・電話等に關する事務及電氣事業・船舶・海員の監督に關する事務を掌るが爲めに、全國を十三の遞信管理區に分劃し、各區に遞信管理局を設置して、其區域內を監督す。郵便局は一等・二等・三等に分ち、電信及電話局は各一等・二等に分つ。本縣の遞信事務は、大阪遞信管理局の管轄に屬せり。而して和歌山郵便局は、一等郵便局にして、新宮郵便局は二等郵便局なり。此他は何れも三等郵便局にして、總計百十七局あり

鑛山監督區劃

鑛山監督區劃　全國鑛山の政務を監督せんが爲めに、六個の鑛山監督區に分ち、是れが各に鑛山監督署を設く。本縣は大阪鑛山監督署の管轄內に屬せり。

鹽務區劃

鹽務區劃　鹽の專賣事業は、明治三十八年に創設せられたる

官業にして、大藏省に屬し、全國に二十二の鹽務局ありて、其事務を掌る。本縣は大阪鹽務局の統治する所たり。

烟務區劃

烟務區劃　煙草は鹽と共に政府專賣事業の主なるものにして、煙草專賣局を東京に設け、各地に煙草收納所、煙草製造所及煙草販賣所を置く。本縣には和歌山市に煙草收納所ありしが、近時廢止せられたり。

第六章　宗教

宗教と文化

宗教は人間が自己よりも、一層無限にして偉大なるものを認めて、是れを憧憬する天性に出づ。凡そ世界の各處に居住する人民は、居住地の形勢、國民の賦性、歷史境遇を異にすると雖も、何れか宗教的思想を懷かざるものあらん。されば宗教は人生に至大の影響を及ぼし、人文の上に離るべからざる關係を有すること、恰かも一般の教育と異らず。或は美術の發達となり、或は文學の開發となり。或は工業の興起となり。或は探險開拓となり、人類の開明に關すること極めて重大なり。

宗教と國民

若し世界中に、最も宗教的なる國民を求むれば、先づ指を印度と猶太とに屈せざるべからず、此二國民の歷史は、殆んど宗教の歷史にして、其社會的政治的活動、一として宗教に基かざるはなし。然して世界各地の民族中、宗教に冷淡なるものを擧ぐれば、慥かに我日本民族は其一たるべし。現今に至りては、殆んど宗教の何たるを知らず。甚しきは自己の從屬せる宗派の、何れなるやをも辨知せざるものなきしにもあらず。而して顧みて過去の歷史を繙くも彼西洋諸國に於て、宗教が常に國家の禍亂の源となり、興亡の因となり、社會活動の原動力たりしに反して、我國は殆んど是れなかりしと謂ふも、可なるの狀態なるは、我國民性の如何に宗教に對する感情の頗る冷淡なるかを知るに足るべし。されども幸にして、我國民心をして一致結合せしめ、德性を涵養し情操を正ふし、世界に冠絕するの善美なる品性を練成せしめたるものあり。敬神の風是れなり。即ち皇祖皇宗及國民の祖先、國宗に對する功臣等を神として、祭祀し、其餘澤を崇仰する祖先崇拜の道念是れなり。是れ我國特有の宗教にして、儒教及佛教の傳來に因りて、是れが影

敬神の念

響を蒙りて愈堅く、國風の惇美茲に成れり。

紀伊と社寺

近畿地方は我國文化の發源地にして、亦古來帝都の地たりしを以て、從つて神社佛寺の數甚多く、社殿閣宇の壯麗宏大にして、今日に至つても猶亦偉大なる勢力を有するもの、實に全國中其比を見ざる所なり。本縣は古より高貴なる神社、森嚴なる大寺あるを以て名高き地にして、熊野三山の如き、寵山、伊太祁曾の諸神の如き、高野、粉河、根來諸寺の如き、管に縣民の崇拜するに止まらず、實に我國有數の社寺にして、我國宗教界の信仰の一中心たり。社寺は管に直接信仰上の中心たるのみならず。人文上に多大の關係あるものにして、或は珍貴なる什物、史料の保存場となり。或は人民の交通集會の中心となり。或は風習の維持傳播の源となり。娯樂の中心地となり教化の場場となる。紀伊には以上の如き諸神の鎮座せるが爲めに、地僻陬にして、然かも交通極めて至難なるにも拘はらず。中古以來、官民常に當國に往來して、彼熊野巡拜、高野詣の如き、如何に盛大を極めしか。かくて他國の風習は傳はり、文化は移りて、當國人文の上に少からざる發展を來たせしや明か

なり。されば紀伊より以上の諸寺社を奪ひ去らんか、其文化の如何に寂寞たる光景に化すべきぞ。蓋思ひ半に過ぐるものあらん。

第一節　神社

紀伊最初の神

紀伊國には神の鎮り座しゝは、何時の頃より初まりしか、又如何なる神なるか、日本書紀一書に次の如く謂へり。

伊弉冉尊生火神時、被灼而神退去矣。故葬於紀伊國熊野之有馬村焉。

土俗祭此神之魂者　華時亦以華祭、又用皷吹幡旗歌舞而祭矣。

又素盞嗚尊の御子、五十猛命二妹神と共に、此國に木種分布せられたるを以て、「有功之神」となし、紀伊に鎮座せる大神どせり。今の伊太祁曾神社即ち是れなり。以上は皆神代にありて、當國に鎮座ましたる神にして、當國最初に奉祀せる神なりと謂ふべし。

其後に於て、神武天皇の御東遷の際、皇兄五瀬命此國に薨せさせ給ひ、寵山に祭らる。今の寵山神社是れなり。崇神天皇の御世に、日前國懸兩大神を

名草の濱に鎮め給ひ、垂仁天皇の御世、今の地に遷座し給ふ。是れ紀伊國造の奉祀する所の神なり。應神天皇の御世となりて、丹都比女神を伊都の郡に祀らる。其後幾多諸神の奉祀せられて延喜式神名帳には、我國の天神地祇凡て三千一百三十二坐あるが中に、紀伊にまします神三十一坐あり。次に此等神々を掲げ記さん。

延喜式神名帳

紀伊國三十一坐 大十三坐 小十八坐

伊都郡二坐 大一坐 小一坐

小田神社

丹都比女神社

那賀郡三坐 並小

荒田神社

海神社

名草郡十九坐 大九坐 小十坐

延喜式内神名

日前神社

國懸神社

伊太祁曾神社

大屋都比賣神社

都麻都比賣神社

鳴神社

香都知神社

加太神社

伊久比賣神社

朝椋神社

刺田比古神社

麻爲比賣神社

笠山神社

高積比古神社

高積比賣神社
伊達神社
志摩神社
靜火神社
堅眞神社
在田郡一坐大
須佐神社
牟婁郡六坐大二坐小二坐
熊野速玉神社
熊野坐神社
海神社三坐
天手力男神社
此他延喜式内の神にあらずして、採位の國史に見はるゝ神四坐あり。
御船神　貞觀三年授從五位下

三前神　貞觀十七年授從五位下
大位神　同　年授從五位下
玉出島神　元慶五年授從五位下　延喜六年授從五位下

當國神名帳中の神

次に本國の神名帳に見ゆる神社を數ふれば、百九十三社あり。此中官知の神七十五社、未だ官知せざる神百十八社あり。名草郡に坐せる神最も多、くして、總て八十九社あり。以上の神々に供へたる神地神戸も亦從つて多

神地神戸

く、寛平六年の官符を見れば、此國有封の神社、總十一處所、充封戸二百三十二烟とあり。和名鈔に載する處の本國の神戸凡十箇所あり。名草郡の如き、多くは皆神地なりしが如し。孝德天皇大化改新の時、國事神事を分ちて、國事は國司に掌らしめ、神事を以て國造の職務とせられたり。然るに諸國の

中古以來神威衰ふ

國造の中、當國の國造は、奉仕の神々いと貴ければ、朝廷の待遇特に厚く、其子孫は綿々として相傳はれり。中古に至りて、朝廷漸く衰頽して、禮憲廢絶し、土豪の神地神戸を兼併し、意に任せて庶人と雖も、諸神を勸請し、新社日に其數を增して、社殿亦壯麗を極め、大社古神は破壞して補はれず、官知の神社す

天正の厄難

ら其處だに詳ならざるに至れり。降りて天正十三年、豐臣秀吉當國に侵入するや、國中の神社佛寺大抵一炬に附せられ、神地・神戸も沒收せられて、遺るなし。此時古來相傳の重寶・珍器・古文書の如き併せて烏有に歸せしめたるは、惜みても猶餘りあり。されば古傳遺制の今に存するもの甚少し。元和年中德川頼宣入國するに當つて、庶政を興張し、廢絶を繼ぎ、荒頽を興し、神社佛寺の再興修造せられしもの甚多く、面目大に改れり。斯くて明治維新となりて、社寺の制改まり、本縣の諸神社亦社格を定められ、神威愈明かとなれり。

頼宣と社寺

現在

現今奉祀せらるゝ諸神は、官幣大社二、官幣中社一、國幣中社二、縣社十、鄕社十三、村社四百五十七、無格社一千四百三十七、合計一千九百二十二坐ありて、是れに奉祀仕せる神職二百五人あり。然るに明治四十三年に至りて、日本全國各地に神社の合併行はるゝに當りて、本縣に於ても大に併合を實施し、村社・無格社を合せて、併合の數實に二千に達せり。而して今後に於ても、猶神社の合併は、時々行はるべし。

第二節　佛寺

上代の佛教

靈異記に、當國に大伴屋栖大連公と謂ふ者あり。佛法傳來に際して、是れを信仰し、廐戸皇太子に奉仕して、大に信任せられ、推古天皇の御世に、僧都に任せらるとあり。是れ我國に於て、僧都に任せられし始めなり。降りて持統天皇の三年に「阿提郡那者野二萬頃禁斷漁獵」とあるを見れば、當時既に有田郡には、佛寺の營まれたるものありしを知るべし。是等は當國の佛教に關して、史に見へたる最初のものなり。日高郡道成寺は、古來の名刹にして、文武天皇の勅願所なりと謂ふ。聖武天皇天平十二年に「令天下諸國每國法華經十部幷建七重塔」。同十三年每國創建國分二寺　一號金光明護國寺　一號法華滅罪寺」とあり金光明護國寺は卽ち國分尼寺なり。國分尼寺は、當國にありては、那賀郡上岩出村大字國府の地に其遺趾あり。國分僧寺は岩出町の東北、十町の田間に塔之芝と稱する、方一町許の芝生あり、是れ其遺趾なりと謂ふ。三代實錄に、元慶三年二月紀伊國金光明寺火、堂塔坊舍悉成灰燼とあり。此邊今は荒廢して、附近に布目ある瓦礫の散亂せるを見る。

道成寺

國分寺

斯く國分僧寺の燒亡してより以後は、再建に至らずして、遂に是れを其東隣なる國分尼寺に合して、僧寺となしたるものゝ如し。此寺は其後天正の兵火の爲めに烏有に歸し、今は轉じて眞言宗となりて醫王院と號せり。天平十九年の詔に、寺領は僧寺九十町、尼寺四十町、稻二萬束と見ゆ。又同朝には經卷を諸國に頒ち、佛像を造らしめ、又行基をして諸國を遍歷して法を弘めしめ、畿內に四十九院を建立せしむ。伊都郡利生護國寺の如き其一なり。

賞塔漸く各地に興る

同朝には又「勅天下諸國或有百姓願造塔者聽之」とありしかば、是れより諸國百姓の寺塔の建立漸く多く、當時伊都郡に桑原之狹屋寺あり。名草郡に大谷寺、藥王寺及彌勒寺あり。寶龜年中に至りて、那賀郡に彌氣山室堂あり。名草郡に貴志寺あり。安諦郡に秦里石寺あり。日高郡に別里別寺あり。其他大伴孔子古は、那賀郡粉河寺を建立し、唐僧爲光は名草郡紀三井寺禪林寺藥勝寺、那賀郡滿願等を創建せしが如き、其主なるものなり。嵯峨天皇弘仁七年に空海は高野山金剛峯寺を創め。貞觀の頃より熊野三山佛地となり。斯くて國內は殿堂四方に興り、公田私地の頻りに寺領に入り、年と共に

佛寺の勢力愈大なり

漸く國中に擴張せり。高野山は遂に丹生の神領を併呑して、勢最も强盛なり。加ふるに天皇の行幸屢行はれ國中の正稅を以て其用度に充つるに至れり。鳥羽天皇の時、覺鎖根來寺を創して新義を唱へ、明惠上人は有田郡に弘法し。覺心上人は由良に興りて禪宗是れより盛なり。明秀は法然上人の遺鉢を唱へて、名草郡に總持寺を建て。蓮如上人によりて名草海部の間、其門徒最多し。戰國の世、織田信長本願寺を攻む、顯如上人破れて當國に避け、鷺の森に止まること四年、此間當國の信徒全力を盡して護法の爲めに戰ひ、以て信長の軍を破れり。當時國內にありて勢力を振ひしもの、先きに熊野三山あり、後に高野根來あり。特に高野根來二寺は、廣大なる領地を擁有して、强暴比なく、延て隣境に跋扈せり。秀吉の天正の大侵入に遇ひて、高野山を除くの外、殆んど燒燼せられて、今に其舊觀を存するものなし。慶長元和の間荒絕漸く修復せられて、以て今日に傳はれり。縣內の寺院總數一千七百三十二寺あり。最も多きは眞言宗にして六百四十三寺あり。次は淨土宗にして、三百九十寺あり。前者は那賀伊都二郡に多く、後者は海草郡に多

天正の尼

現在

し。次は眞宗にして、三百三十一寺ありて、海草郡に最多し。其他臨濟・曹洞・天台・日蓮・黄蘗・時宗等の諸派ありて、住職合計九百三十一人を算ふ。

我國に於ける宗派及寺院數

我國の寺院の總數は七萬二千餘あり。最も盛なるは眞宗にして、一萬九千五百寺あり。曹洞宗一萬四千餘寺、眞言宗一萬二千餘寺、其他は皆一萬以下にして、黄蘗宗最少く、五百餘寺あるのみ。府縣中寺院の最多きは、愛知縣の三千六百寺にして、其他京都・滋賀・兵庫・千葉・新潟等は、何れも三千寺以上を數ふべく、最少きは鹿兒島の百四十寺、宮崎の百九十四寺。高知の二百三十五寺等なり。されば本縣は、全國中其寺院數に於ては中位を占め、宗派に於ては眞言・淨土眞宗の盛なる地方と謂ふべし。

第三節　教會所及説教所

天理教

神道

管内には神社佛寺の外、他の宗教の行はるゝあり。就中天理教最も盛にして、教會所一百四十四あり。是れ其本部大和に接近せるに因るものならん。其他神道に關するものには、金光教・神理教・出雲大社教・神習教等ありて

耶蘇教

各一二の教會所を有せり。神道中最盛なるは金光教にして十二の教會所あり。耶蘇教は我國一般に未だ行はれず。全國の教會堂・説教所等合せて一千百餘箇所に過ぎず。全國中最も盛なる地方は東京・長崎・宮城・大阪・兵庫・神奈川・静岡等の諸府縣なるが、本縣には教會所僅かに九箇所に過ぎず。全國中最も少き地方の一なり。

第七章　教育

我邦明治維新以來國民の最も力を注ぎたるものゝ一は、慥かに教育の事業なり。されば我邦に於て、最も長足の進歩をなしたるものも亦教育の事業なり。今や各府縣一般に、年と共に教育思想普及して、百般の施設愈其進歩發展を示しつゝあり。特に日清日露の二大戰役に於て、國民教育の結果は、實に顯著なる効果を表明せしより、上下一般等しく其教育の重要なる所以を、一層適切に意識し、且世界一等國の伍班に入りたるの今日、國民は強大なる自覺心を惹起して、教育界は茲に格段なる生氣を帶來れり。されば本

福に於ても、教育の設備漸次改善擴張せられ、教育者は愈研究的態度を取り或は研究會となり。或は講習會となり。或は展覽會となり、其進會となり内容に形式に教授に訓練に、百方面に亘りて孜々として努力研鑽怠らざるを以て、成績の見るべきもの少からず。

第一節　初等教育

先年小學校義務教育年限延長の結果、兒童就學上多少の惡影響を來さんことを憂慮せりと雖も、本縣市町村に於ては、就學督勵に努めたる結果として、幸に好成績を擧げ、又校舍校具等の設備も漸く整頓し來れり。因て猶此際一層教育上内容の改善を期し、又學校基本財産蓄積、貧窮兒童保護の如きに力を用ゐつゝありて、何れも其成績見るべきものあり。亦小學校をして、社會教育の中心たらしめんために、町村青年會を組織し、學校教員をして專ら青年の風紀改善補習教育の任に當りつゝありて、概して成績佳良なるものゝ如し。

學齡兒童

學齡兒童數は、男七萬三千三百人、女六萬六千三百人、合計十三萬九千六百人にして、就學兒童は、男六萬三千六百人、女五萬六千四百人、卽百人中男九九・二六、女九八・〇七、合計九八・五八にして、是れを累年比較するに漸次不就學者の數を減じつゝあるは最も喜ぶべし。是れを過去十年の古に遡りて、明治三十二年の學齡兒童、男六萬六千七百人、女四萬七千九百人、合計十一萬四千六百人、其就學男四萬八千三百人、女二萬六千二百人、其歩合男百中八五强、女五四强、合計七〇・九四なるに比して、多大の進歩をなせるを見る。特に女兒の就學歩合の如き、實に長足の進歩にして、眞に教育の普及を示せるものにして、大に欣喜すべき現象なりとす。猶此就學歩合を、各郡市に就きて見るに、現時和歌山市・伊都・有田の九九人以上を第一とし、海草郡・那賀郡・有田郡・西牟婁郡は九八人以上、東牟婁郡は最劣りて、九八人未滿なりとす。

就學歩合

學校數

小學校數は、市町村立尋常小學校二百三十二校、同尋常高等小學校百七十六校、同高等小學校五校にして、是れが學級數は、尋常科に於て七百二十二、高等科に於て二百三十あり。是れが本科正教員數は學級數に比して、尋常科

五百七十三人、高等科二十二人を不足せるが、こは准教員代用教員及び專科教員を以て是れを補充せり。

教員數

教員數は尋常科にありては、本科正教員一千百四十九人、准教員百九十八人、專科正教員百三十四人、代用教員四百二十一人、合計一千八百〇二名なり。高等科にありては、正教員二百〇八人、准教員一人、專科正教員六十八人、代用教員三十三人、合計三百十八人あり。又教員の待遇に關しては、經費の許す範圍に於て優待の途を講じ居れるが、四十二年度に於ける俸給額は尋常科正教員男十七圓七十三錢二厘、同女十二圓九十七錢四厘、高等科男二十二圓九錢九厘、同女十四圓四十九錢九厘にして、是れを五年以前の三十八年度に比するに、其增額は尋常科正教員男にありては三圓四十五錢五厘、同女一圓〇六錢四厘、高等科男三圓八十九錢五厘、同女二圓十八錢五厘なり。

學校衛生

學校衛生に關しては、日常大に注意を拂ひつゝありて、學校醫の設置に於ても督勵宜しきを得て、其設置せられしもの三百校に達し、此醫師の數一百八十四名あり。而して常に學校視察、兒童の身體檢査又は衛生講話を爲し

特に傳染病豫防に關しては、深く注意を用ゐ居れば、幸ひにして近來甚少し。されども、トラホーム患者猶多數あれば、數年來是れが根治策につき全力を傾け來り、其結果の見るべきものあり。一般に健康狀態は漸次良好に向ひつゝあり。

將來施設事項

將來小學校に於て施設すべき事項としては、多々これあるべしと雖も、就中教育の完全を期し、大に教員の人格修養學術研究を奬勵する爲めに、縣或は郡市に於て、小學校教員講習會を屢々開催し、又は數學校聯合して研究會を開設し、又一層學齡兒童の就學督勵及び缺席取締を嚴にし、以て義務教育の普及を計り、更に學校醫の設置を督勵し、學校衛生の遺憾なきを期し、特にトラホームの豫防及び治療方法に全力を注ぎ、又學校基本財産の蓄積及增殖を行ひ、大に教員住宅の建設、若しくは住宅料の支給を奬勵し、尙は郡立又は組合立の乙種程度の實業學校設置を行ふと共に、一層小學校に實業補習學校の附設をなす等は、其最も急務たる問題たるを見るべし。

幼稚園

幼稚園に就きては、市立三、私立一あり。保姆十一人、幼兒三百六十人、保育

小學校に類する各種學校

滿期の者百六十九人あり。

小學校に類せる各種學校は四十三校、生徒一千百八十一人にして、主として市町村立小學校に附設せる裁縫學校の類にして、教員は悉く小學校教員の兼務なり。

青年會

縣下青年會は其數合計三百六十にして、此中海草郡・那賀郡は各四十七、伊都郡三十一。有田郡四十八。日高郡七十一。西牟婁郡四十七。東牟婁郡六十九にして、今後愈盛ならんとするの機運に向ひつゝあり。

第二節　中等教育

學中校

初等教育の改善進歩。教育思想の普及發達は、社會一般の向學心を高め、從て中等教育界の發達の機運を促進するは、自然の勢なりとす。今や縣下の中等教育界は、諸般の擴張整備年を逐ふて完からんとす。中學校は和歌山・田邊・粉河・德義・新宮の五縣立學校あるの外、有田郡に私立耐久中學校あり。其生徒數合計千九百餘人あり。入學者數年々五百人以上に達し、年と共に

增加すれども、猶未だ入學志願者の數の六割三分を入るゝに過ぎざれば、將來亦從て擴張の必要あるべし。而して中學校卒業生は、總て創立以來一千七百餘人の多數に上れり。

高等女學校

高等女學校は、縣立和歌山高等女學校の外、町立新宮高等女學校、郡立西牟婁高等女學校ありて、其生徒數總て六百餘名なり。年々入學志願者の數は、著しく增加し來りて、今や五百名に達すと雖も、入學者は僅かに其二分の一を容るゝに足らざれば是亦遠からずして、學校の擴張を要するなるべし而して卒業生の數は合計七百餘人あり。

師範學校

師範學校は、男子部・女子部に分れ其學級數は本科一部男六學級、女三學級、二部男一學級、豫備科男二學級計十二學級の編制にして、優に年々百名以上の卒業生を出し、大に正教員の不足を補ひつゝあり。男女合せて生徒數約四百四十人にして、入學志願者約男二百四十人、女九十五人あり。入學者は男約百二十人、女約三十人あり。卒業生は男一千百七十六人、女二百三十三人なり。此他臨時に講習科を設置して教員の學力補習を勉めつゝあり。

第三節　實業教育

實業學校

近時實業教育の機運の物與と共に實業學校の設置せらるゝもの漸く多く縣下に於ける實業學校は、甲種程度の縣立農林學校、市立和歌山商業學校、乙種程度の郡立日高第一實業學校、組合立日高第二實業學校、組合立吉備實業學校、町立箕島實業學校、徒弟學校に屬する、町立黑江漆器學校の七校にして其生徒數は農林百三十人、商業二百六十人、實業男二百七十人、女百十九人、漆器學校男三十八人、女二人なり。又農業補習學校百五十四校、生徒數四千八百八十一人、水産補習學校十校、生徒數二百四十二人、商業補習六校、生徒數百七十三人にして、是等實業補習學校は、其設備は多く市町村立小學校に附設せるものなれば、備品の小學校と共通するは勿論職員に於ても小學校より兼務せるを以て、比較的少額の經費を以て、相當の効果を收めつゝあり。又是等諸學校と實業者とは密接の關係を有するものなるを以て、相互氣脈を通じ、其實績を擧げんことを努めつゝありて、實習及試作物實地參觀をなす者、又は實地指導を請ふもの、其他作物生産品の拂下を請ふ者、漸次其數を增加せり。亦學校は農林會と相聯絡し、作物及製品品評會を開設し、公衆の觀覽に供し又は工藝の意匠會を設け、當業者を集合し、意匠圖案の改良進歩を企圖するの外、或は斯業に關する研究報告を發表し、他學校の製品を陳列して參考に資せしむるなど、斯業に貢献し、又一般の利少からず。

水産講習所

西牟婁郡串本町に縣立水産試驗場あり。是れに附設して、水産講習所を設け講習生を募集し二個年修了の程度を以て、目下三十餘名の講習生を教養しつゝあり。講習生は何れも熱心勤勉にして、其成績見るべきもの少からず。

第四節　公學費其他

公學費

公學費の一般を觀察するに、今や縣經費九十六萬圓の中、縣公學費は殆んど二十二萬圓を占め。郡公學費は五千七百餘圓にして、市町村公學費は七十三萬五千圓に達す。されば本縣各種公學費は、合計九十六萬餘圓の巨額

に達し、一人平均壹圓三拾錢の負擔額となる。而して此教育費は、年々增加して止まるを知らず。是れ人口の增殖と教育の普及發達するに從つて、將來愈膨脹するは、實に已むを得ざるの勢なり。

圖書館

和歌山縣立圖書館　和歌山縣立圖書館は、明治四十一年四月の創立にして、和歌山舊城内にあり。藏書數、和漢書九千三百二十五冊、洋書六十七冊ありて、閲覽人員は、一個月平均七十五人餘に當る。經費は年々約二千四百圓なり。此他縣内各地に公私立の圖書館數多ありて、一般社會の智識普及に鮮からざる貢献をなしつゝあり。

新聞及雜誌

新聞及雜誌　縣下に於て刊行せらるゝもの二十五種ありて、其發賣數毎月平均最多きは紀伊毎日新聞和歌山新報等にして六七萬枚以上に達し、少きも二千を降らず。總計約三十萬に及ぶ。今左に其一覽表を掲げん。

題號	發行所	刊行數
和歌山新報	和歌山市十番丁和歌山新報株式會社	日刊
紀伊毎日新聞	和歌山市六番丁紀伊毎日新聞社	日刊
和歌山實業新聞	和歌山市元寺町和歌山實業新聞社	日刊
和歌山商報	和歌山市三番丁和歌山商報社	日刊
萬時報	和歌山市柳町萬時報社	月三回(不定)
新有田	有田郡湯浅町新有田社	月三回(一の日)
紀南新聞	日高郡御坊町紀南新報社	月六回(五、十の日)
牟婁新報	西牟婁郡田邊町牟婁新報社	月十回(三日毎)
熊野新報	東牟婁郡新宮町熊野新報社	月十五回(奇數日)
熊野實業新聞	東牟婁郡新宮町熊野實業新聞社	月十五回(偶數日)
遍照世界	伊都郡高野村遍照社	月一回(十五日)
紀和實業新聞	伊都郡妙寺町紀和實業新聞社	月三回(五の日)
日刊海南通信	東牟婁郡新宮町日刊海南通信社	月十五回(奇數日)
牟婁實業新聞	西牟婁郡淺村牟婁實業新聞社	日刊
日高時事	日高郡御坊町隆文社	月六回(三、八の日)
新熊野新聞	東牟婁郡新宮町新熊野新聞社	月一回(八日)

紀陽新報	和歌山市北大工町紀陽新報社	月三回(一の日)
田舍書報	西牟婁郡田邊町北田兼吉	月二回(二日、十五日)
木國青年	海草郡岡崎村木國青年社	月二回(五日、廿日)
極東時報	和歌山市小松原通五丁目極東時報社	月三回(不定)
新生命	西牟婁郡田邊町新生命社	月一回(五日)
事業報告	有田郡保田村帝國除蟲團	月一回(一日)
少年新聞	和歌山市十三番丁少年新聞社	月四回(毎土曜日)
南海思潮	和歌山市雑賀屋町東ノ丁南海思潮社	月二回(三日、十八日)
熊野日報	東牟婁郡新宮町熊野日報社	日刊

第八章　兵事

古の兵制

太寶令軍防令を見るに、凡諸國に軍團を置く、大抵五六郡に一團あり。其職員は團の大小に因りて一定せず。各一千人以上に、大毅一人小毅二人あり。其他主張校尉旅師隊正など謂ふ職ありて、兵士を檢校し、戎具を充滿し、

弓馬を調練する事を掌れり。此當時の隊伍の編制を見るに、凡そ兵は五人を伍とし、十人を火とし、伍十を隊とし、其弓馬に便なる者を騎兵隊とし、餘を歩兵隊とす。隊毎に、强壯者二人を簡び拏手に充つ。火毎に六駄馬を養ひ、兵士一人毎に、胡籙・太刀・刀子及糧米・鹽等を備へしめたり。而して兵士は交番を以て上京し、三年間禁衛の事に當る、是れを衛士と謂ふ。又邊境を守備するものを防人と名く、是れ古に於ける我國兵制の綱領なり。されば當國にも軍團の設けあり、又衛士の交番上京せしことも明なり。延喜式兵部式に、紀伊健兒六十人、又紀伊國甲二領、横刀五口、弓二十張、征箭二十具、胡籙二十具と見へたり。以て當時此國の軍事に對する負擔の程度を察すべし。

紀州人の武勇

由來山國の民、性質剛健にして、古來醇朴に、且勇武を以て聞ゆ。見ずや熊野の當國は全國中の山國にして、勇悍、忠義の念厚くして獨立心に富めり。

中世

民の精悍の氣、發しては海賊となりて、威を海上に振ひ。義兵となりては、南朝孤弱の危きを援く。中古以來、湯淺氏夙に武勇の家として、中紀に據りて其名近畿に振へり。又戰國の世、海草の民は顯如を援けて織田氏の兵を破

戰國時代

り、其鋭を挫きて其威を逞ふする能はざらしむ。天正の時、秀吉畿内の勢力を盡し來りて此國に加ふるや、國内の諸豪悉く一致して、敢然として死を以て是れに抵抗し、水火の慘害を蒙りて猶且辭せざるの氣勢を示したりき。斯くて元和假武以來、近畿地方の早くも文弱の弊に陷り士氣甚だ振はざるに反して、和歌山藩は昂々乎として猶克く一種の氣風を維持して毫も柔弱の風に感染することなかりき。明治維新となりて後は、大阪鎮臺に屬せられ、彼十年の役に於ては、各地に轉戰して功あり。日清の戰役に際しては、留守の任に當りて、我軍をして後顧の憂なからしめ、日露の戰役に於ては、第二軍に編せられて、小川陸軍中將指揮の下に、金州、南山等の激戰に、勇敢猛烈なる行動を發揮して、武功を奏せしを始めとし、各所に赫々たる武勳を樹てたるは、世人の夙に明知する所なり。

明治時代

日露戰役後、第四師團第三十二旅團司令部を海草郡湊村に設置せられ、四十二年三月、第六十一聯隊の當地に衛戍することゝなれり。又重砲兵第三聯隊は、海草郡加太町字深山にありて、淡路の福良、由良と共に、由良の要塞を

軍事上の位置

なすものにして、加太町より和歌浦町に至る沿岸は要塞地帶として警固せらるゝ所なり。猶日の御崎及潮岬には、海軍望樓ありて、沿海の監視及警戒をなせり。以上の如く、本縣は是れを兵要上より觀察するに、實に我國の中腹たる、近畿地方の防備を完ふすべき要衝に當り、愈重要なる軍事上の位置を占むるものと謂ふべし。

徵兵

徵兵に關しては、明治四十一年度にありては、壯丁人員壹萬九百餘人ありて此中徵集人員は、陸軍現役千五百九十五人、同補充兵役二千二百十八人、海軍現役百二十一人、同補充兵役十二人あり。總計三千九百四十六人に及ぶ。

海軍志願兵は、志願者總て二百四十七人ありて、此中檢査成績を見るに、合格者七十四人なり。而して陸海軍軍人數は、陸軍總て二萬七千餘人、海軍二千三百八十餘人を數ふべし。

第九章　交　通

第一節　道路及鐵道

驛

道路及諸車

道路　大化の制に「凡給驛馬傳馬依皆鈴傳符剋數」とあり。降りて大寶二年の紀に「始置紀伊國賀陀驛」とあり。是れ當國驛家の史に見へたる始なり。奈良の朝頃迄は南海道は紀伊・大和の境上なる、眞土山を越へて、伊都郡荻原驛に至り、是より名草郡名草驛を經て、海部郡賀太驛に至り、夫より海上淡路國由良驛に至りしものなり。桓武天皇都を平安京に遷し給ひて後、延暦十五年の勅に「南海道驛路迥遠使令難通因廢舊路通新路」とありて、山城國山崎驛より、河内國津積・槻本の二驛を經て、本國伊都郡紀見峠を超へ、荻原驛に至りしものゝ如し。延喜式に「紀伊國驛馬荻原賀太各八匹」とあるは、二驛が南海道中重要なる驛家たるを見るべし。

當縣は近畿地方の一隅に僻在して、加ふるに山嶽概ね起伏せるの地なるを以て、昔時群雄割據の時代にありては、好個の要害地なりしと雖も、今日商工業發達して、運搬交通の頻繁なる時代となりては、大に不便不利の感なくんばあらず。されば巨萬の費用を投じて、縣下各所に道路を開通修造して、今や國道一條縣道二十八條あり。此總延長里數二百二里に上り、此内車輛の通ずべき道程は、百四十一里に達せり。此他に郡道里道數多相通じ、さしも嶮峻なりし處も、人馬相通じ車輛相通ふに至れり。諸車につきて見るに、人力車は總計千七百餘輛あり。馬車十四輛。荷車約壹萬。自轉車二千百餘、合計壹萬七千九百餘輛に達す。

國道

是より管内に於ける主要道路を記さんに、國道大阪街道は、和歌山市より東方に出で、和佐村を過ぎ、田井之瀬橋を渡りて、紀の川の右岸に出で、川永村を經て、山口村大字瀧畑より、和泉山脈を越へ大阪府に入る。管内を通ずること三里三十二丁、凡て車輛を通ずべし。以下縣道を表示して其一般を示さん。

縣道

大和街道　和歌山市本町より、大和國界迄十二里。

熊野街道　一は和歌山市本町より、東牟婁郡新宮町まで

一は海草郡川永村大字川邊より、同郡内海村大字鳥居まで、一は西牟婁郡田邊町より、東牟婁郡那智村大字濱の宮まで九十六里。

淡路街道

一は和歌山市本町より、海草郡加太町大字加太まで、一は那賀郡粉河町より、海草郡西脇野村大字西庄まで十里。

高野街道

一は伊都郡紀見村大字柱本より、同郡高野村大字高野山まで、一は粉河町より高野山まで、一は同郡天野村大字志賀より、同郡笠田村大字まで十三里半。

龍神街道

和歌山市本町より、日高郡龍神村大字龍神まで十七里。

青岸街道

和歌山市本町より、海草郡湊村大字湊青岸まで廿九丁。

和歌街道

和歌山市十一番町より、和歌浦町大字出島迄壹里卅一丁。

粉河街道

粉河町粉河寺大門前より、粉河停車場まで十三丁。

窟山街道

海草郡宮前村大字手平より、同郡三田村大字和田迄廿七丁。

根來街道

那賀郡岩出町大字清水より、同郡根來村大字押川紀泉國界迄壹里三十四丁。

紀三井寺街道

海草郡鳴神村より、同郡和佐村大字布施屋迄一里十丁。

鳴神街道

海草郡野崎村大字北島より、同郡楠見村大字善明寺まで三十一丁。

八幡街道

海草郡四箇郷村大字有本より、同郡有功村大字六十谷まで二十二丁。

日方街道

那賀郡東野上村大字小畑より、海草郡日方町迄二里五丁

船戸街道

那賀郡東野上村大字勭木より、同郡小倉村大字上三毛まで二里卅二丁。

隅田街道

伊都郡紀見村大字柱本より、同郡隅田村大字芋生まで二里十一丁。

保田街道

有田郡藤並村大字明王寺より、同郡八幡村大字三田まで八里十五丁。

比井街道

日高郡御坊町より、同郡比井崎村大字比井まで二里廿八丁

朝來街道

西牟婁郡栗栖川村大字眞砂より、同郡朝來村大字朝來ま